

# 高松市茶臼山古墳

2014.11

香川県教育委員会

# 序文

高松市茶臼山古墳は、讃岐の古墳時代前期を代表する前方後円墳の一つです。全長約75mを測る規模、鍬形石や鉄製武器などの豊富な副葬品は、詳細が不明な点が多い讃岐の前期古墳の中にあって貴重な資料といえます。しかしながら、昭和44年の現地調査の終了後、速やかな整理作業や調査報告書の刊行を行うことができず、古墳の歴史的な価値付けを十分に行なうことができない状態でしたが、この度、文化庁をはじめ当時の調査関係者の方々などの協力もあり、報告書を刊行する運びとなりました。

現地調査終了後、44年の歳月が過ぎていることもあります、当時の知見を十分に活かしきれていらない点もあろうかと思いますが、本報告書の刊行が、高松市茶臼山古墳の歴史的評価や保存と活用に役立つことを祈念しております。

最後になりましたが、本報告書を作成するにあたり、文化庁、地元自治体の高松市教育委員会、当時の調査関係者をはじめとする関係各位に対して、感謝申し上げます。

香川県埋蔵文化財センター

所長 真鍋昌宏

# 例 言

本書は、香川県高松市東山崎町・前田西町・新田町に所在する「高松市茶臼山古墳」の発掘調査報告書である。

1. 発掘調査及び遺物整理事業は、国庫補助事業として香川県教育委員会が主体となり実施した。本報告書作成に関わる出土遺物及び記録類の整理等の報告書作成作業は平成 25 年度に、刊行業務は平成 26 年度に香川県埋蔵文化財センターを担当として実施した。なお、整理後の出土遺物・実測図・写真等は香川県埋蔵文化財センターが所蔵・保管している。
2. 発掘調査及び遺物整理事業実施に伴う組織等については、第 2 章に記した通りである。
3. 本書の執筆は、主として遺物整理事業担当の信里が行ったほか、第 2 章第 1 節調査の経緯と経過については発掘調査担当の松本豊胤氏、第 3 章第 1 節遺構に関する記述については調査参加者の高畠知功氏が行った。

また、出土古人骨についての分析については、高知大学教育学部清家章氏に依頼し、その成果について第 4 章第 3 節に掲載した。文責については、文末に記載した以外は信里が執筆した。

4. 本書に使用した水準については、後円部仮基準点からのマイナス値であり、標高値となっていない。
5. 第 2 章図 3 については、高松市都市計画図を使用した。
6. 本文中における遺構・遺物等の名称及び用語については、執筆者の意向を尊重し、敢えて統一を行っていない部分がある。また、遺構規模の推定等の理解についても同様である。
7. 発掘調査及び本報告書作成に際し、文化庁をはじめ、多くの機関や方々にご指導、ご協力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。(敬称略、五十音順)

高松市教育委員会 高松市歴史資料館 香川県立ミュージアム

井口喜代一 泉川義茂 大久保徹也 川畑 聰 国方松次 杉山和徳 高上 拓  
西尾 弘 西澤昌平 林 正憲 久本 福 藤沢 清 藤沢貴美子 藤沢 伝 村上恭通  
渡部明夫

## 本文目次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境	
第1節 遺跡の立地	1
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査の経緯と経過	
第1節 発掘調査・復元整備事業の経緯と経過	8
第2節 整理作業の経過	12
第3章 遺構・遺物	
第1節 遺構	14
第2節 遺物	68
第4章 総括	
第1節 墳丘・埋葬施設の特徴	99
第2節 出土遺物の特徴及び年代	102
第3節 高松市茶臼山古墳出土人骨の観察	114
第5章まとめと課題	117

### 挿図目次

図1 遺跡の位置	1	図38 配石土坑平・断面	64
図2 高松平野の1m等高線図と古墳前期前方後円墳	2	図39 ZC3T石組遺構平・断面	65
図3 周辺の遺跡	4	図40 KC1T炭化物集中遺構平・断面	66
図4 久米山丘陵における既往の調査区	5	図41 画文帶神獸鏡三次元計測画像(1:1)	68
図5 高松市茶臼山古墳と久米池南遺跡B地区との位置関係	6	図42 画文帶神獸鏡三次元計測画像及び断面(1:1)	69
図6 墳丘平・断面	15~16	図43 鍬形石	71
図7 トレンチ配置及び検出遺構平面	17~18	図44 鉄製品その1	73
図8 KC1T北・南壁断面	19~20	図45 鉄製品その2	74
図9 ZL3T西壁断面	21	図46 鉄製品その3及び玉	75
図10 ZL3T遺物出土状況	22	図47 土師器	76
図11 ZC2T南壁断面及び第Ⅲ主体部断ち割り断面	24	図48 第I主体部副葬品配置復元	77
図12 ZC1T南壁・ZL1T南壁及び西壁断面	25~26	図49 大型鉄鍔様鉄製品	79
図13 ZR1T北壁断面	28	図50 鉄劍・鉄鍔・鉄斧・ヤリガンナ	80
図14 ZRT断面	29	図51 不明鉄製品・玉	81
図15 前端部平面	31	図52 第II主体部副葬品配置復元	82
図16 前端部各断面	32	図53 第IV・V・VI・VIII主体部出土埴輪・土師器・弥生土器	83
図17 ZR1T前方部端葺石・埴輪出土状況	33	図54 KL3T・ZC3T・ZL3T出土埴輪・弥生土器	85
図18 前端部敷石状遺構平・断面	34	図55 ZC1T・ZL1T出土埴輪	86
図19 後円部平面	35	図56 ZL1T・ZR1T出土埴輪・土師器・弥生土器	87
図20 後円部上層礫群平面	36	図57 ZL1T・ZR1T間拡張区出土埴輪(その1)	89
図21 第I・II主体部被覆粘土平面及び第I主体部墓壙北西部土師器群出土状況	37	図58 ZL1T・ZR1T間拡張区出土埴輪(その2)	90
図22 第I主体部墓壙平面と第II主体部との位置関係	38	図59 ZL1T・ZR1T間拡張区・ZR2T・ZR3T出土埴輪・土師器他	91
図23 後円部断面	39~40	図60 前端部敷石状遺構出土埴輪・土師器	94
図24 第I・II主体部平面(天井石・裏込石材検出状態)	41~42	図61 出土位置不明の埴輪(その1)	95
図25 第I・II主体部横断面	43~44	図62 出土位置不明の埴輪(その2)	96
図26 第I主体部平面(壁体下部検出段階)及び縦断面	47~48	図63 出土位置不明の埴輪(その3)及び後円部上出土遺物他	97
図27 第I主体部壁体下部中位円礫群平面	49	図64 ZR2T出土鉄製品	98
図28 第I主体部平面(壁体下部)と基底石材の位置関係	50	図65 墳丘規模想定図	99
図29 第I主体部基底石材及び礫群平面	51	図66 第I主体部築造過程模式図	101
図30 第I主体部副葬品出土状況平面	52	図67 土師器甕型式分類	103
図31 第II主体部平・断面	55	図68 土師器広口壺型式分類及び甕型式との相関関係	105
図32 第III主体部平・断面	57	図69 編年	107
図33 第IV主体部平・断面	58	図70 塩輪復元模式図	109
図34 第V主体部平・断面	60	図71 船岡山古墳出土埴輪	111
図35 第VI主体部平・断面	62	図72 快天山古墳出土埴輪	112
図36 第VII主体部及び配石土坑平面	63	図73 古墳編年と土器編年の対応関係	113
図37 第VIII主体部平・断面	64	図74 人骨鑑定部位	115

## 写真図版目次

- 図版 1 墳丘  
 図版 2 墳丘・前方部  
 図版 3 前方部・前端部  
 図版 4 前方部・前端部  
 図版 5 後円部第 I ・ II 主体部  
 図版 6 後円部第 I ・ II 主体部  
 図版 7 後円部第 I ・ II 主体部  
 図版 8 後円部第 I ・ II 主体部  
 図版 9 後円部第 I ・ II 主体部  
 図版 10 後円部第 I 主体部  
 図版 11 後円部第 I 主体部  
 図版 12 後円部第 I ・ II 主体部  
 図版 13 後円部第 I ・ II 主体部  
 図版 14 後円部第 I 主体部  
 図版 15 後円部第 I 主体部  
 図版 16 後円部第 I 主体部  
 図版 17 後円部第 I 主体部  
 図版 18 後円部第 I 主体部  
 図版 19 後円部第 I 主体部  
 図版 20 後円部第 I 主体部  
 図版 21 後円部第 I 主体部  
 図版 22 後円部第 I 主体部  
 図版 23 後円部第 I 主体部  
 図版 24 後円部第 I 主体部  
 図版 25 後円部第 II 主体部  
 図版 26 後円部第 II 主体部  
 図版 27 後円部第 II 主体部  
 図版 28 後円部第 II 主体部  
 図版 29 第 III 主体部  
 図版 30 第 IV ・ V ・ VI 主体部  
 図版 31 第 VI ・ VII 主体部 配石土坑  
 図版 32 整備 第 I 主体部  
 図版 33 整備 第 I 主体部  
 図版 34 整備 第 I 主体部  
 図版 35 整備 第 I 主体部  
 図版 36 整備 後円部・前方部  
 図版 37 出土遺物 第 I 主体部 鉄器・土師器  
 図版 38 出土遺物 第 I 主体部 土師器・鍬形石・ガラス小玉  
 図版 39 出土遺物 第 I 主体部 画文帶神獸鏡  
 図版 40 出土遺物 第 II 主体部 鉄器・ガラス小玉  
 図版 41 出土遺物 第 I 主体部 画文帶神獸鏡 X 線  
 図版 42 出土遺物 第 I 主体部 鉄器 X 線  
 図版 43 出土遺物 第 I ・ II 主体部 鉄器 X 線  
 図版 44 出土遺物 第 I ・ II 主体部 鉄器 X 線  
 図版 45 出土遺物 第 II 主体部 鉄器 X 線  
 図版 46 出土遺物 土師器・埴輪  
 図版 47 出土遺物 円筒埴輪口縁・頸部・透孔・線刻  
 図版 48 出土遺物 円筒埴輪胴部・突帯・線刻・透孔  
 図版 49 出土遺物 円筒埴輪胴部・突帯・透孔  
 図版 50 出土遺物 円筒埴輪底部  
 図版 51 出土遺物 第 I 主体部 人骨西群  
 図版 52 出土遺物 第 I 主体部 人骨東群  
 図版 53 出土遺物 第 III 主体部 人骨

## 付表目次

- 表 1 各型式の伴出状況  
 表 2 人骨鑑定結果  
 表 3 土器・埴輪観察表 1  
 表 4 土器・埴輪観察表 2  
 表 5 土器・埴輪観察表 3  
 表 6 土器・埴輪観察表 4

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

## 第1節 遺跡の立地

高松市茶臼山古墳が存在する香川県東部の高松平野は、主に香東川によって形成された扇状地性の沖積平野である。基礎的な地形環境は、南側に「讃岐山地」と呼ばれる山地部が、その北側に扇状地の平野部が発達している。平野部は南側の扇状地帯と、その北側の臨海部に頻繁な沖積作用を受ける三角州に区分されている。現在、扇状地帯は比較的平坦化しているが、発掘調査成果や現地表面の微起伏からみて、古代条里型地割の施

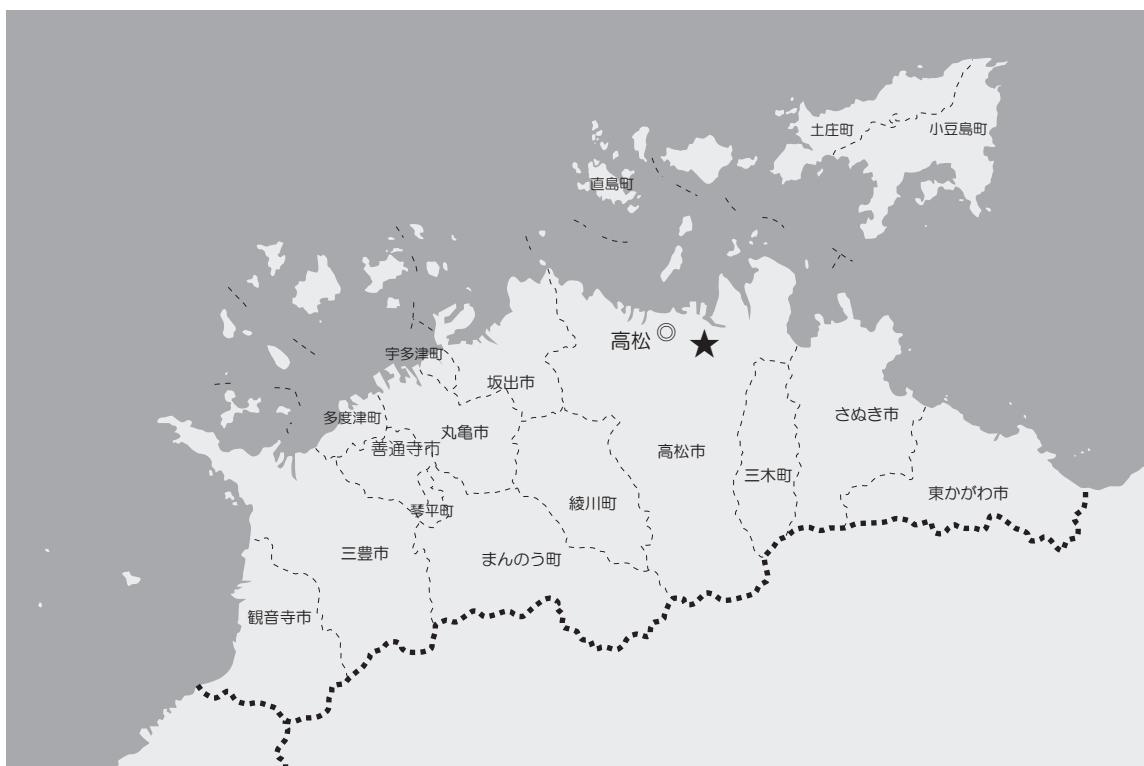
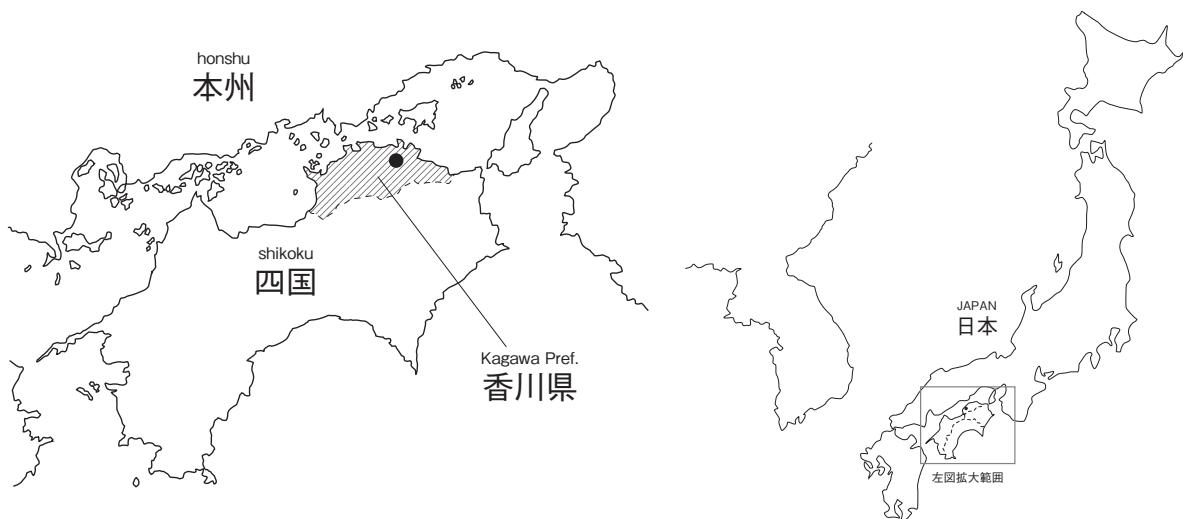


図 1 遺跡の位置



図2 高松平野の1m等高線図と古墳前期前方後円墳

工以前は、旧中洲や自然堤防からなる微高地と旧河道や後背湿地などの低地が入り乱れて存在する状態にあつたと考えられる。扇状地を流れる旧河道は、縄文前期から縄文後・晩期にかけて埋没している事例が知られており、比較的平坦化した弥生時代前期には後背湿地となった旧河道上面や微高地の周辺部において灌漑水田が一斉に拓かれ、集落形成の基盤となった。三角州帯の形成はこの間順次行われたと考えられるが、臨海部の発掘調査事例が少なく、旧汀線などの推定を含めて不明な点が多く残る。

平野部やその周辺には、花崗岩からなる低山が存在する。これらの低山は、石清尾山・峰山などの上位に安山岩・凝灰岩が乗ることで山頂部が平坦となる「ビュート」と呼ばれるものが多く存在しているが、高松市茶臼山古墳が乗る平野東部の久米山は、東側の立石山・前田山から連続し、花崗岩から構成される標高 52.2m の低山である。こうした高松平野の周辺部の低山上には、古墳時代前期から中期初頭かけて時期を違えながら集落が多く営まれ古墳築造の基盤となった平野を取り囲むように前方後円墳が築造されている(図 2)。高松市茶臼山古墳は、その一つということになる。

前方後円墳(群)の群別には、取り掛かりとして水系を分析単位として用いられる。高松市茶臼山古墳が乗る久米山は、新川流域に属し、現在の海岸線より約 4 km 内陸側となる。17 世紀前半の『讃岐国絵図』や 18 世紀初頭の『南海通記』の記載を参照すると、近世には現在の高松市新田町小山付近まで瀬戸内海が湾入していたようであり、新川河口付近は 17 世紀以降における干拓事業が行われるなど今まで人口的な地形改変が著しい。また、久米山西側の新川右・左岸には条里型地割が認められず、三角州帯として分類されている(高橋 1992)。高松市茶臼山古墳が所在する新川下流から河口付近は、弥生時代以降に集落・水田が多く拓かれた平野中央部の扇状地とは異なり、古代以降も新川の沖積作用を被る堆積環境下にあったと考えられ、生産性の高い地形面は狭く限られていることとなる。

したがって、高松市茶臼山古墳の築造基盤・背景を考えるためにには、高松平野全体の前方後円墳や集落との関係を常に意識する必要があるといえよう。

## 第 2 節 歴史的環境

**旧石器時代** 高松市茶臼山古墳に隣接する久米池南遺跡において、ナイフ形石器が採集されている。周辺の低丘陵上に遺跡が展開する可能性が高い(高松市教委 1989)。

**縄文時代** 前田山の東麓の小山・南谷遺跡(香川県教委 2006)、同南麓の前田東・中村遺跡(香川県教委他 1995)において、旧河道や開析谷より後期を中心とした遺物が出土している。高松平野全域においても当該期の居住遺構が確認された遺跡は皆無に近いが、遺物の出土が確認できる遺跡は山麓と扇状地の変換点付近多く認められる傾向がある。小山・南谷遺跡では山地域では落とし穴群がみられるとともに、打製石斧が多量に出土する傾向があり、根茎類の採集や狩猟の場としての山地と農耕の開始に伴う平地利用の高まりに呼応して、両者の境界付近に集落が多く営まれた結果を反映していると考えられる。晩期後半の突堤文土器期には、林・坊城遺跡で木製農具や小規模な灌漑水路が出土するなど、農耕社会の形成の基盤となる水田稻作が徐々にではあるが浸透していくことが窺える。

**弥生時代** 前期は、小山・南谷遺跡、前田東・中村遺跡などで縄文晩期末葉の突堤文土器期から継続する扇状地扇央部や平野中央部の扇端部での遺跡立地が認められる一方で、久米山北部の諏訪神社遺跡においても溝が確認されており、丘陵上に立地する集落も存在する。この時期に中心的な存在となるのは平野中央部に存在する天満・宮西遺跡(高松市教委 2002)などの環濠集落を中心とした遺跡群であり、水田稻作の本格的な開始



図3 周辺の遺跡

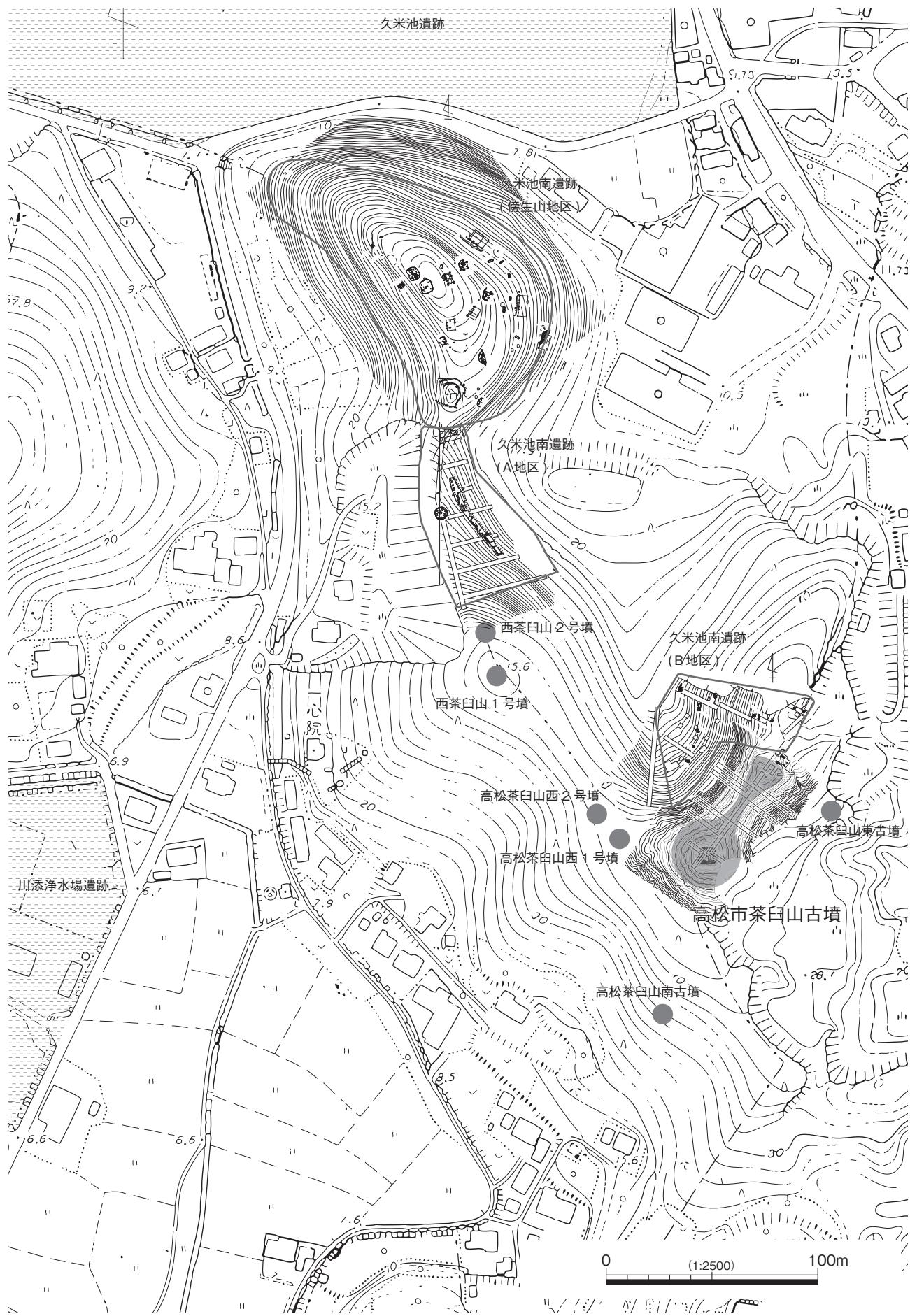


図4 久米山丘陵における既往の調査区

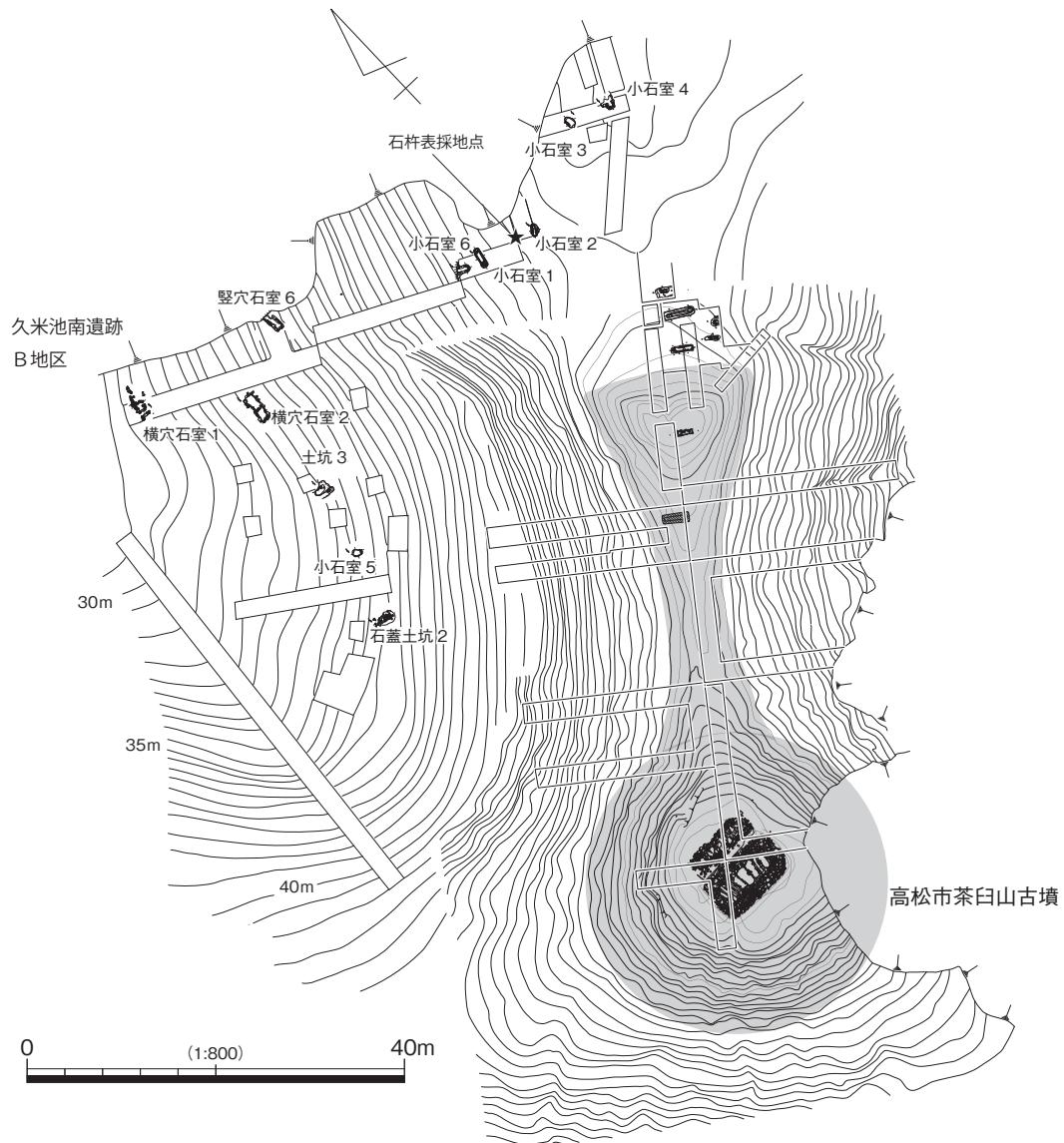


図5 高松市茶臼山古墳と久米池南遺跡B地区との位置関係

とともに基幹的灌漑水路とセットとなる集落・遺跡群の形成が進む。中期前半期の遺跡形成は不明確であるが、中期後半期には久米池南遺跡を中心に集落の形成が著しい(高松市教委1989)。この久米山丘陵では、北部の諏訪神社遺跡や久米山墓地周辺においても遺構が多く確認されており、その形成は後期前半まで継続する。丘陵南部の久米池南遺跡側では住居群、北部の久米山遺跡群や諏訪神社遺跡では土器棺墓・土壙墓群が営まれるなど、明確な区分が認められる。この中期後半から後期前半期にかけては、小山・南谷遺跡や前田東・中村遺跡においても集落が営まれ、高松平野東部丘陵を単位とした遺跡群の形成が進む。

こうした遺跡群は弥生終末期には高松平野中央部の石清尾山・峰山南側の旧香東川下流域に集中し、平野周辺の遺跡群は衰退へと向かう。高松市茶臼山古墳周辺においても集落の形成は低調であり、前田東・中村遺跡などで旧河道中から遺物が出土しているに過ぎない。

**古墳時代** 古墳前期には、鶴尾神社4号墳を先駆けとして前方後円墳の築造がすすむ。この最初期の鶴尾神社4号墳は、弥生終末期に集落、遺跡群の形成が活発であった旧香東川下流域に隣接している点は注意される。鶴尾神社4号墳の後、石清尾山・峰山では猫塚、鏡塚、姫塚といった積石による盟主墳が順次築造されていく。

高松平野の縁辺部では、北東部の屋島南西麓の浜北2号墳や、南部の瘤山2号墳、舟岡山古墳などの盛土墳が、短発的に築造される。高松市茶臼山古墳もその一つであるが、全長が約75mを測る墳丘規模や長大な堅穴石槨に納められた豊富な副葬品から、特異な存在として認識されてきた。こうした、積石による連続的な築造をみる石清尾山古墳群と、それを取り巻く形で地点を変えながら短期的に消滅を繰り返す盛土墳からなる前方後円墳の築造は、古墳時代前期の高松平野の政治動向を示すものと考えられる。しかし、これら高松平野の前方後円墳も、前期末葉とみられる今岡古墳を最後に消滅する。その後の中期から後期前半にかけては、平野南西部の御廐天神社古墳（高松市教委2009）や南部の平塚古墳など、帆立貝形や円墳を基調とした盟主墳が築造されるが、全体として前方後円墳の築造は低調となる。

後期後半から終末期には、久本古墳、山下古墳などの大型横穴式石室墳が築造される。久本古墳は、直径36m円墳で、周溝と周庭を備える。横穴式石室は玄門立柱式の構造をもち、玄室床面積は約12m<sup>2</sup>を測り、出土須恵器からTK209型式併行期の築造が推定されている（高松市教委2004）。山下古墳は、玄門・前壁構造からみて久本古墳に若干遅れて築造された横穴式石室墳である（香川県教委1980）。床面積は約7m<sup>2</sup>とやや狭くなるが、石室構造からみて久本古墳と系列関係にあるとみられる。本時期には、平野西部の勝賀山南麓の神高古墳群においても、大型横穴式石室墳の築造が進む（高松市教委2005）など、平野の東西両側において大型横穴式石室墳の築造がみられることとなる。

以上、高松市茶臼山古墳が所在する高松平野には、主に農耕社会の成立から階級社会の成立までの過程を跡付ける多くの考古資料が蓄積されてきている。高松市茶臼山古墳は、これらの過程において、前方後円墳に象徴される政治的秩序が及んだ最初期の様相を示す考古資料ということができ、本報告書の刊行によって歴史叙述が進むことが期待される。

### 図3の遺跡番号

- 1.高松市茶臼山古墳 2.高松茶臼山南古墳 3.高松茶臼山西2号墳 4.高松茶臼山1号墳 5.西茶臼山1号墳 6.西茶臼山2号墳  
7~11.久米山1・2・4・5号墳 12.久米山3号墳 13.諏訪神社古墳 14.北山西古墳 15.北山古墳 16.滝本神社古墳 17.久本山東峰古墳 18.丸山1号 19.丸山2号 20.大谷山古墳 21.岡山古墳群 22.山下古墳 23.久本古墳 24.山下廃寺 25.久米池遺跡  
26.諏訪神社遺跡 27.諏訪神社遺跡御旅所地区 28.久米山遺跡群東墓地地区 29.久米山遺跡群西側斜面地区 30~31.久米池南遺跡 33.川添淨水場遺跡 34.新池遺跡

香川県教育委員会1980『高松市山下古墳調査報告』

高松市教育委員会1989『久米池南遺跡発掘調査報告書』

香川県教育委員会他1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 前田東・中村遺跡』

高松市教育委員会2002『太田第2土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 天満・宮西遺跡～集落・水田編～』

高松市教育委員会2004『高松市指定史跡 久本古墳－保存整備・市道新田町61号線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

高松市教育委員会2005『市道山口1号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 神高古墳群－神高池北西古墳－』

香川県教育委員会2006『県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小山・南谷遺跡II』

高松市教育委員会2007『諏訪神社遺跡 久米山遺跡群』

高松市教育委員会2009『石ヶ鼻古墳 御廐天神社古墳』

## 第2章 調査の経緯と経過

### 第1節 発掘調査・復元整備事業の経緯と経過

1967年（昭和42年）番の州埋め立てで沙弥島が陸続きになり、次の年香川用水事業が起工し、1969年（昭和44年）には国道11号高松北バイパスが開通するなど、県下でも各地で大規模な土木工事が進展し、埋蔵文化財が危機に瀕するようになってきた。

高松市茶臼山古墳も其の例にもれず、周辺で土砂採取工事が進展し、古墳の墳丘にまで迫りつつあった。ここに古墳が所在することは、古くから知られており、寺田貞次氏が、高松経済専門学校（現在の香川大学経済学部）教授として在任された、大正15年から昭和20年までの間に香川県下で蒐集された考古資料の一部は、現在金刀比羅宮学芸館に寄贈され保存されているが、其の中に木田郡前田村・茶臼山で採集した弥生式土器片2点がある。また1935年（昭和10年）に「讃岐に於ける前方後円墳」の中に前田茶臼山として紹介している。その他「木田郡誌」にも「東茶臼山古墳・古高松、川添、前田三村の境界線上にありて、東北に向かえり、前方後円墳にして、付近に海辺より持ちきたれりと思しき葺石散乱し、土器及び埴輪の破片を見る。古墳の長さ65米、後円部径20.7米、前方部幅18米あり」とされており、本古墳は前田茶臼山古墳とか、東茶臼山古墳とかの名称で注目されていた。

1964年（昭和39年）10月、高松市文化財専門委員の小竹一郎氏は、茶臼山古墳周辺での土砂採取が古墳の近辺にまで及んでいることを県、市の教育委員会に報告した。報告を受けた県、市教育委員会は、早速土砂採取業者との間で古墳の保存についての協議がなされた。協議によつて業者は古墳近辺での土砂採取は当分見合わせるということで保存についての理解を得ることができた。しかしその後も土砂採取は再開され、

1969年（昭和44年）2月には墳丘の一部が崩壊す



発掘調査風景

るに至った。そこで県、市、地主の間でたびたび協議がおこなわれたが保存についての理解は得ることができず、現状では墳丘の自然崩壊はまぬかれ得ないということで、緊急発掘調査を行うことになった。

県教育委員会では、文化庁と協議の結果補助金が認められ、昭和44年度の補助事業として緊急発掘調査を実施することとなった。（松本）

注1 松浦 正一 香川県古墳調査便覧（故寺田貞次氏蒐集香川県考古学参考資料目録）  
昭和26年10月1日

注2 寺田 貞次 「讃岐における前方後円墳」『考古学雑誌』25-5 昭和10年

注3 木田郡教育部会編 木田郡誌 昭和15年

### 発掘調査の体制

発掘調査は香川県教育委員会が主体となり、高松市教育委員会、香川県文化財保護協会の共催の下、調査団を組織として実施した。

調査団の組織は次の通りである。

調査団長	香川県教育委員会 教育長 久保隆美
副団長	高松市教育委員会 教育長 三木嘉光
	香川県文化財保護協会会長 津島惣平
調査員	香川県文化財専門委員 高橋邦彦 森井 正 六車恵一
	香川県文化財臨時専門委員 石川 巍 中原耕男 藤井洋一 浅野正尋
	高松市文化財専門委員 大西正男 小竹一郎 細渕福太郎
調査補助員	国学院大學：高畠知功、鈴木重信、石田彰紀、柳瀬照彦、溝本保利、松本健朗、石口文子、倉田恵子、四国学院大学：秋山純子、請川富子、岡田美都子、小林悦子、高島千恵、近本和司、西谷れい子、美濃保男、三井敏子、三谷伸子、宮武京子、三木健生、立命館大学：岩田 隆、香川大学：岩本正三、谷 文子、立正大学：溝淵茂樹、大佐古直生、広島大学：古瀬清秀、徳島大学：亀山正則、京都女子大学：古川知永子、高松市：桂 真幸、高松東高等学校：芦沢元俊、桜谷純子、明善高等学校教員 善通寺第一高等学校歴史部、高松第一高等学校地理歴史研究部
記録8 ミリ担当	亀井芳文
事務局	香川県教育委員会社会教育課 課長 松本正義 課長補佐 那須 猛、文化財担当 松本豊胤、宮本守也 高松市教育委員会社会教育課、豊島道治、秋山年広、十河和也

#### 発掘調査費

事業費	1,000,000 円
国庫補助金	400,000 円
県費	400,000 円
市費	200,000 円

#### 調査の経過（調査日誌の抜粋）

7月19日	墳丘上に集合、調査の進め方について打ち合せ。	第1主体部の墓壙とも思われるものの検出を行う、4.5×7.5mくらい、県教育長見学に来る（岩本）
7月20日	鋤入れ式に続いて墳丘上の樹木の伐採、表土の清掃。あわせてトラバースを組み後円部から測量開始。（亀山正則）	7月29日 後円部の粘土面の検出、一応第I主体部部の平面を平板にとる、問題は第二主体部との接点である。〔高畠〕前方部はZLIT拡張部の調査、その後セクションをとる（三谷伸子）
7月21日	後円部西側-500cmまで測量、前方部のZRITとZLITにトレンチを入れる。（亀山）	7月30日 第1主体部・第2主体部の関係について追求。
7月22日	後円部の測量、前方部のトレンチから葺石らしきものが検出されたが、明確にできない（古瀬清秀）	7月31日 KRIT及びKL3T・第II主体部部のセクションを取る（岡田）。前方部では、ZLITとZRITの間を拡張し、埋葬施設らしい遺構が検出された（三井敏子）
7月23日	前方部の地形測量を終える。後円部のトレンチを掘り下げる。中心トレンチから粘土にくるまれた石組が出土、石室であろう。（高畠知功）	8月1日 後円部写真撮影。その後水糸主軸2本、横断4本設定。前方部ZR3T、ZR4T、ZL3T、ZC2TにかかるZC2Tにおいては箱式石棺が検出される。（高畠）
7月24日	くびれ部にZR4Tを設定し掘りはじめる。埴輪の破片が出土、午後後円部の測量にまわる。（岡田美都子）トレンチZL4T、ZL5T、ZR3Tを設定。	8月2日 後円部の粘土剥がしにかかる。第II主体部部の平面図を取る（請川富子）前方部ではZCITの調査、第III主体部部の箱式石棺を検出、実測にかかる（石田彰紀）
7月25日	本日より後円部に重きを置いて作業をすすめる。	8月3日 後円部の粘土層を剥がす。
7月26日	後円部KRITのセクション図作成、終了後粘土面の清掃にかかる。凹凸が激しい。（鈴木重信）	8月4日 台風接近で昼から休み、見学に見えた斎藤忠先生を交えて懇談。
	被覆粘土を検出していくと、2基の埋葬施設が確認された。この2基の関係について構築面から追求をすることとする（岩本正二）	8月5日～8月8日 後円部の粘土層の剥離及び第I主体部部の蓋石の平面及び縦横断面図作成。あわせて前方部の調査継続。
7月27日	D区KCITとKRITの拡張区を掘り下げる。確認されている灰白色の固い壁面の北東側は隅丸形であることが確認された。（鈴木重信）	8月9日 チエンブロックを用いて第1主体部の蓋石を取り除く、石室は小口積みであった。南側中程の側壁が崩壊していた。床面に頭蓋骨、直刀などを見ることができた。（高畠）
7月28日		

## 第2章 調査の経緯と経過

8月10日～8月16日

第I主体部床面の清掃、遺物の検出、写真撮影、分布図作成にあわせて遺物の取り上げ。その後適宜側壁の実測にかかる。

前方部についてはトレンチを拡張し、前方部の裾に落ち込みを確認。実測図の作成。

8月17日

第II主体部の蓋石を取り除く。写真撮影後石室の清掃、東より北側壁に接して鉄製品検出。

第I主体部部石室平面の作成。

8月19日

第I主体部の石室平面図及び側壁の実測終了。横断面図の作業にかかる。第II主体部部の床面平面図作成。

8月20日

KC2Tの横断面図作成、四国学院の方々の積極的な姿勢に感動しました。

8月21日

第II主体部・昨日に続いて平面図作成、第I主体部部横断セクションA地区と横断B、CKC2Tを作成。

(岡田美都子)

8月24日

第I主体部の床面分布図作成〔高畠〕第II主体部部・写真撮影その後、側壁の実測。(鈴木)

前方部ZC3Tの掘り下げ、石組を検出。(石田)

8月25日

第I主体部粘土床の掘り下げ、ガラス製小玉検出、剣を取りあげる。(鈴木)

前方部ZC3T内の石組の実測後写真撮影。(石田)

8月26日

前方部に第7主体部検出、粘土層で縦2.2m、横0.8m、写真を撮る。その後平板測量。(石田)

後円部断面図継続、KR1T、A横断、北壁A横断後ごめの写真撮影。(西谷れい子)

8月27日

第II主体部内部、遺物出土状態の写真撮影、その後遺物分布図を作成しながら遺物の取り上げ。(鈴木)

8月28日

後円部横断面図作成続行。

8月29日

第II主体部遺物分布図続行あわせて遺物取り上げ。

8月30日

本日をもって、一時調査は終了とし、大半の学生は自宅へ帰省することとなった。

8月31日

本日から第2次調査に入ることとし、残留できる学生は調査を継続することとなった。

第II主体部、石室の縦、横断面図作成、その後東壁、南壁の図面を見る。(鈴木)

9月1日

第II主体部・南壁の実測を行う(鈴木)

午後図面の整理を行う、方位とかレベルポイントなどに注意書きを必ず入れるようにチェックしていく。(請川富子)

9月2～4日

後円部の縦・横断部の実測に全精力を注ぐ

KC2Tのセクションを取る、側壁と奥壁の石が非常に多く割れていたのが気にかかる。奥壁のレベルが150cmのところで平面を整えて写真を撮る。(請川)

9月5日

後円部C横断を手伝う、もっぱら石組に注目する從来根石と思われる石の下から、もう一つ根石が現れる。(高畠)

KC2Tセクションの183cmの所から石を整えたらしく奥壁、側壁とも同じ平面に整然と据えられている。(請川)

9月6日

後円部の縦・横断図の作成。

9月7日

雨のため午後休業、図面や出土品の整理。

9月8日

後円部の図面作成、北西部の隅清掃。

9月9日

昨日の作業の続行。

9月10日

雨天、図面や遺物の整理。

本日をもって夏休み終わり岩本、柳瀬、鈴木帰省。

9月11日

高畠現場復帰、前方部の第4、5主体部の西側にグリッドを設定。両者の関係について調査。

9月12日

第IV、V主体部間の壁を取り除く、土壌検出。マウンドのベース追求。(高畠)

9月13日

前方部の地形図にトレンチを入れて、全面レベリングを行う。

9月14日

前日の作業続行、善一、高一高生応援に来る。(高畠)

9月15日

前方部の精査。

9月16日

前方部C横断図を取る、床面に礫が露出し始めてるので一応止めておかなければならぬ。(岩本)

9月17日

前方部KR1T縦断はめどがついているのが、特にB横断、A区横断のN側が取り残しているので気にかかる。(岩本)

9月21日

前方部地の地層追求する(高畠)

9月22日

ZRITトレンチを掘り下げ敷石を追求する。(高畠)

9月23日

第I主体部のBセクションを取る、砂利石の面まで終了。銅鏡、剣(21日確認のもの)の遺物分布図に記載、鏡をとりあげる。(柳瀬)

9月24日

ZRIT区平面図、縦横断面図、分布図、写真、平面図が終り、縦断のため敷石をはずしていく。(高畠)

9月27日

前方部ZRITE区、ZRITのE区壁間にあった土を排除する。(高畠)

9月29日

前方部大掃除、写真。(高畠)

10月2日

30日、1日雨のため休み。

前方部敷石平面図終了、埴輪をすべて取り上げる。

敷石・地山上面土層に安山岩(5～25cm)の分布が見られる、これらの安山岩は、葺石と思われる。(高畠)

10月4日

午前中第I主体部の床面の清掃。午後ZR5Tのセクションを取り始める。(山口)

10月5日

ZR5Tのセクション終了。

10月6日

4日より始めた第I主体部の平面プランにかかり、遺物を取り上げる。本日平面プラン終了。(高畠)

10月7日

第I主体部・平面(根石)の整理・釘状鉄製品、土師器、歯を取り上げる。次いで粘土床をさげる、床両壁は非常に硬く、中央は白色のさらさらした感じの粘土であった。中央部より2cmの深さにて河原石が前面にひかれていた。

(高畠)

10月9日

B横断において第I主体部と第2主体部の接触部を図にいた。その後、第I主体部床面清掃を行う。勾玉・1、管玉・

1、小玉・5出土。出土状態は鍬形石の南側あたり。(高畠)

10月11日

第I主体部の根石を取り除き下部を追求する、1段から2段をおいて砂利が出土する。割竹プランの広い方より、狭い方に向かって傾斜しており、朱の塗布がみられる。(高畠)

10月12日

昨日に続いてセクションを取りながら根石を取り除く。(高畠)

10月24日

調査終了。

## 保存協議

県教育委員会では、発掘調査が進展し、前方後円墳の学術的な重要性が明らかになるにつれ、保存措置を取るべきとの要望が各地からよせられたこともあり、地権者や土砂採取業者としばしば協議を重ねた結果、10月に入り現状保存について同意を得ることができた。それと同時に、発掘調査を中止し、関係者との間で遺跡の保存についての方策を検討することとなった。

- 1 前方部については、現体制において、埋め戻しを行う。
- 2 前方部から検出された第VII主体部の遺構はそのまま埋めて保存する。
- 3 後円部については、第I主体部の床面は現状で保存することとし、砂利面以下の掘削は行わない。
- 4 石室の復元や墓壙内部の詰石の処理は後日検討する。

以上の申し合わせをして、埋め戻しや、墳丘上の整備など事後処理を行い、昭和45年3月30日に発掘調査を終了した。(松本)

## 県指定史跡

昭和45年6月4日付けで土地所有者5名より県教育委員会に対して県文化財指定申請書が提出され、県文化財保護審議会への諮問、同審議会からの答申を経た後、同年8月8日に史跡として指定された。

## 復元整備事業

県史跡指定後、古墳の保護と活用を図ることを目的として、昭和45年8月18日付けで高松市茶臼山古墳復元整備委員会が組織された。

委員長	香川県教育委員会教育長	田中和夫
副委員長	高松市教育委員会教育長	三木嘉光
	香川県文化財保護協会会長	津嶋惣平
委員	香川県文化財専門委員	高橋邦彦 森井 正 六車恵一
	高松市文化財専門委員	大西正男 小竹一郎 細渕福太郎
	茶臼山古墳保存会長	国方松次
事務局	香川県教育委員会社会教育課長	松本正義
	高松市教育委員会社会教育課長	豊島道治

復元整備委員会での意見を受け、昭和45年9月14日～9月26日には、土地所有者を事業主体として以下の復元整備事業が行われた。

### 1. 後円部第I主体部

石室壁体石材の積み直し。天井石は3枚のみ高架復元。石室(石槨)の裏込めはコンクリート注入による補強。

花崗岩盤の墓壙壁面は、モルタル吹き付けによる補強。

#### 2. 後円部第Ⅱ主体部

調査に伴い除去した天井石を再び高架。

#### 3. 前方部

全てのトレンチの踏め戻しと盛土による保護層を設ける。

#### 4. 防護柵の設置

土砂採取が迫った後円部に防護柵を設置

#### 5. 見学路の整備

墳丘への見学路を整備する。

#### 6. 説明板の設置

古墳の理解を補助する解説板を2基設置。



第Ⅰ主体部壁体の復元作業

### 高松市茶臼山古墳復元整備事業

事業費 400,000 円

県費 100,000 円

市費 300,000 円

以上の復元整備事業の完了を経て、高松市茶臼山古墳は現状に至っている。発掘調査実施の要因ともなった土砂採取に伴う法面に対しての保護策は講じられていない。現状保存に関する保護策については、今後の課題として残された。

### 第2節 整理作業の経過



第Ⅰ主体部天井石の復元作業

高松市茶臼山古墳の調査成果については、調査終

了後に多くの文献で取り上げられてきたが、本報告書の刊行が行われていなかったため、古墳の歴史的評価や出土遺物の活用面に支障を来たす状態が続いた。高松市茶臼山古墳の遺構・遺物の報告に関する主な文献には以下のようなものがある。

茶臼山古墳発掘調査団 1969 『高松市茶臼山古墳調査概報』

茶臼山古墳発掘調査団 1969 『文化財保護協会報』 第 52 号 香川県文化財保護協会

香川県教育委員会 1970 『高松市茶臼山古墳緊急発掘調査概報』

香川県文化会館 1970 『郷土資料室出品目録 古墳その2 茶臼山と津頭東』

香川県教育委員会 1983 『高松市茶臼山古墳』『新編香川叢書考古編』

日本考古学協会昭和 58 年度大会実行委員会編 1983 『香川の前期古墳』

香川県 1987 『香川県史』資料編考古

斎藤賢一 1989 『香川県出土古墳時代鉄製農工具調査報告』『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要IV』

香川県教育委員会ほか 2000 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 32 冊 中間西井坪遺跡II』

香川県歴史博物館 2006 『瀬戸内海歴史民俗資料館旧蔵資料』『収蔵資料目録 平成 15 年度』

藏本晋司 2007 『高松市茶臼山古墳の基礎的研究 1 - 円筒埴輪の整理から - 』『香川県埋蔵文化財センター研究紀要III』 香川県埋蔵文化財センター

松本和彦・西澤昌平・杉山和徳 2008 『高松市茶臼山古墳出土鉄製品の基礎的研究』『調査研究報告第 4 号』 香川県歴史博物館

以上の文献を中心として、遺構・遺物を個別に取り扱う状態が長らく続いたが、平成24年度には、香川県教育委員会を中心に地元自治体である高松市教育委員会等の各関係機関等による高松市茶臼山古墳の今後の保存・活用方法の検討が行われた。そこでは、香川県教育委員会が未刊行であった調査報告書について国庫補助金を活用した整理作業を実施し、報告書を刊行することで高松市茶臼山古墳がもつ歴史的評価を明確化し、今後の保存・活用方法の検討に役立てることとなった。

## 報告書作成の方針

報告書作成を行うにあたって、調査終了後かなり時間が経過していたために、次のような課題を内包していた。

### ・調査記録類の再点検

調査段階に作成した図面・写真類については、当時の調査担当及び参加者に提供及び確認を求め、可能な限り収集を図ったものの、後円部第Ⅰ・第Ⅱ主体部の副葬品の出土状況及び取り上げ番号図など、欠落している資料が多く認められた。これについては、香川県埋蔵文化財センターに保管されていた原図複写資料や基礎整理作業で作成された浄書図を用いて適宜補った。しかし、欠落した記録類が存在することは事実であり、現時点で提示できる最低限度の資料となることは否めない。

### ・収蔵期間中の出土遺物の混乱

過去に行われた展示や、収蔵施設内での保管状態等の要因で、一部の出土品において帰属遺構・遺跡の混乱が認められた。これについては、当時の調査担当者の調査メモ等の記録や助言、現地調査終了後に撮影された遺物写真を参考にしながら、確認作業を行った。従って、上記の既往の報告文献において取り上げられた資料においても、本報告書で除外した資料が存在する。また、ガラス小玉等の資料については、保管期間中に散逸した資料も含まれているので注意していただきたい。

### ・報告書の執筆作業

現地調査に係る経緯と経過、遺構説明については、当時の調査関係者が、遺物については担当職員が行った。

## 平成25年度整理作業体制

### 香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 増田 宏 副課長兼課長補佐 木虎 淳

### 総務・生涯学習推進グループ

副主幹 松下由美子 主任主事 丸山千晶

### 文化財グループ

課長補佐 片桐孝浩 主任文化財専門員 山下平重 文化財専門員 松本和彦

### 香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 真鍋昌宏 次長 前田和也

総務課 課長 前田和也 主任 宮武ふみ代・俟野英二・中川美江・高木秀哉

調査課 課長 森 格也 文化財専門員 信里芳紀（遺物整理担当）

## 第3章 遺構・遺物

### 第1節 遺構

#### 1. 墳丘の調査

本墳は海拔約 50 m の丘陵上に位置する前方後円墳であり、後円部頂に高松市東山崎町・前田町・新田町の3町境が所在する。水田との比高差は約 43 m を測る。前田・新田両町域からの採土作業が進んだ結果、古墳の両側面は絶壁となっている。

前方部を丘陵上部と考えられる北東に向け、後円部は北西・南東の両方に緩やかに下降する分岐部分に所在する。調査は墳丘中軸線（N 40° E）を設け、グリッドを組むことに始まり、まず墳丘の形状を確認するための測量、トレンチの設定を行い幅約 100 ~ 200cm のトレンチ 18 カ所（ZL4・5T は未掘）総長約 190 m、面積約 360m<sup>2</sup> の調査を実施した。中軸線に沿って KC1・2 T、ZC1T ~ ZC4T、ZL1T の 7 本、左側に中軸線に直交する KL3T、ZL2・3T の 3 本、右側にも中軸線に直交する KR1T、ZR2 ~ 4T と中軸線に沿う ZR1T、斜交する ZRT の 6 本の掘削を行った。このうち遺構の調査状況により地山までの掘開に至らなかったトレンチも存在する。それでは各トレンチの発掘調査状況について説明を加えるが、断面原図の所在が不明なため土色や土質について詳細を欠くものがある。

後円部は墳丘の中軸線と直交線に即した縦横断面図各 1 本と第 I ・ II 主体部の確認により、新たに両主体部の主軸に合わせた縦横断面図 6 本の計 7 本の断面図を作成した。

まず墳丘盛土、最上層の黄褐色土表面近くには平坦部を中心に約 9 × 7m<sup>2</sup> の範囲に 2 ~ 15cm の川原石（約 230 石）の散布が所々にあり、なかでも両主体部が

位置する場所の上位に比較的多く見られた。整然と敷き詰められた様子ではなく、平坦部に蒔かれたような印象で、後世に攪乱を受けて移動し流出している状況が考えられる。調査時に作業に参加された地元の人達からは、この平坦部が子供の頃の遊び場であったことを聞かされた。（高畠）

#### ZC4T

ZC4T は前方部側の後円裾部にあたる 1060 × 200cm のトレンチである。北壁は後円部と前方部との接合部であり、古墳の築造時に第 13 層下の地山は丘陵尾根の掘削により平坦に整えられており、後円部側の -335cm から前方部側 - 370cm に緩やかに下降し約 13 ~ 35cm の高低差が認められる。その間の後円部第 7・8 層の盛土墳端が終わる部分と第 12 層の傾斜の延長線上に地山が約 15cm 堀り込まれ一段低くなる部分がある。南壁では溝として検出されている。この堀り込み南側の肩口は後円の中心部から約 1,665 cm を測り、南壁の溝北側堀り込み肩口は約 1,800cm を測る。これを設計当初の後円の平面プランの一部と想定し、1,665 cm と 1,800 cm の距離で円を描くと、後円南側の測量図ではセンターが詰まる部分 - 525 ~ 550cm に位置し、墳丘と自然



発掘調査風景（前方部）

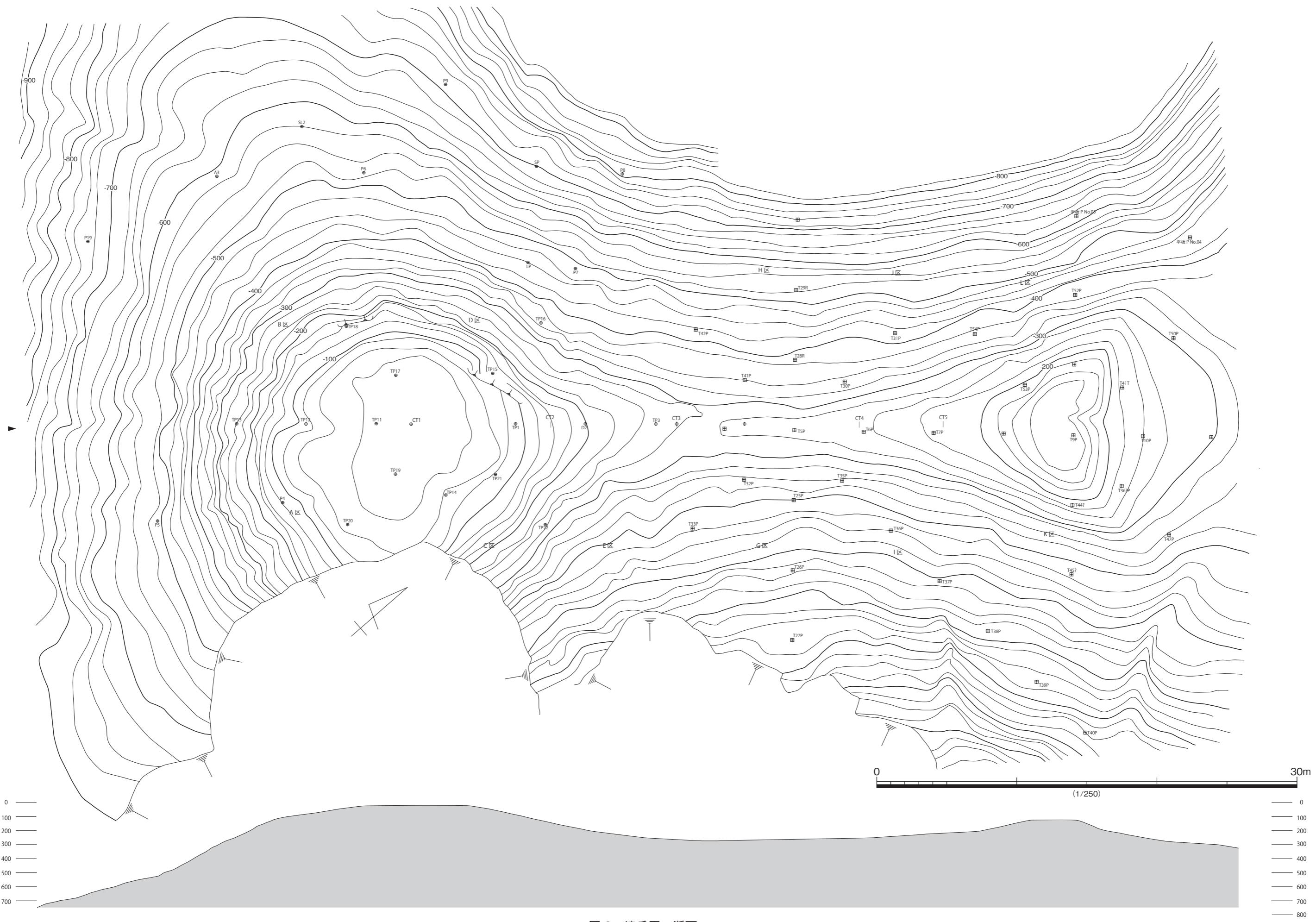


図6 墳丘平・断面

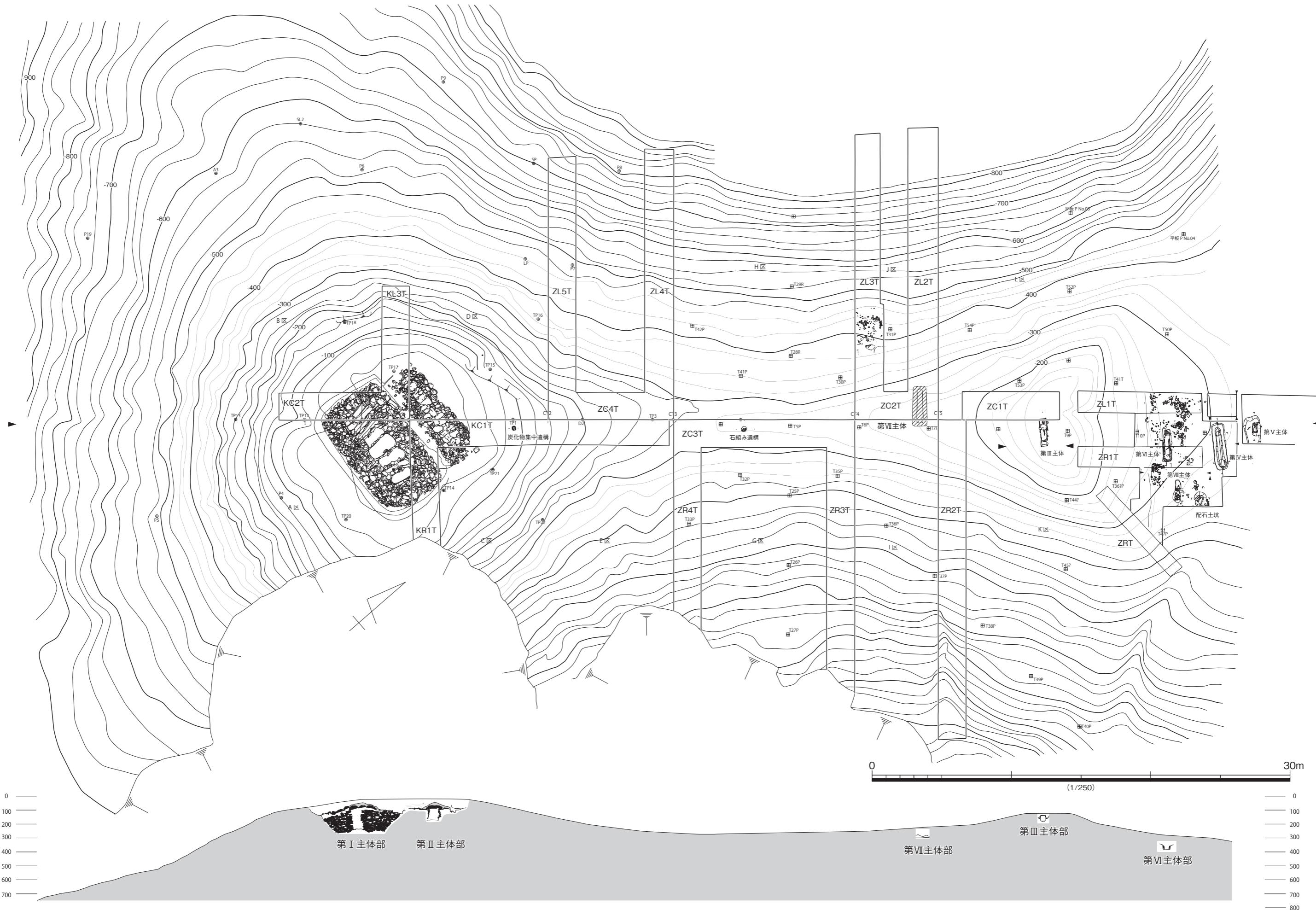


図7 トレンチ配置及び検出遺構平面

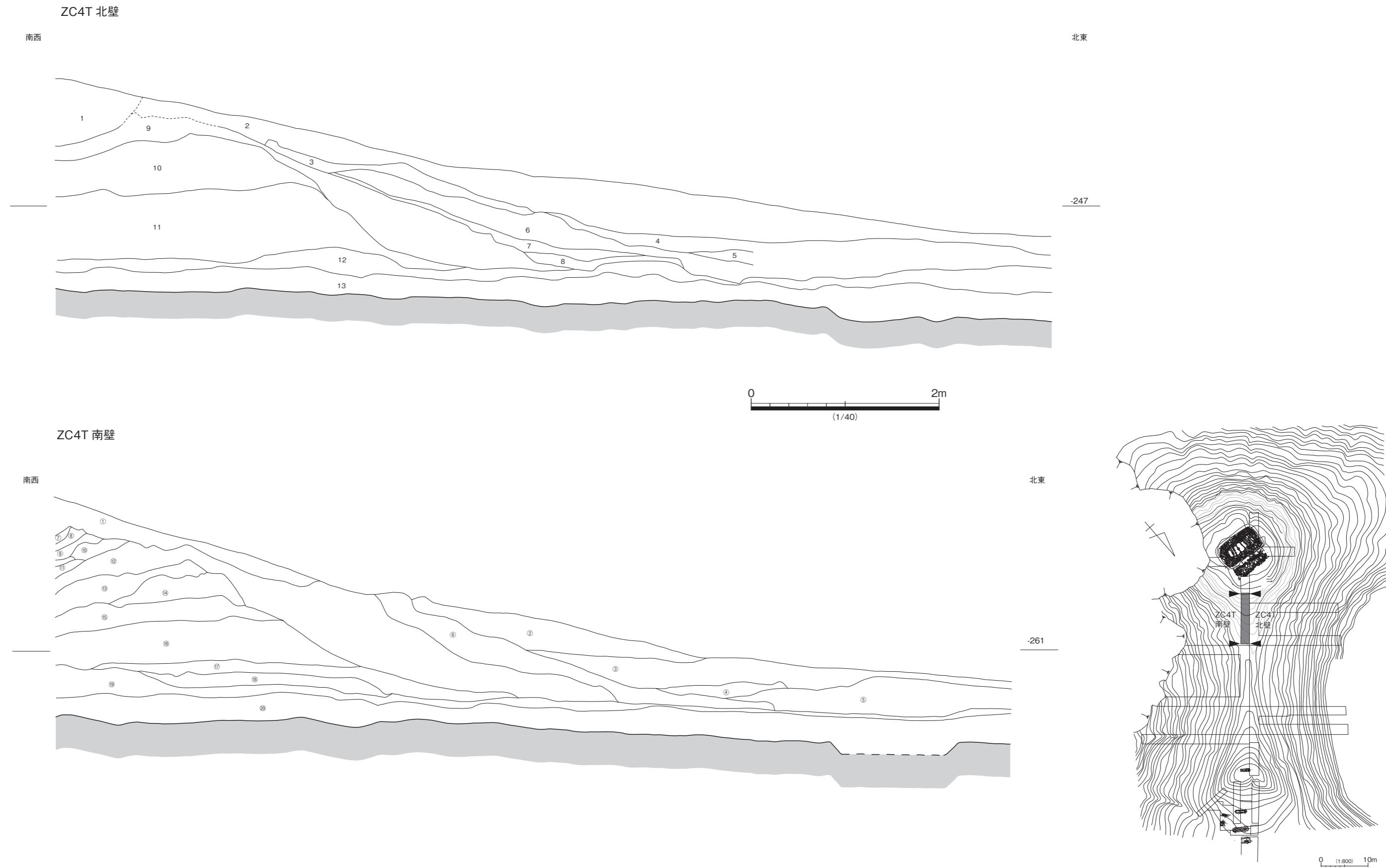


図8 KC1T 北・南壁断面

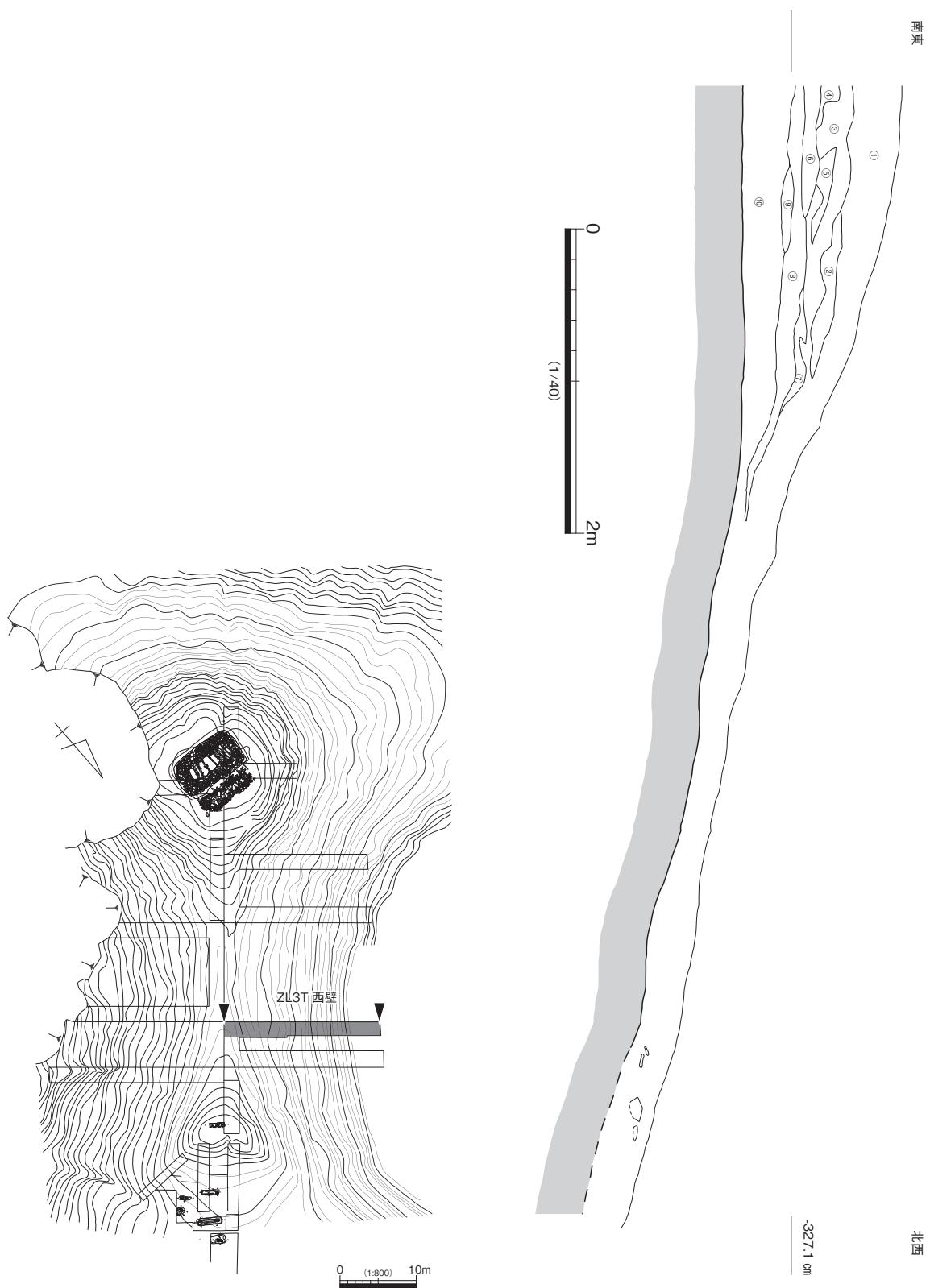


図 9 ZL3T 西壁断面

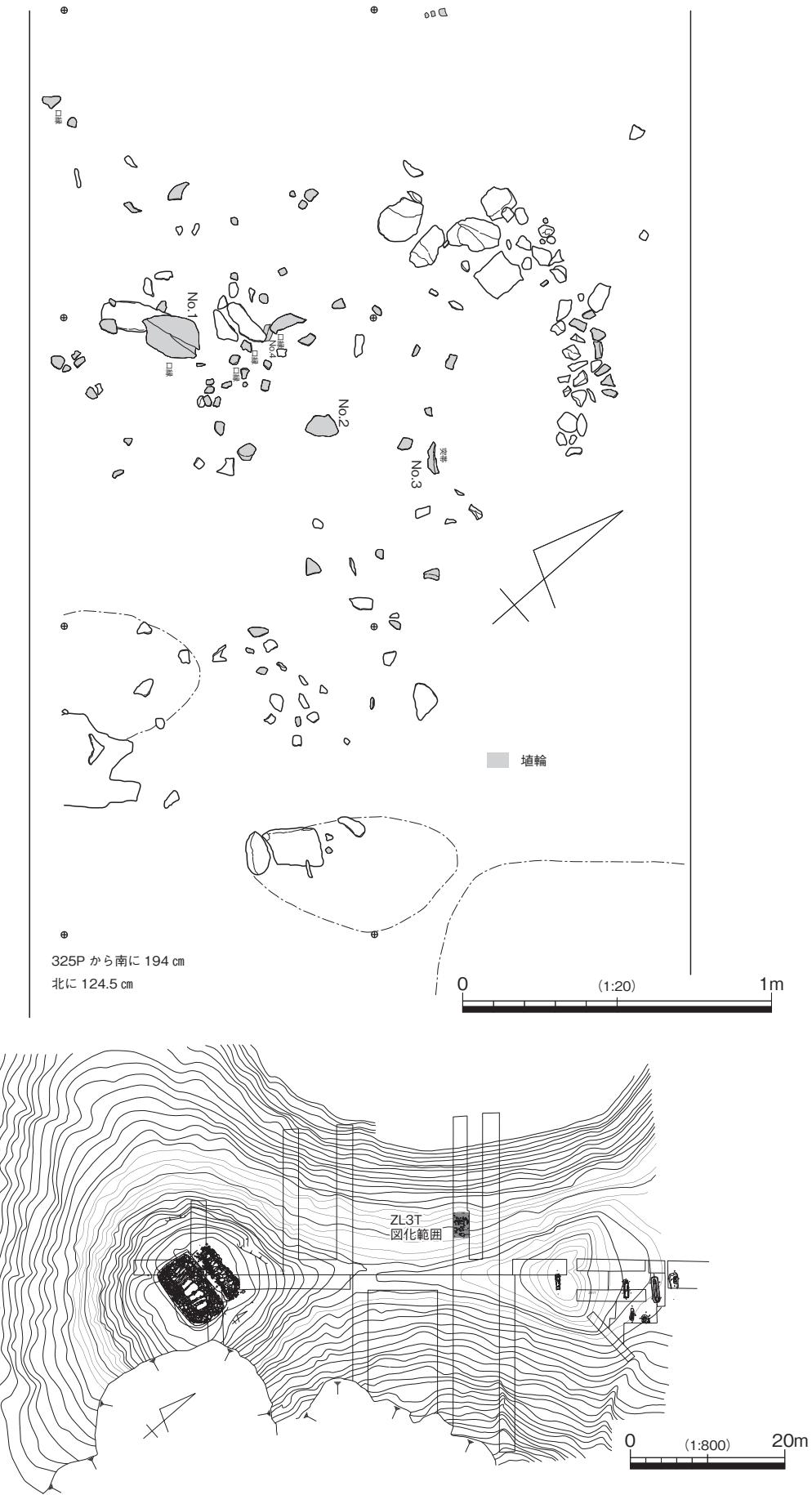


図 10 ZL3T 遺物出土状況

地形に溶け込む変換点に当っている。墳丘南側は未調査であるため明確には出来なかったが、おおよその後円部の南側端部が推測できる。

墳丘基盤の盛土は地山を削平した平坦面に第12・⑯層を15～30cm、第13・⑰を5～35cmの2層を水平に敷き全面を覆っている。後円部と前方部を形づくる盛土は第12層上部から始まり、第11～第7層までが後円の盛土、上位の第6～第1層までが前方部との共通の盛土となっている。第10・11層は墳丘中心に向かい少し内傾し、盛土の直径を縮小しながら水平に重ねられる。盛土の過程を推定すると、第12層上位に直径約27.5mで厚さ約70cmの第11層を盛り、さらに直径約24.5mで厚さ40～60cmの第10層を重ね、中央に凹みを持ち盛土外縁高約135cmの後円部の中心核にあたる円錐台状の盛土構成の可能性を想定しておきたい。ZC1Tの両壁での盛土高は後円部側で225～235cm、前方部側で66～88cmを測る。盛土は第12・13層と第⑯・⑰、第10・11層と第⑬～⑯層、第9層と第⑫層、第6層と第⑥層等が同じ層と考えられる。(高畠)

#### ZL3T

本トレンチは(ZC2Tの一部を含む)は1800×約200cmのトレンチで、埴輪・葺石などの外表施設や墳端形状の把握を目的に前方部に設定したものである。C5杭の表土下104cmにおいて-359cmの地山平坦面を検出する。この平坦面の高さ-359cmはKC1Tの前方部寄りの地山面北壁-370cm・南壁362cmより少し高い数値を示している。

本トレンチの地山は北西に250cmほど水平に延び、そこより緩やかに下降し始め自然地形に溶け込んでいる。盛土は表土層32cm、黄褐色土層と灰白色土層の互層38cm、灰白色・灰黒色土層34cmと大きく3層に分けられる。埴輪片および葺石はC5杭から480～720cm間に両者が混在する格好で見られ、地山からも遊離しており定位置を保ったと考えられる遺物は認められない。埴輪は口縁・籠・胴部片など65点が見られた。灰黒色土層からは弥生土器片が出土している。ZL2Tでは埴輪などの遺物は未確認であった。

墳端と考えられる盛土端や地山の顕著な変化は認められなかったが、黄褐色・灰白色の互層端と埴輪の分布域間に墳端の可能性があり、C5杭から4～5m間に想定出来そうである。(高畠)

#### ZC2T

埋葬施設の第Ⅶ主体部が確認された場所であり、調査は保存の関係から粘土櫛の上面検出にのみとどまった。ZC2Tは前方部から後円部に向かう緩やかな斜面部C4～C5間に設定したトレンチで600×200cmを測る。表土から地山面までは大きく5層からなり、地山の傾斜に沿って平行に土が盛られている。地山面はZC1Tよりもわずかであるが高くなっている。下位の⑫層の灰黒白色土と⑬層の黄色褐色土はKC1Tの第11・12層に匹敵する共通の層である。⑨層から下位は地山平坦面に水平に盛土することが意識されている。地山面は後円部側が-356.7cm・盛土高104cm、前方部側が約-346.7cm・盛土高約133cmを測る。(高畠)

#### ZC1T ZR1T

ZC1Tは前方部頂から後円部方向に設定した600×200cmのトレンチである。墳頂部は第Ⅲ主体部が確認された場所であり、おおよそ-103cmを測る。地山平坦面はC3～C4間を境にして墳丘の盛土形状同様に後円部と前方部の両高所に向かい緩やかに上昇しており、ZC1Tの約6m間でも高所は-313.3cm、底所が-330.3cmを測り、17cmの高低差が認められる。盛土は約114～210cmの幅があり、前方部の墳頂が高く土盛りされている。

他の墳丘中軸断面と同じく地山上に第⑫層、さらに第⑪層を積み重ねており、KC1T北壁の第⑬・⑭層、KC1T南壁の第20・19層、ZC2T南壁の第⑬・⑭層などに対応している。

第12層上位の盛土についてはZR1Tの北壁との繋がりを通して概観すると、前方部にも後円部で想定した

ZC2T 南壁

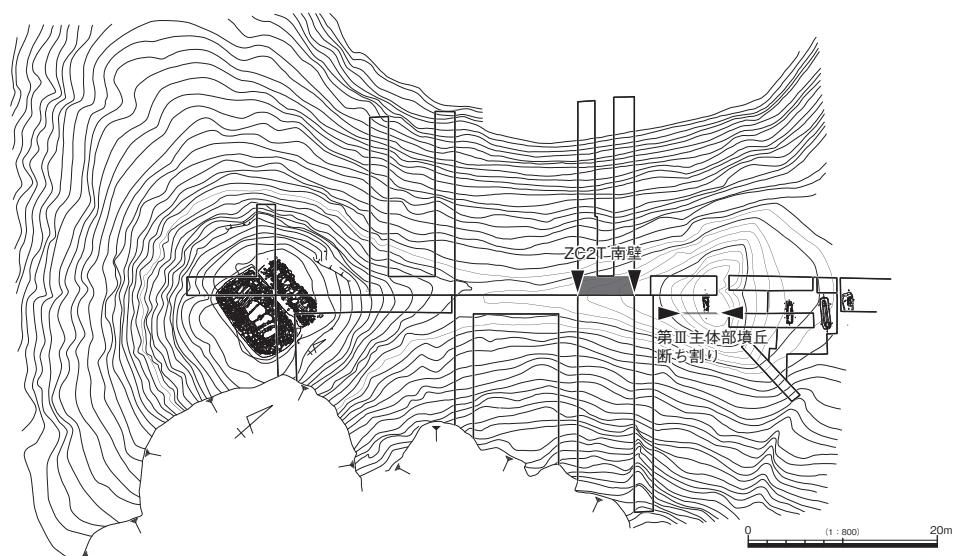
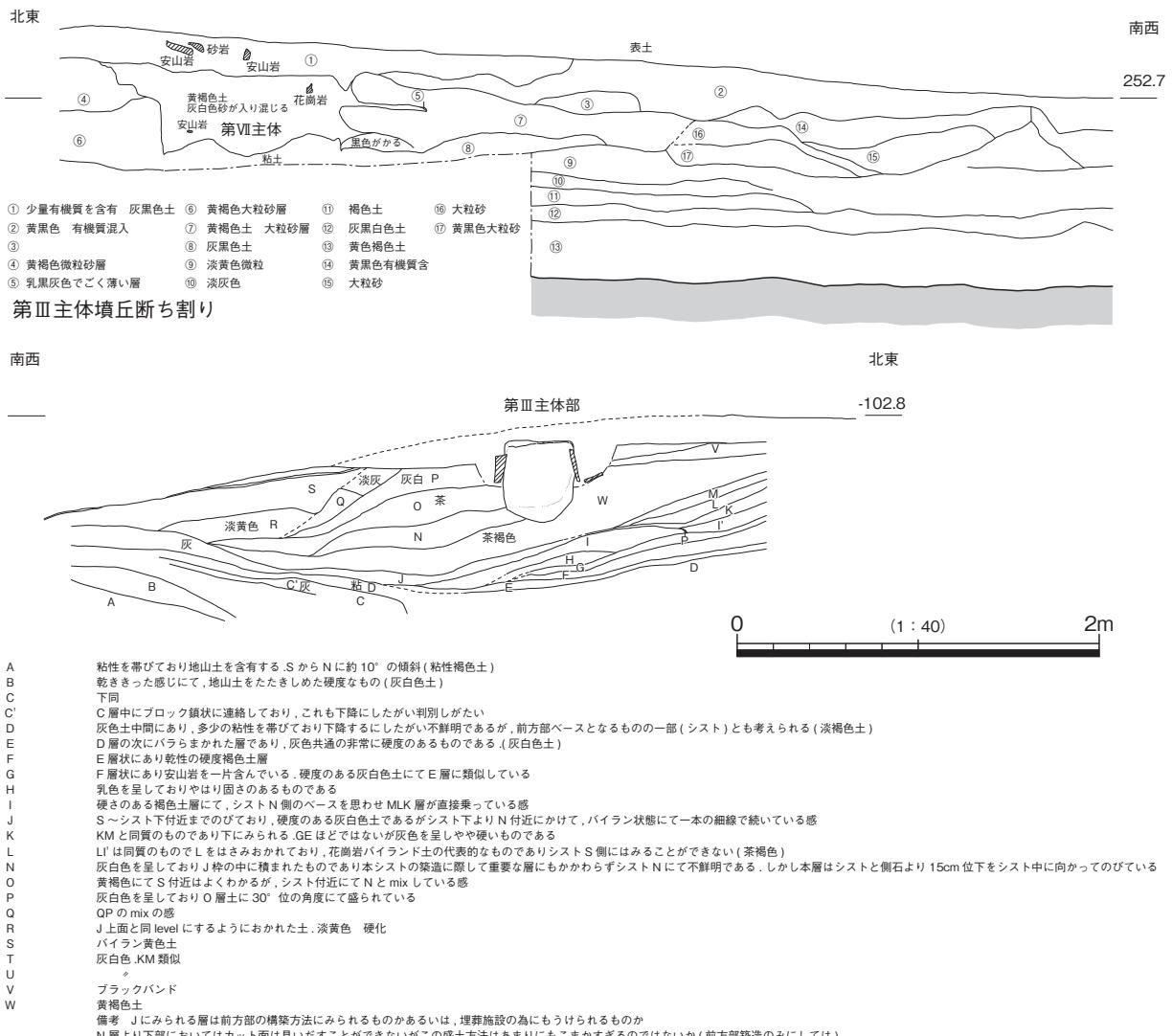
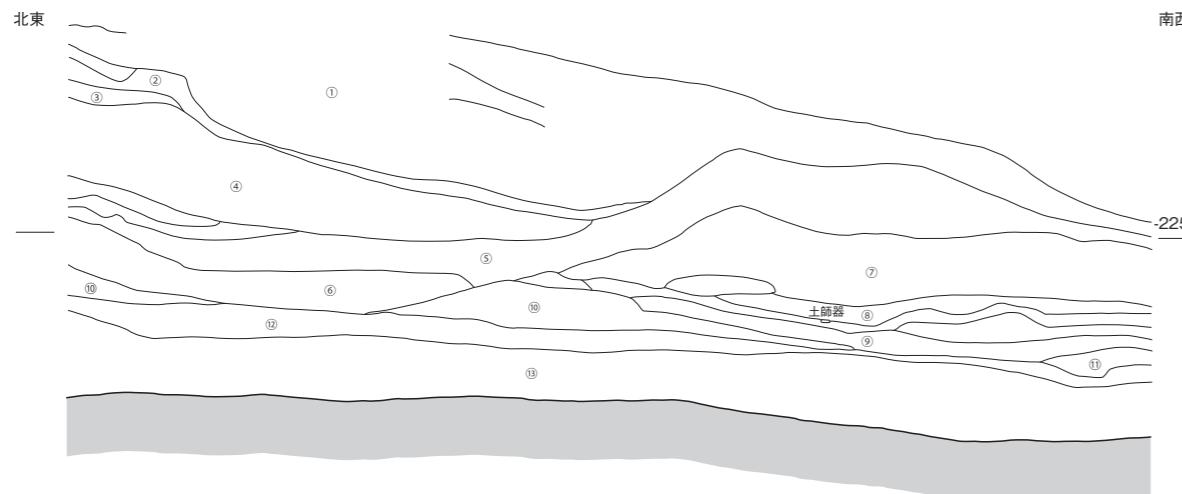


図 11 ZC2T 南壁断面及び第Ⅲ主体部断ち割り断面

ZC1T 南壁



中央の凹んだ角（円）錐台状の土盛りが行われた痕跡の可能性が窺える。

大きくは4段階くらいに分けて盛土されている。例えば、ZR1T 北壁の第18層は第19層とともに削平された地山の平坦面（墳端から約300cm部分が-306cm の地山最高所であり墳端および後円部側 KC1T の北西端まで緩やかに下降する）に盛られた土であり、他の場所でも第18層はおよそ20cmの厚さで重ねられているが、墳端部の手前では2倍の40cmの厚さで凸状に盛り上げられている。それに対応する凸部は4m離れたZC1T



ZR1T 土師器甕・高杯出土状況

南壁の第⑫に当たり、両凸部間は幅約400cmの断面皿状を呈している。さらにその形状を踏襲してZR1T 北壁の第16層が約55cmの厚さで盛られ、前方部の背部を構成するZC1T 南壁の第⑦～⑪層に対応する外縁部と考えられる。幅約640cmとの断面皿状を呈する。ZR1T の第5～15層もZC1T の第⑤層と同時の作業工程の中で実施され、断面皿状の凹みが形成されたと推測される。ZR1T の第4層とZC1T の第④層もしかりである。盛土の前方部頂から墳端に向かう傾斜角度は約20度を測る。

前方・後円部で見られた中央の凹んだ角（円）錐台状の盛土は表土近くまであり、凹み内部に入れる土の流出を防ぐ土留めの役割を果たすとともに、墳丘の形状を崩すことなく永く保全する目的や凹みの内に埋葬施設を合理的に作るために考案された盛土工法の可能性も考えられる。（高畠）

#### ZR5T( 第Ⅲ主体部断ち割り )

ZC1T の200cm 東側に並行し、第Ⅲ主体部の頭部側土層断面との比較のために設定した長さ400cm を測る脚部側のトレンチである。地山面までは図化をしていないが、ZC1T で見られた中央の凹んだ角（円）錐状の盛土がほぼ同じ形状で認められる。A層からJ層までは花崗岩の砂土であり非常に堅くしまった盛土である。表土下90cmの灰白色E層が断面皿状の底であり、ZC1T の第④層、茶褐色W層がZC1T の第①層、褐色土A・灰白色土B層がZC1T の第⑤層・第⑦層に対応するようである。埋葬施設の構築に関しての盛土の変化、明瞭な掘り方はO・N・W層でも確認することができなかった。おそらく、墳丘の構築に並行して第Ⅲ主体部は作られた蓋然性が高いと考えられる。（高畠）

#### ZL1T

墳丘中軸線から約50cm 西寄り、前方部墳端から前端部にかけて設定した900cm × 200cmのトレンチであり、前方部の中央登り道部分を切断する格好になっている。原図の所在が不明のため断面記録について詳細に触ることは出来ないが、基本的にはZR1T の盛土に近い構造である。

いわゆる、外縁を持つ角（円）錐台状の盛土が墳丘の基礎になっていると思われる。削平した地山に茶褐色第⑯層・濃灰色⑭層を重ねて墳丘の基盤にあたる平坦面を作り出しており、この構造は各トレンチでほぼ共通している。少し異なる点は墳端から230cm、第⑯層間に第⑭・⑯・層を約50cmの高さに置土し、第⑮層とで角（円）錐台の外縁部を作り出している。

ZR1T 北壁の第⑯・⑰層やZC1T の外縁部第⑤・⑦層部に対応し同機能を果たす盛土の基礎部分と考えられる。地山平坦面もZC1T 同様に墳端南側から約300cmの部分が高所となり角（円）錐台の盛土基底となっている。

前方部墳端は北から南に延びる尾根を切断し、底面約700cm の地山平坦部をつくり、北側が尾根への駆け



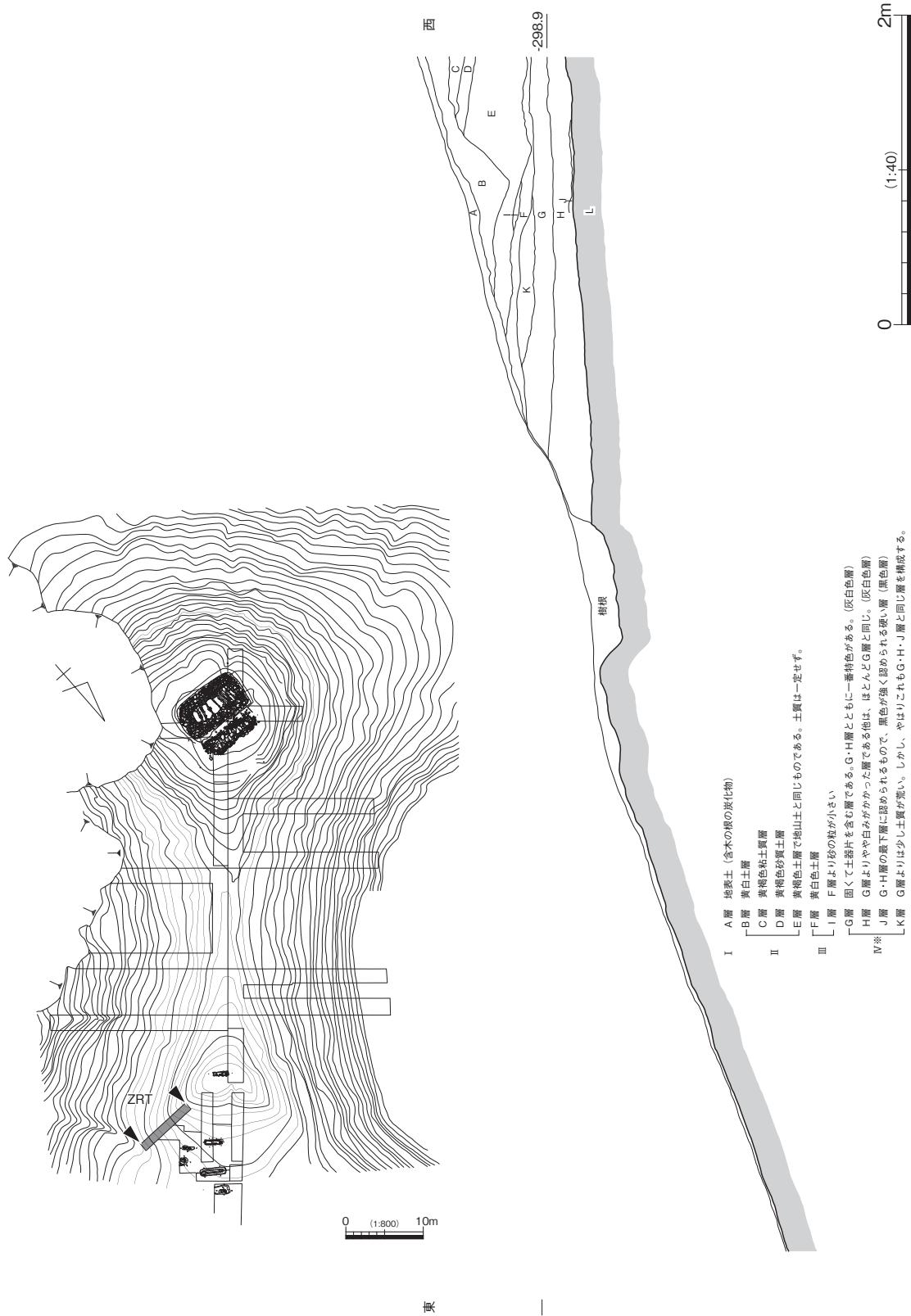


図 14 ZRT 断面

上がり法面、南側が前方部の墳端法面となっている。ZL1T では整合性のない土層断面記録となっているが、地山加工面と第⑯層の法面が墳端部と考えている。ZR1T 出土の境界石も法面の裾に設置されており、N51°W の墳端線が意識されている。調査では傾斜を持つ延長 965cm、幅 15～55cm、傾斜 40 度の地山の段が確認されており、上端 - 334.6～- 353.1cm、下端 - 345～- 377cm を測り東側に緩やかに下降している。段差は 22.5～38.0cm を測り、盛土を含めるとさらに高い段が確保されていたと考えられる。(高畠)

#### ZRT

前方部墳端および前方部北東コーナーを確認のため設けた 800cm × 100cm のトレンチである。表土 - 216.9cm から約 96cm 堀り下げると - 312.9cm で地山が現れ、その間に 10 層の盛土が見られる。灰白色系の G·H·J·K 層が地山直上の堅固な盛土となり、水平あるいは凹みを意識してか墳丘内部に向けて傾斜、上位の F·E·D·C 層も同様の傾きを持つ。F·K·G·H 層が ZR1T の第⑯・第⑰層、ZL1T の第⑪・⑭層に対応する共通の盛土である。当然地山面も他のトレンチ同様に平坦が意識されている。墳丘の傾斜角度は 30 度、地山平坦面は約 4 度の傾斜が認められる。

墳端およびコーナーについては明瞭な痕跡を確認することはできなかったが、地山に若干の変化が認められた。地山面の延線上 400cm、後世の掘り込み肩部の下方 - 336.9cm に地山が見られ、そこより約 60cm 間に浅い溝状の落ち込みが存在する。- 349.9cm の溝の肩口からは自然の地山地形が約 20 度の傾斜で下降しており、墳丘下の地山平坦面との変換点になっている。おそらく 400～460cm 付近が墳丘の裾部にあたると想定できる。(高畠)

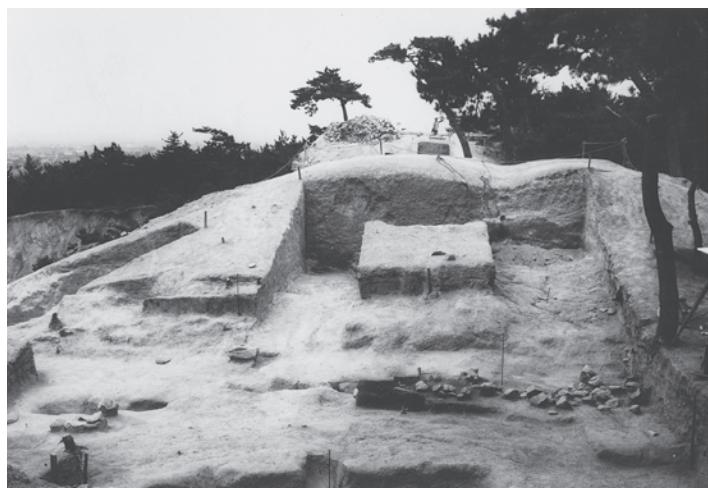
## 2. 前端部の調査

前端部とは、丘陵尾根筋を切断し段を設けた前方部の墳端線から北東に作られた地山の凹み部を呼称する。凹み部は - 275～- 350cm の範囲内で緩やかに下降する斜面であるが、- 350cm 付近からは再び北東に向かって徐々に高くなり自然地形の高所部に繋がる。

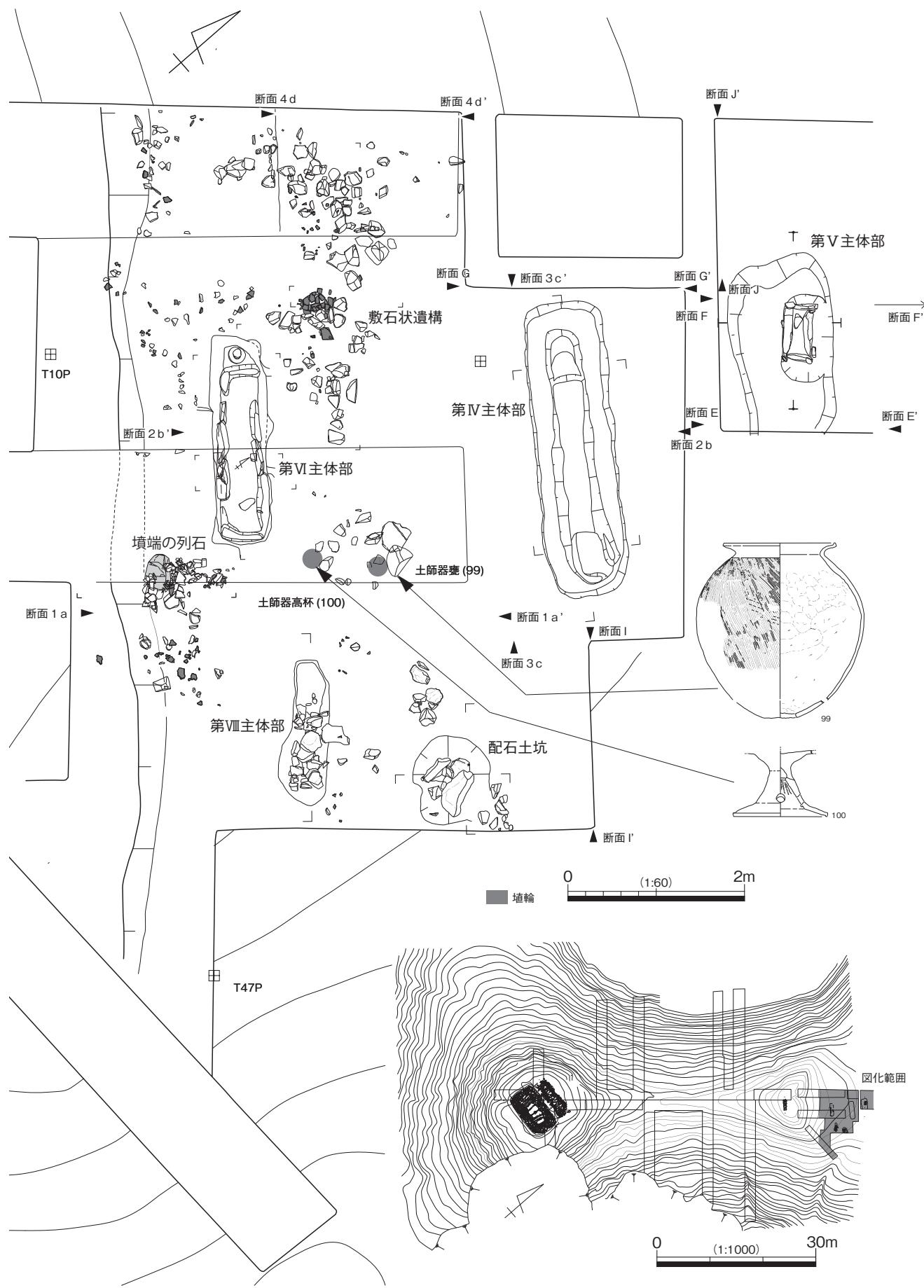
実際に発掘を実施した場所は ZL1T の北西壁延長線から南東側のみで、墳端からの距離は 1,100 cm を測り、調査面積は前端部全体のほぼ半分に当たる 66m<sup>2</sup> である。前端部の 40～65cm ほどの堆積土を除去すると、両法面の間に約 700cm の平坦な底面を持つ凹みと、西から東に向かって緩やかに下降する地山面が認められた。ここからは前方部の墳端に境として置かれた大形の安山岩の角礫、葺石に使用され転落したと考えられる安山岩、埴輪片約 800 点、そして 4 基の埋葬施設と土壙、完形品の土器 1 点や小土器片約 280 点が出土している。

墳端境の目印と考えられる 40 × 30cm の安山岩は ZR1T の地山を切断加工した段の裾に沿う格好で配置されており、地山との接地面は - 362cm を測る。

この石の上部には転落した葺石と考えられる安山岩や埴輪片などが見られた。また、周辺にも同様の状況があり、安山岩の分布範囲は墳端から 4 m にまで及び埴輪片もそれらに混在して散布するが、所々にまとまつた様子が認められる。角礫についても直線的に並ぶところが存在するが設置の安定感



前端部の調査状況



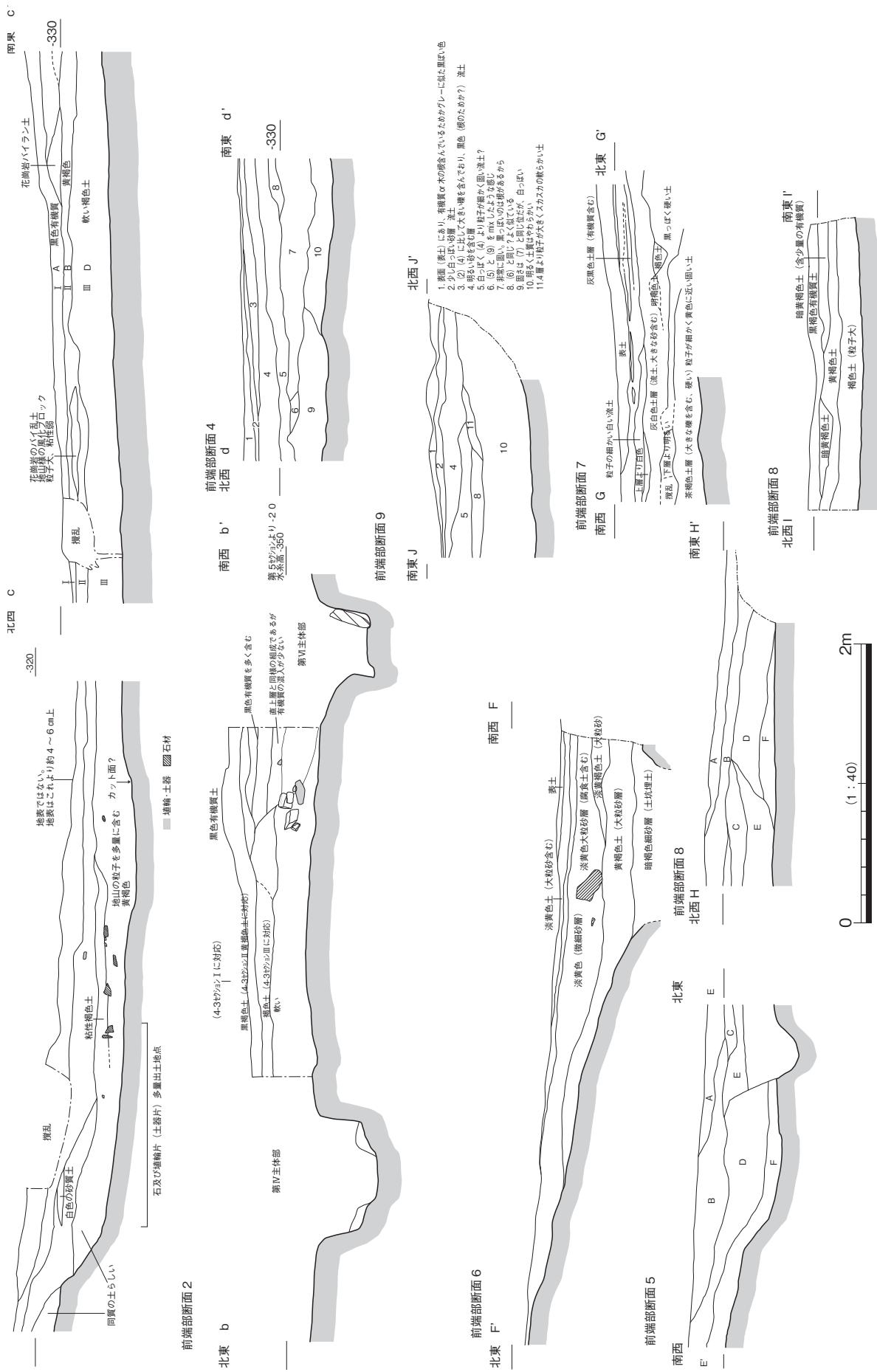


図 16 前端部各断面

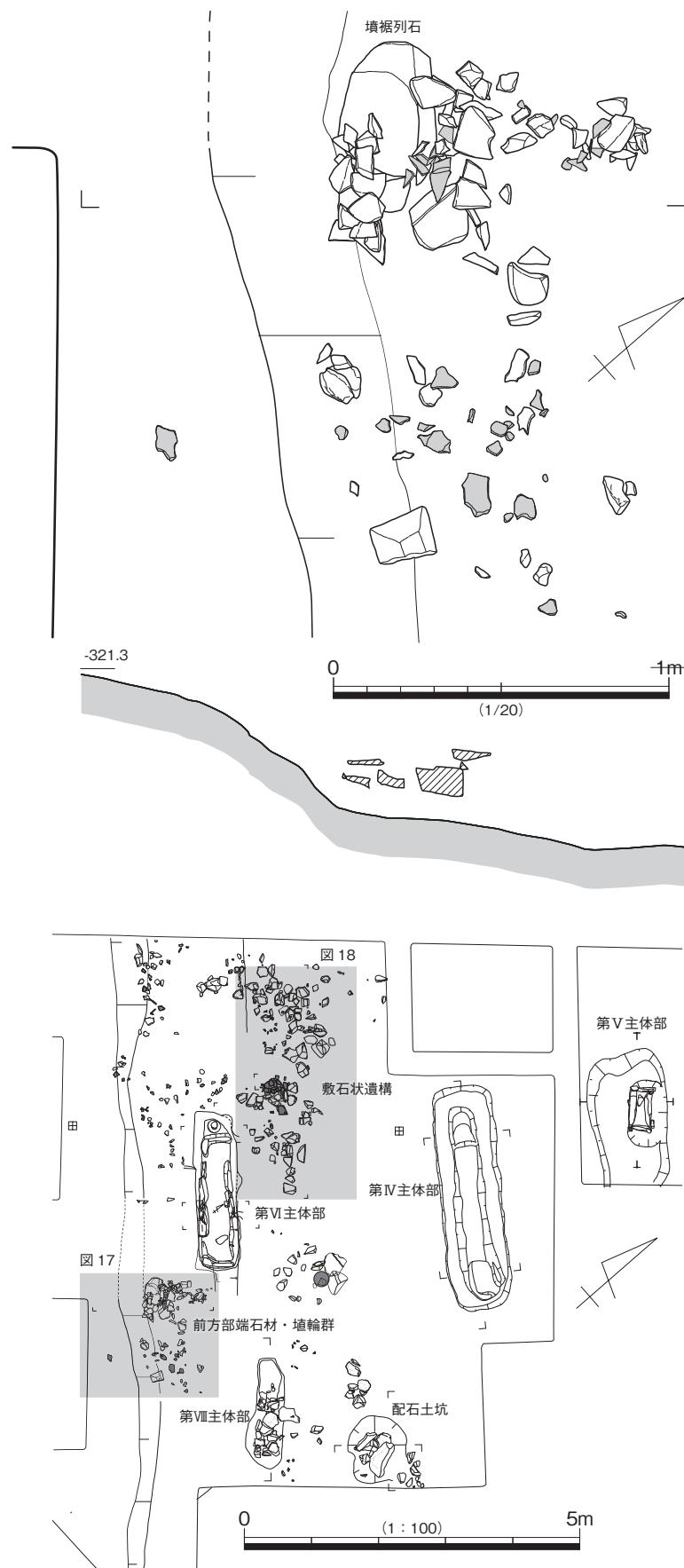


図 17 ZR1T 前方部端葺石・埴輪出土状況

には欠けている。石材や埴輪片の接地面は地山に直接ではなく 2 ~ 25cm の褐色土の間層があり、高低差が認められる状態での出土である。

4 基の埋葬主体部の主軸は前方部の墳端線に並行し、N46° ~ 55.5° W間に収まり、墳端に沿う方位を充分に意識して作られた墓域内の埋葬施設である。第 V ・ VI 主体部は組合せ箱式石棺、第 IV 主体部は粘土床を持つ土壙、第 VII 主体部が配石を持つ土壙であり、4 基の中では第 IV 主体部が最も規模の大きい中心的な埋葬施設である。副葬品は第 VI 主体部の副室から完形で鈍重な感じの土師器甕(49)が出土したのみであった。頭位については床面幅の広い方を頭部と考えると第 V ・ VI 主体部が東と考えられるが、床面の高低差での頭位の判断は困難であった。第 VI 主体部の床面・上部や第 VII 主体部の上部には墳丘から転落したと考えられる葺石や埴輪片が見られ、古墳との前後関係に示唆的である。各主体部の床面高は第 IV 主体部が最も低く - 410cm 前後で、第 VI ・ VII 主体部と続き第 V 主体部が - 400cm 前後である。

また、ZR1T の南東部では転落した葺石や埴輪片に混じって、口縁部を西に向かって完形品甕 1 点(99)が凹み部の上位に横転した格好で出土し、そこより 60cm 南で高杯が押しつぶされた状況で 3 点(100.149.150)がまとめて出土しており、一部角礫の載っている高杯もあり何らかの行為が行われた可能性も考えられる。横転した甕の中にも小石が 2 個入っていた。

前端部は古墳築造時に掘開され、



図 18 前端部敷石状遺構平・断面

古墳の完成にともない墓域として利用が考慮された場所の可能性も想定できる。(高畠)

### 3. 埋葬施設の調査

本墳関係の埋葬施設は後円部に2基、前方部に2基、前端部に4基の計8基の主体部が確認された。主体部名は調査の発見順に番号を付していったものである。後円部は第Ⅰ・Ⅱ主体部の竪穴式石室2基、前方部は第Ⅲ主体部の組合せ箱式石棺1基・第Ⅶ主体部の粘土槨1基、前端部では第Ⅳ・Ⅷ主体部の土壙墓2基、V・VI主体部の組合せ箱式石棺2基である。

第Ⅶ主体部は後世に破壊を受けていたが、その他の主体部については未掘の状態であった。

他にも墓の可能性を考えた土壙もあるが、今回は判断を保留として今後の類例を待ちたい。

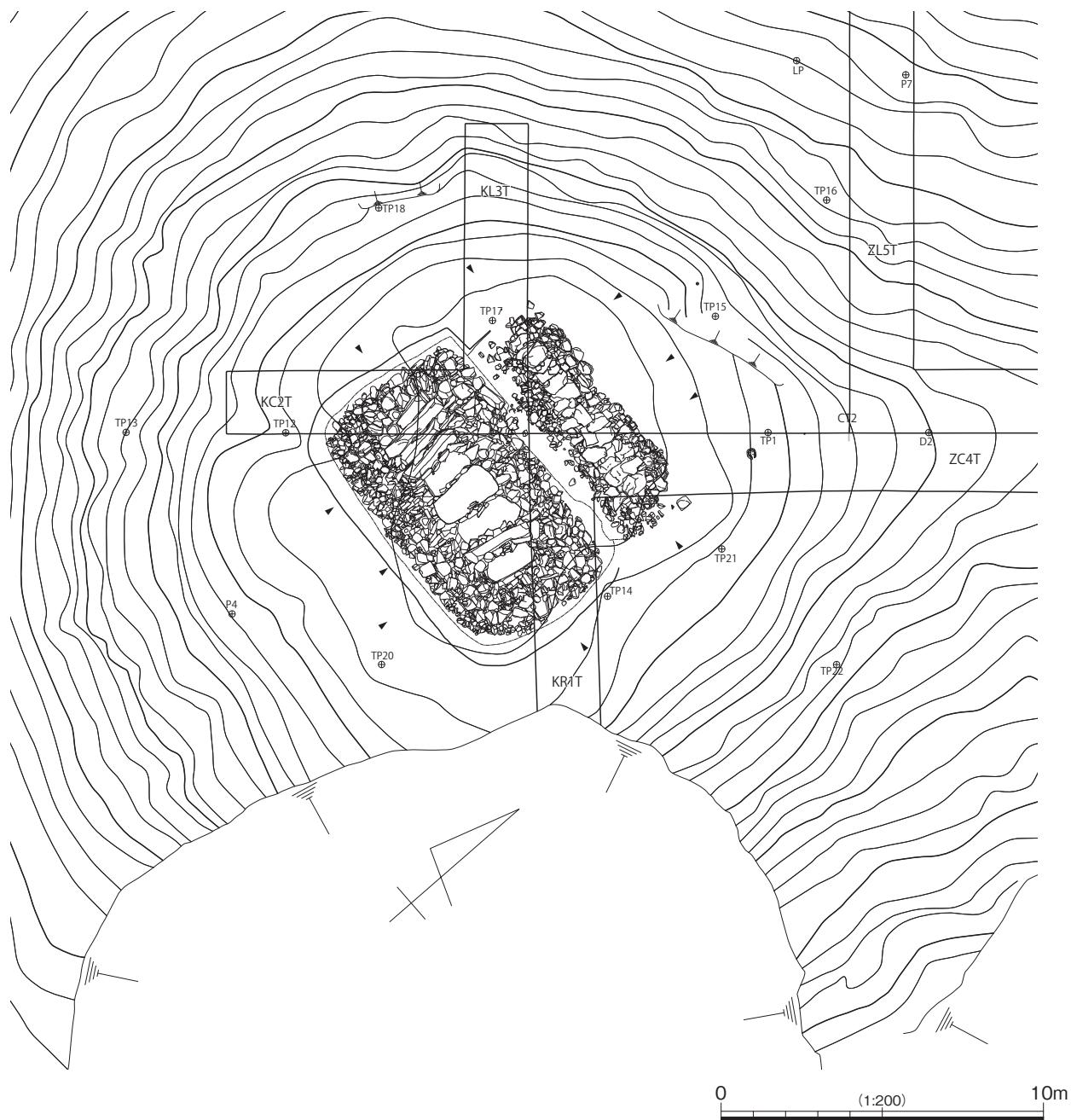


図19 後円部平面

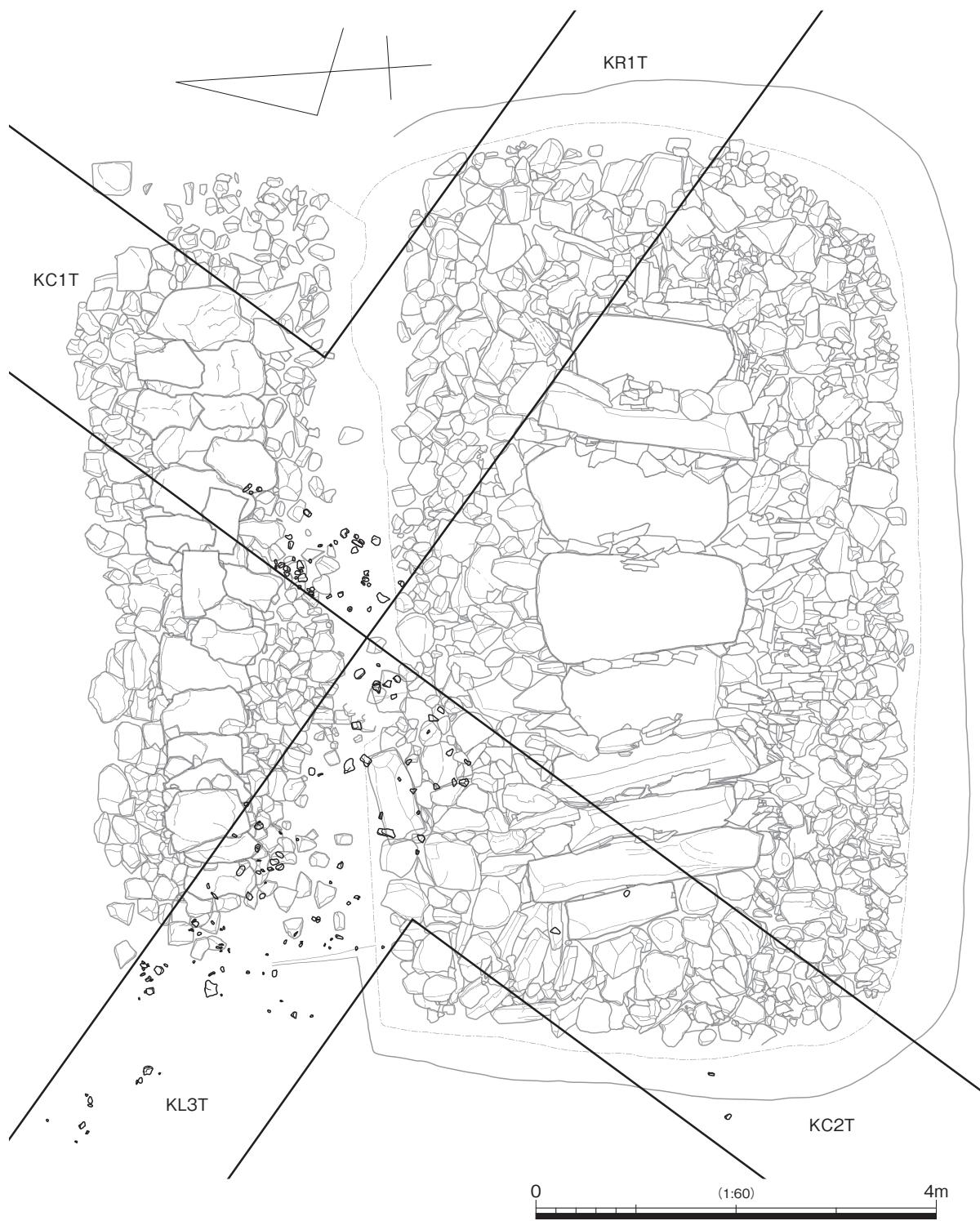
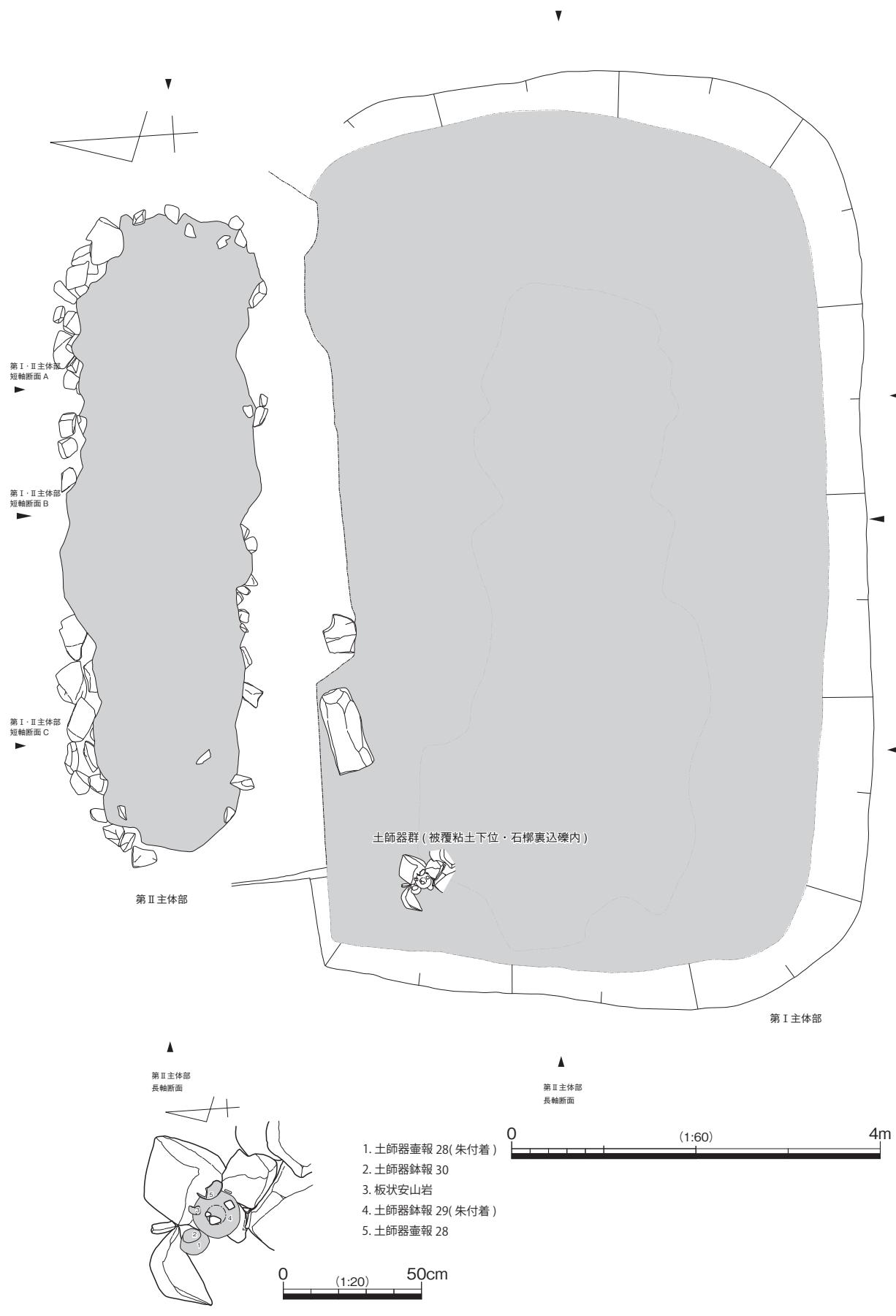


図20 後円部上層礫群平面



第Ⅰ主体部墓壙北西部土師器出土状況詳細

図 21 第Ⅰ・Ⅱ主体部被覆粘土平面及び第Ⅰ主体部墓壙北西部土師器群出土状況

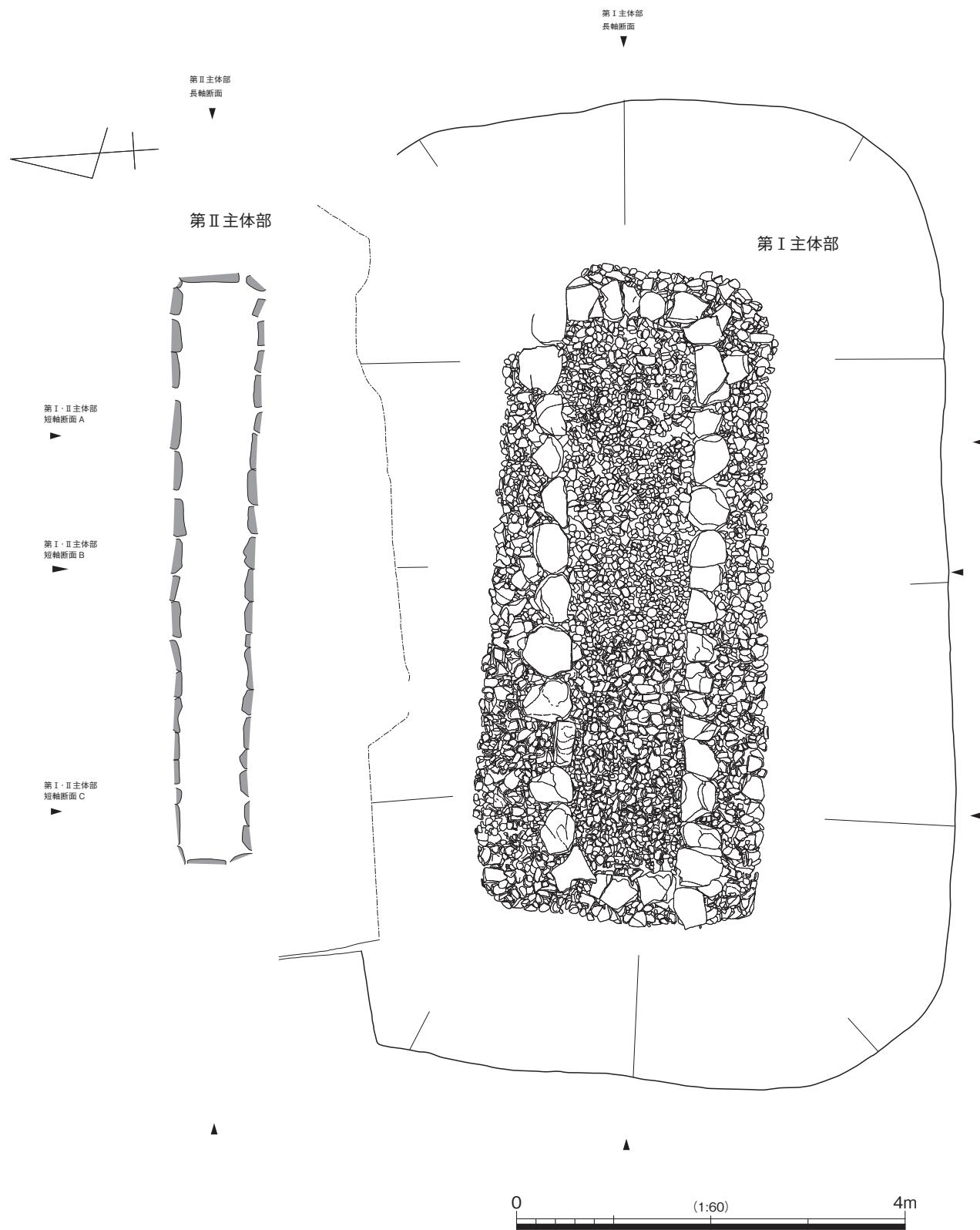


図22 第I主体部墓壙平面と第II主体部との位置関係

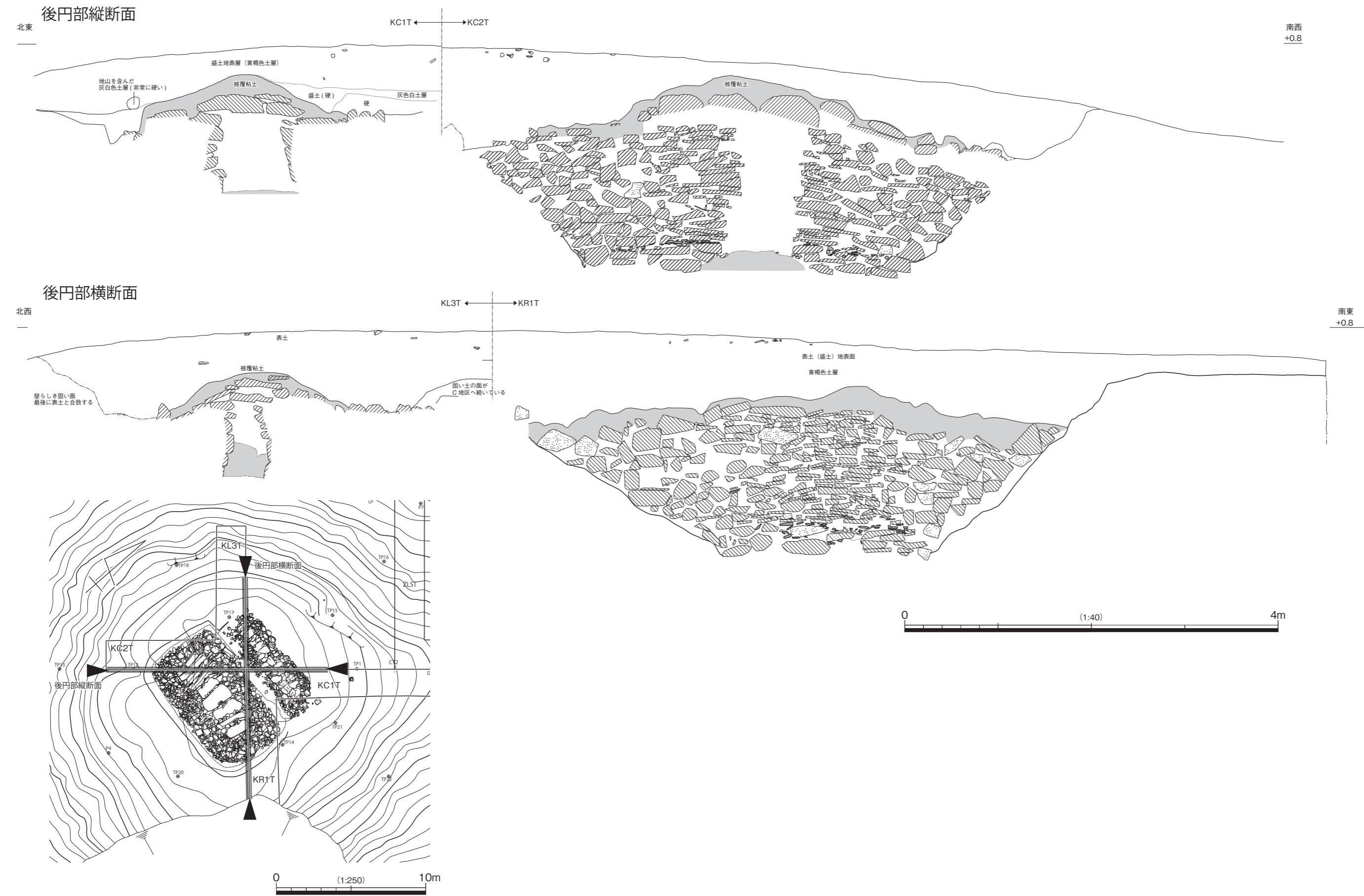


図23 後円部断面

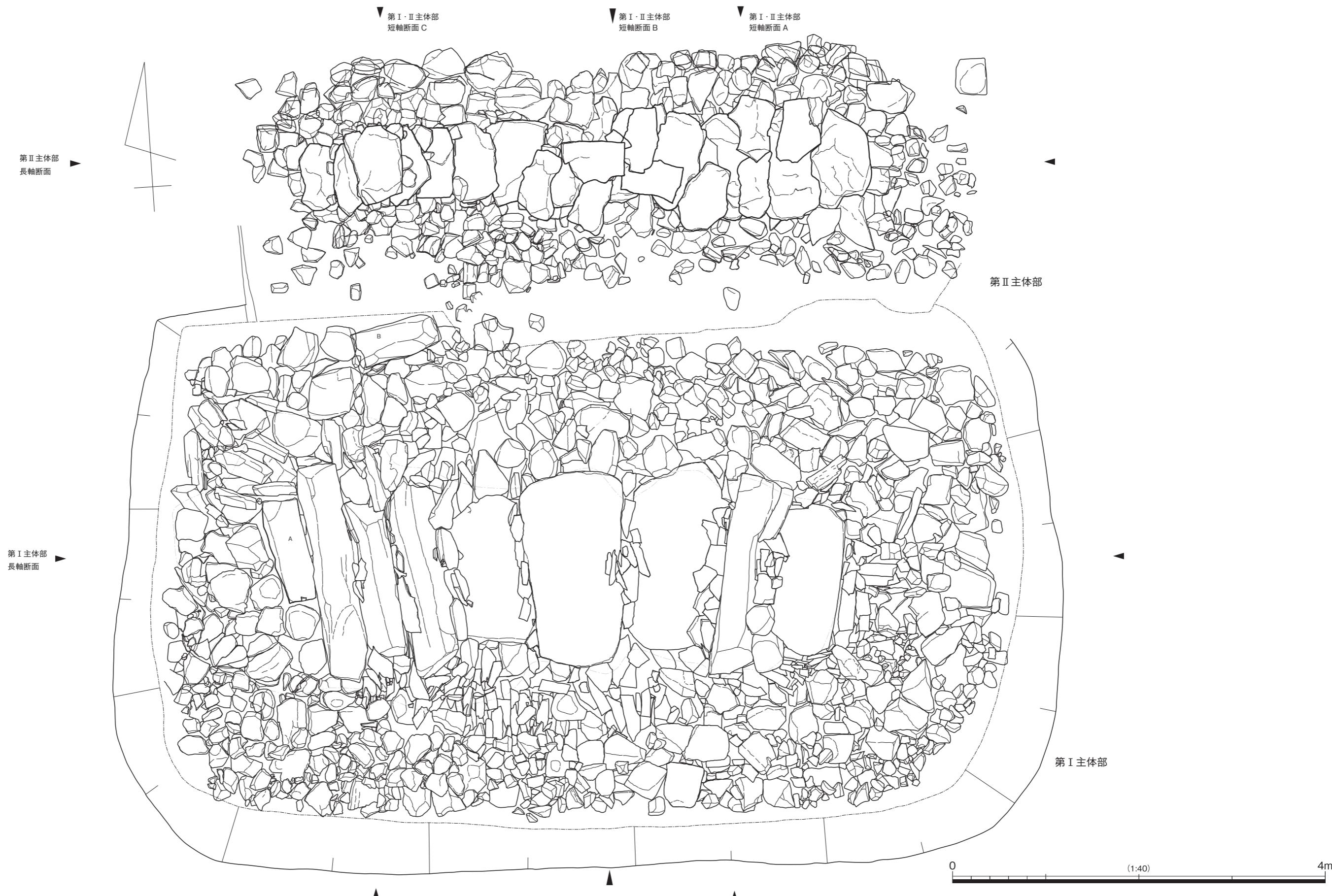


図24 第I・II主体部平面(天井石・裏込石材検出状態)

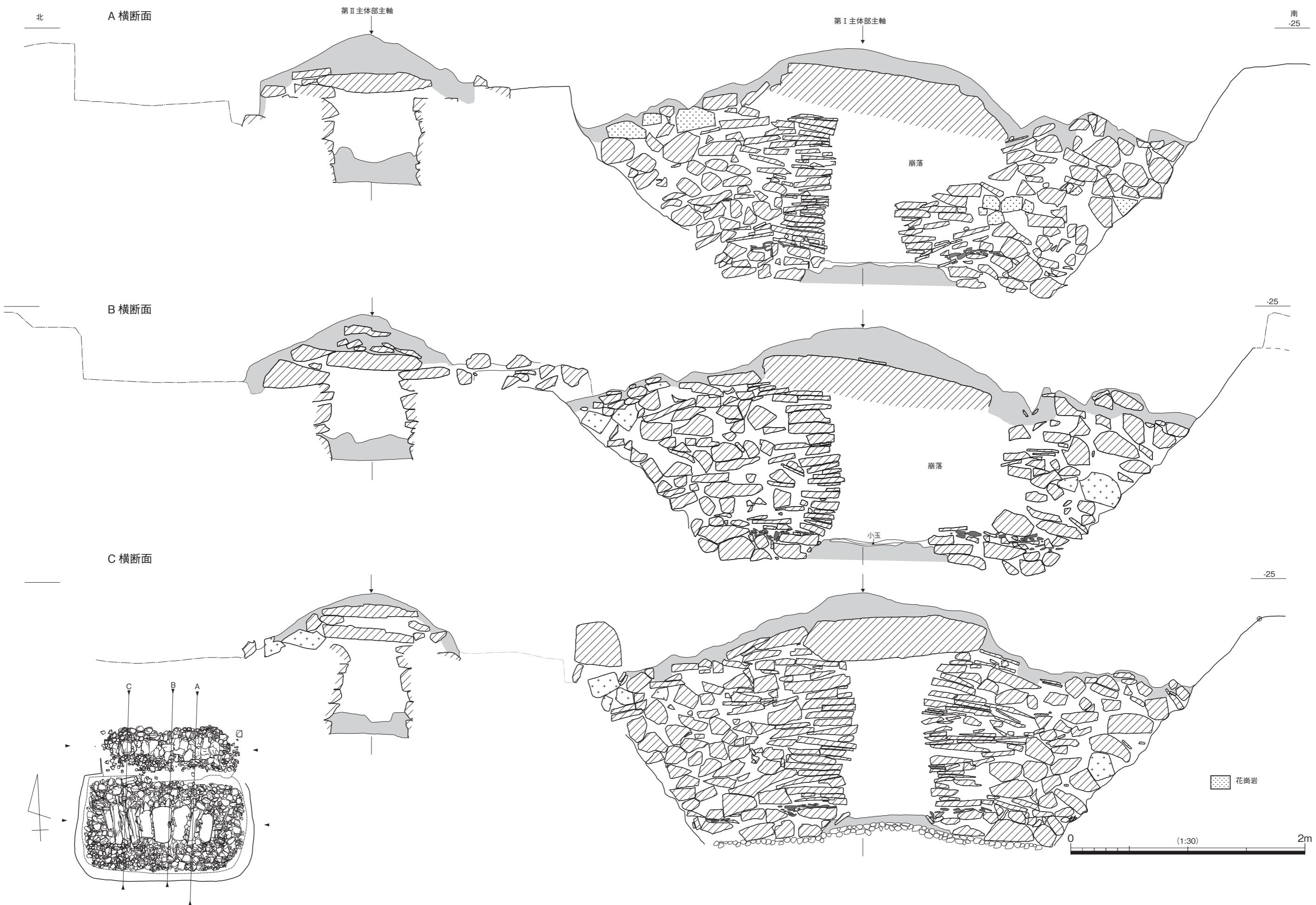


図25 第I・II主体部横断面

### 第I主体部

後円部に併設された2基の竪穴式石室のうち南側に位置する埋葬施設であり、茶臼山古墳の中心となる主体部である。

表土下約30～110cmで面的に粘土が現れ、その範囲は長辺935cm、短辺550cmであり、第I主体部の墓壙掘り方（1010×約640cm）内部の全面を覆っている。なかでも天井石全体とその西側を覆う幅約240cm、長さ770cmに粘土の高まりが残り、厚い部分ではおおよそ30cm、薄い部分では約10cmを測る。第II主体部で見られた粘土とは異なり混じり物の少ない精良な粘土が使用されていた。掘り方と石室間の裏込めにあたる部分では、使用された粘土量が少なく薄いため被覆面に凹凸が著しく認められた。この粘土が被覆された後に掘り方の北西隅付近、掘り方の北辺に沿う格好で半折された柱状の安山岩A、92×41×37cmが置かれており、検出時から疑問を抱かせる存在であった。墓壙掘り方の勾配はおおよそ50度で上り下りのきついものであり、深さは200cm以上を測る。

天井石は8石であり、9番目として西端に置かれた112×39cm、厚さ34cmの柱状の安山岩Bは架設されて無く、見かけ上の天井石になっており、そこに置かれた理由が後になって判明する。すなわち、安山岩A・Bは当初約200cmの一本の柱状安山岩であり、半折された一方は第I主体部の見かけの天井石として使用、もう一方は天井石の粘土被覆後に使用、あらかじめ第II主体部の構築が決定しており、構築時に第I主体部の損傷を避けるために境の目印として配石されたようである。接合に気付くことにより両主体部の前後関係が明確に理解できた重要な事実であった。安山岩Aを上下逆転させると安山岩Bに接合する。

天井石は扁平な安山岩4石と柱状の安山岩3石、柱状の花崗岩1石の計8石からなり、安山岩の扁平で最大は210×107cm、厚さ約25cm、最小で155×80cm、厚さ約27cm、柱状で最大は239×46cm、厚さ約42cm、最小で172×45×41cmを測る。東側から2番目に見られる柱状の花崗岩が220×47cm、厚さ約40cmを測る。

天井石を除去後に石室の南側壁が上部からの重圧により迫り出し、床面に大きく崩れ落ちていることが判明する。北側の壁も同様にその影響を受けており、迫り出し、はみ出した部分が認められ、壁近くの遺物に関しては崩れた石材が覆い被さった状況であった。また、側壁の下位にあっては薄い板状安山岩の石材が粉砕された状況が認められた。四壁ともに板状安山岩が利用されており、基底部の2～3段は厚めの板状安山岩を使用



第I・II主体部上面の被覆粘土



第I主体部天井石検出状況



第I・II主体部壁体上面の検出状況

している。

石室の原形はいくらか損なわれているが、ここでは全体がわかる北壁と東西小口壁から石室の形状等について説明を加える。

石室の掘り方内低位部におおよそ5～10cmの扁平な川原石を敷き詰め、中央の粘土床下部にあたる場所に川原石を一段高く盛っている。その上に厚さ5～17cmの粘土を縞状に積み上げ浅い凹みのある床を作り、東側が-220cm、西側が-227cmで東が若干高い。粘土床の平面形は東側が少し広い隅丸長方形を呈する。

粘土床の上面は長軸547cm、短軸東側95cm・西側80cmを測る。その粘土床の裾に沿って主に横口・小口面を利用した厚めの板状石材を一巡させ、側壁と小口壁の最下段の根石②を据えている。南側より北側に大きい石材が使用されており、南側の根石列は墓壙掘り方南辺に並行して置かれている。その内法は長軸570cm、短軸東側139cm・西側85～110cmを測り、粘土床下端とほぼ同数値を示す。ついで粘土床の上端付近まで根石②に北側が2段、南側が3段を主に積み石をし、高さと平面形を整えた上段の根石①としている。内法は長軸550cm、短軸東側107cm・西側約70cmを測る。

根石①の同レベルで平坦面を意識し、再び粘土床下と同様の約5～20cmの川原石や板石を全面に敷き詰めて-210cm前後で石室構築一段階としての安定を図っている。

遺体および副葬品をどの時点で入れたかは明らかにできないが、安定を図った後は根石より薄めの板状安山岩を石室壁体に、安山岩・花崗岩の人頭大角礫を石室と墓壙間に裏込めとして併用し、壁高135cm前後の壁体を積み上げている。石室内を向く石材は小口面を利用した積み上げが多く長辺はおおよそ40～80cmを測り、壁面の持ち送りはあまり見られないようである。現場では目地としての壁面における石積みの変化は確認できなかったが、図上では-170cm付近で後ろ込めの角礫と石櫛の板状安山岩の石積みの連続する平坦面と思われる部分が見られた。

また、赤色顔料の塗布は特に粘土床部分および根石を含めて床から30cm上位の壁面部分にまでよく残っていたが、とりわけ根石①の表面の高さで目についた。

石室内法は長軸545cm、短軸東側110cm・西側69cm、高さ115cmを測り、主軸方位はN86°Wで第Ⅱ主体部とほぼ同じ主軸方位である。



第Ⅰ主体部西小口壁



第Ⅰ主体部北側壁

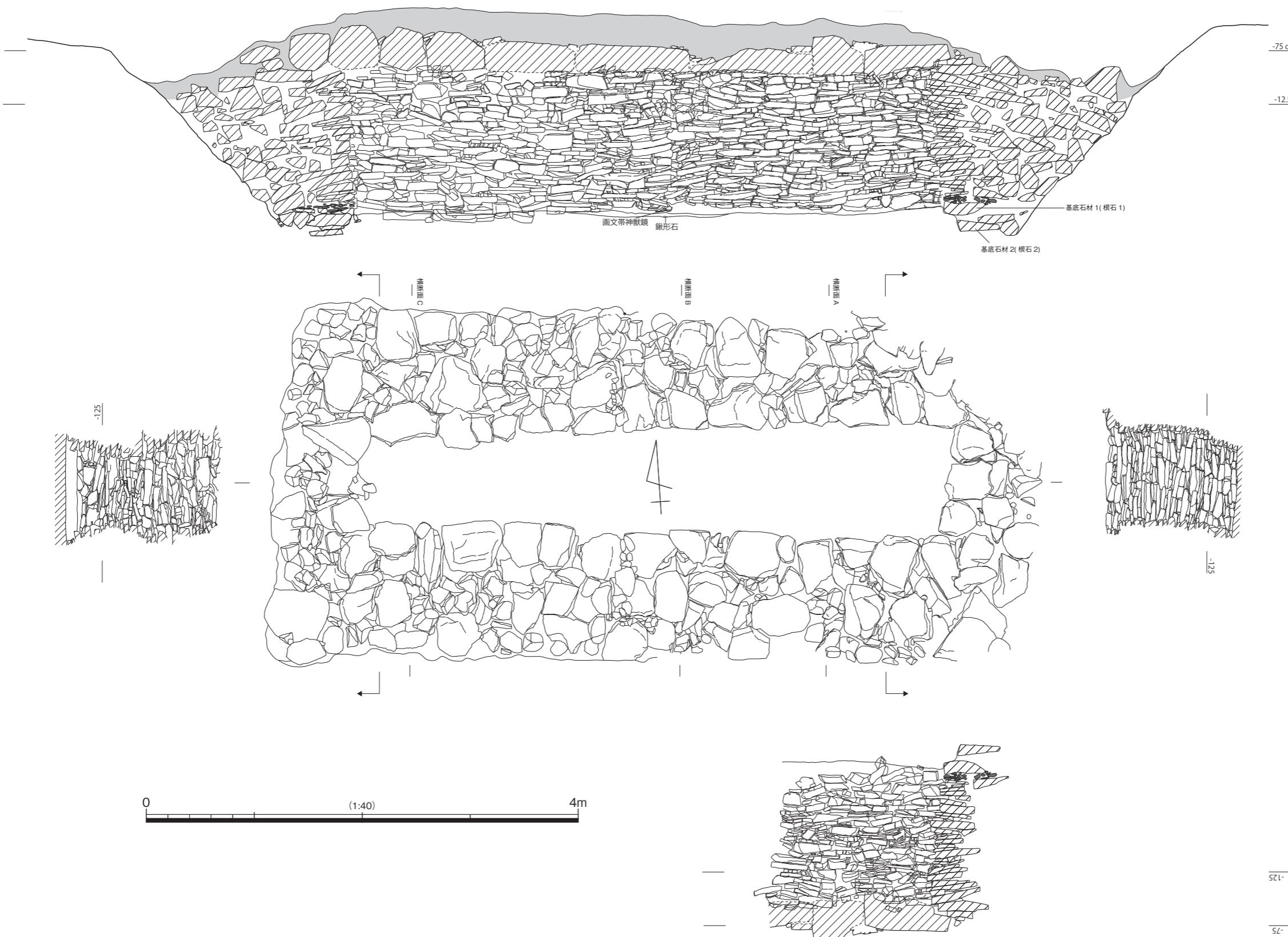


図 26 第I主体部平面(壁体下部検出段階)及び縦断面

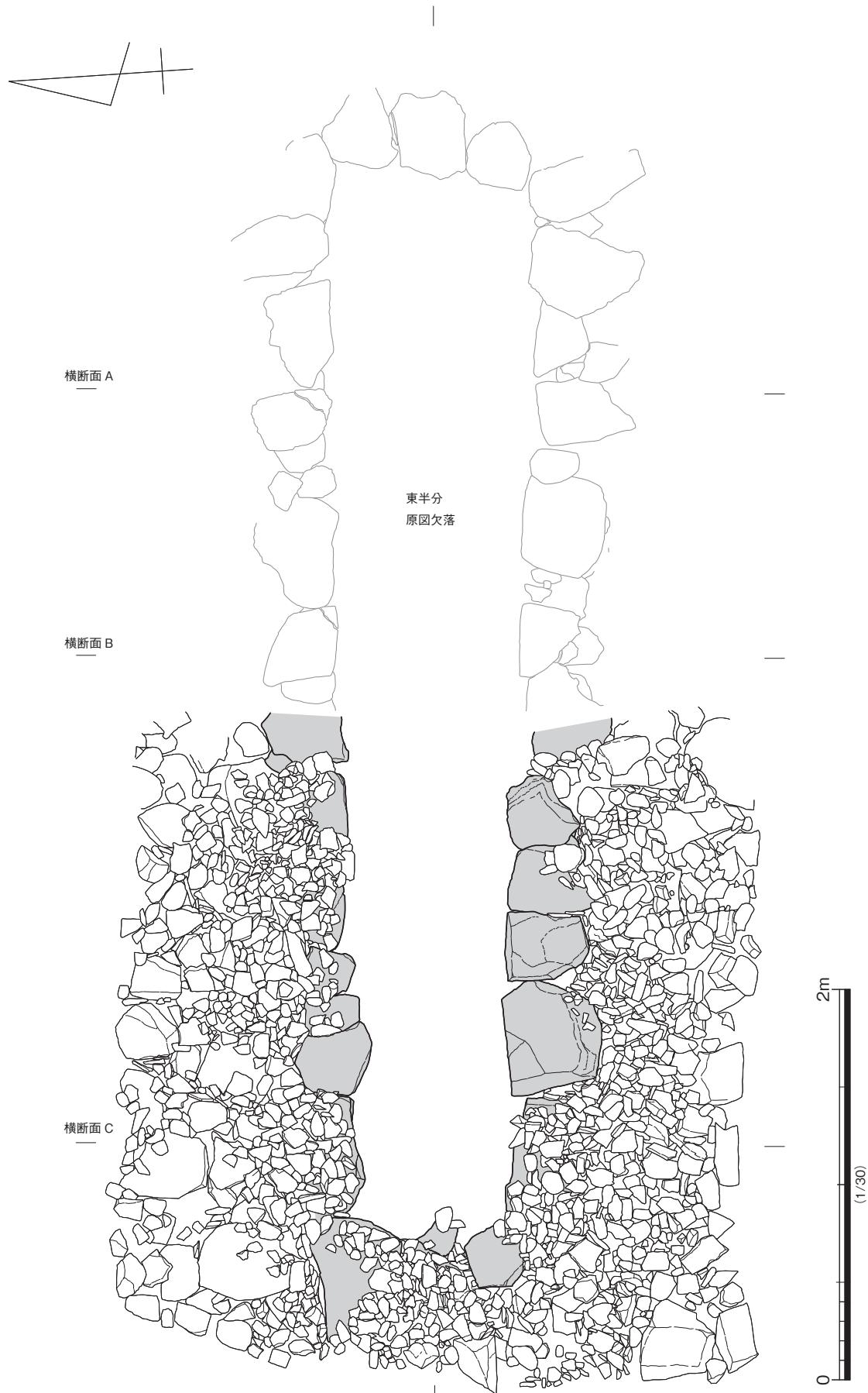


図 27 第I主体部壁体下部上位円礫群平面

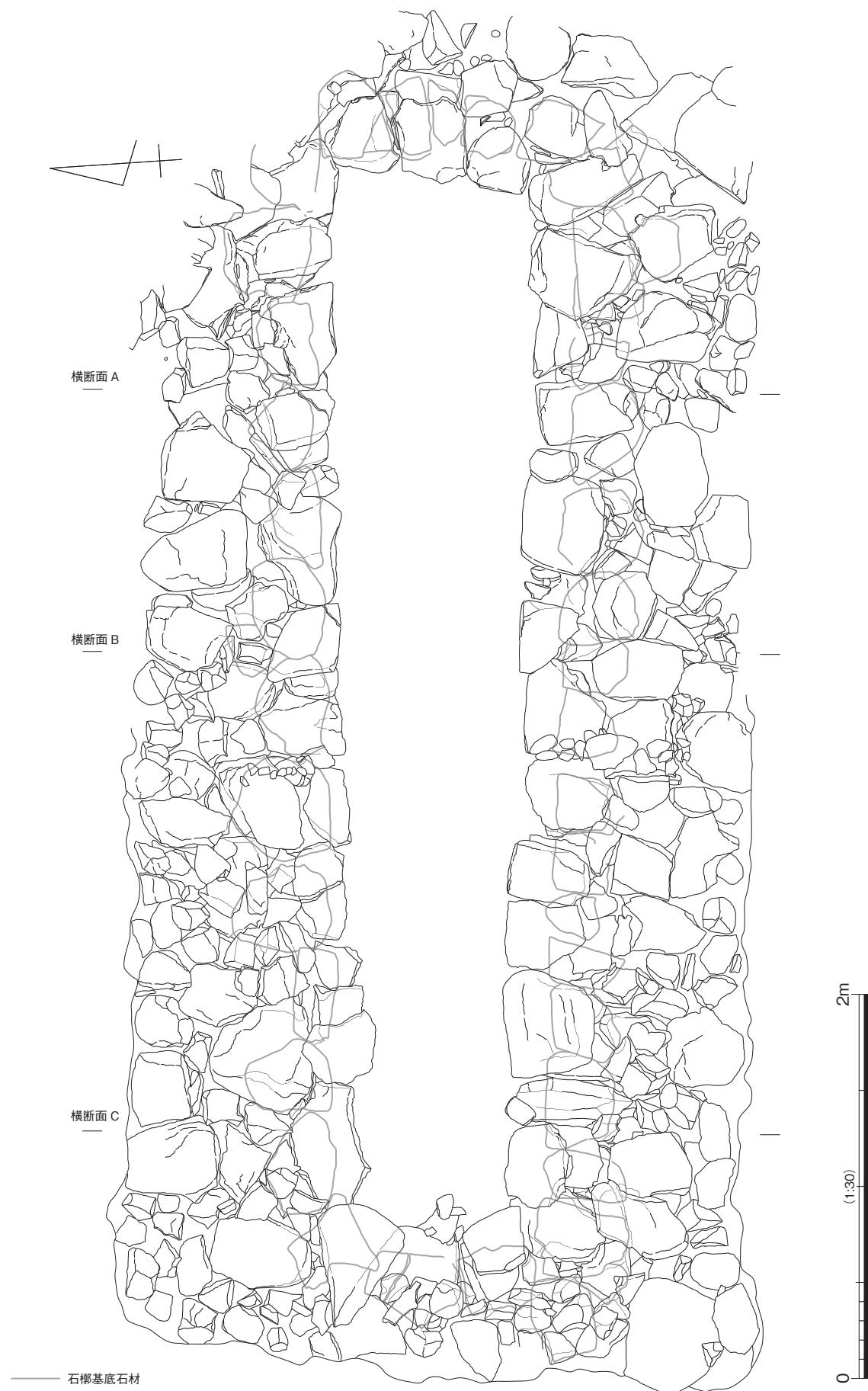


図28 第I主体部平面(壁体下部)と基底石材の位置関係

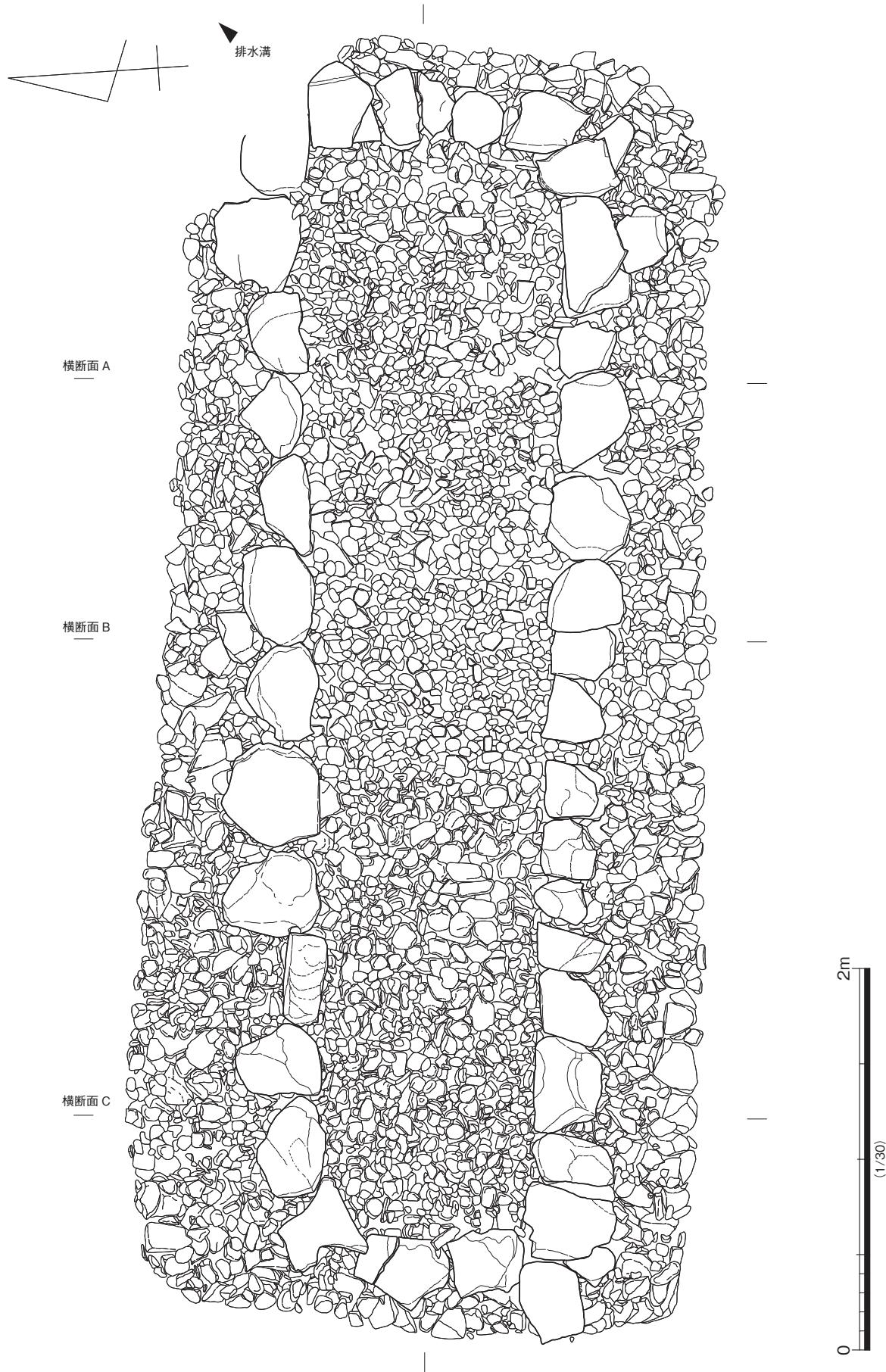


図 29 第Ⅰ主体部基底石材及び礫群平面

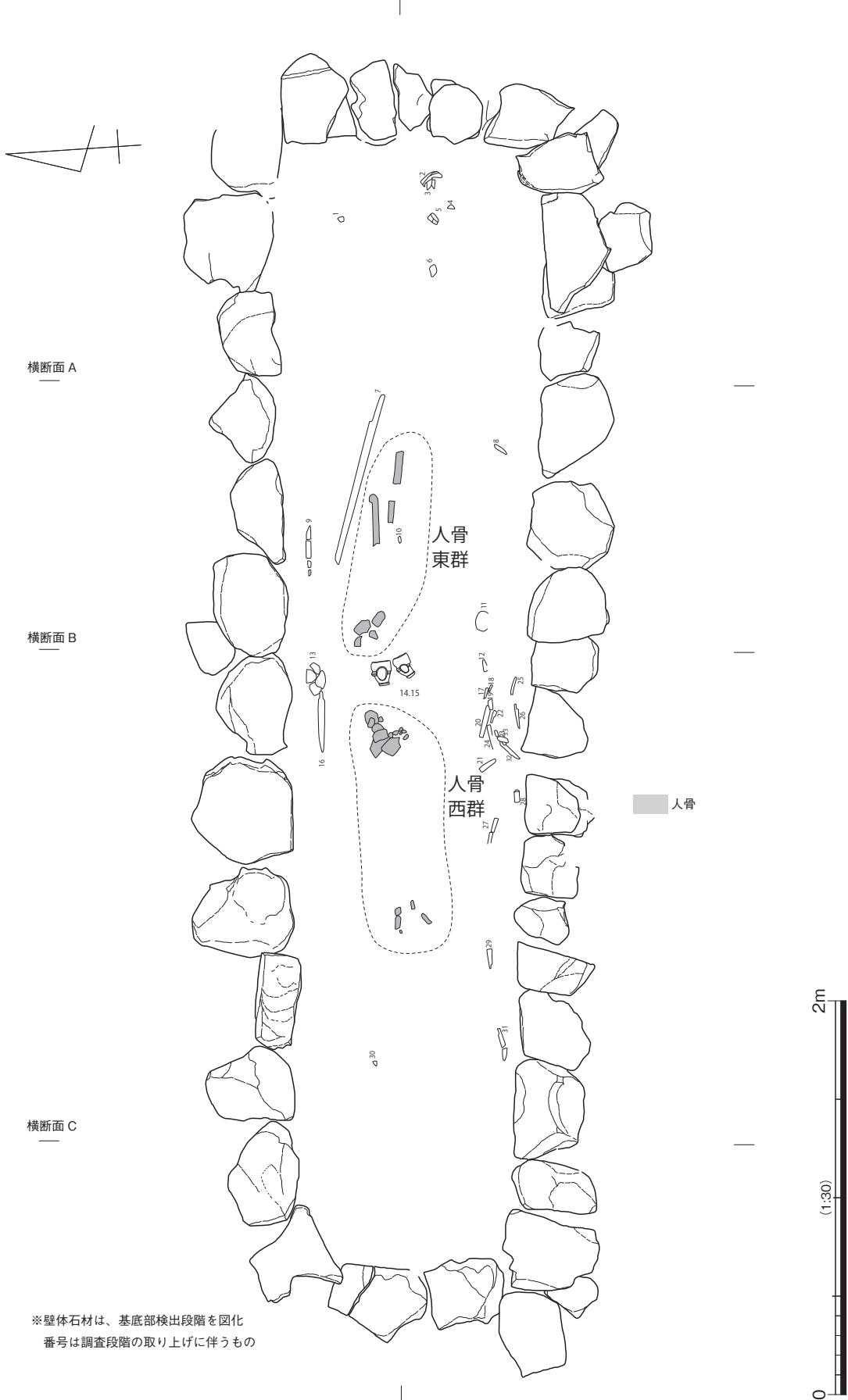


図30 第I主体部副葬品出土状況平面

今回は粘土床下全面に敷かれた砂利層下位の構造については、小範囲の観察にとどめたため十分な記録はとれていないが、砂利層下は径20cmほどの角礫が並べられ、その下位には薄い板状安山岩が平坦、及び中央に向かって重ねながら墓壇底に敷いている。調査中に夜から降り続けた雨が翌朝床面を湿らす程度で終わっている事実は、砂利層下位の未調査部分に排水施設の存在が考えられる。調査前にもその一部が見られ、現在も第I主体部の東側崖面（現表土から約260cm下位）に覗くシスト状の石組みが排水溝である可能性が考えられる。

本主体部に伴う遺物は石室内と石室外に分けられ、石室内の遺物は粘土床と、粘土床と根石間凹部の二カ所から出土している。床面は全体的に粒子の細かい粘土で薄く覆われており鍬形石周辺は特に目立った。現在、石室内の遺物分布原図が不明のため出土状況の詳細については具体性の伴わない記述に終始している。

ここでは根石①の平面プラン段階での遺物分布図のトレースを参考に石槨内の状況を説明する。粘土床中央は2個の鍬形石14・15が頂部西に向けて並び、北壁部の粘土床端（-218cm）に鏡面を上に向けた鏡13が1面・鉄剣16、凹部に鉄器類、南壁部の粘土床端には土器1点11・鉄剣などの小型の鉄器が多く見られ、遺物の大半が集中する場所である。また、鍬形石を中心に東西に頭骨・歯や脚部の人骨片が認められており、頭を突き合わせた格好で二人の人物が同時に埋葬された可能性がうかがえる。粘土床の東端ほぼ中央からは破碎された手焙り形土器片数点2、東の人骨北側からは切っ先を西に向かって直刀1点7、剣先を東に向かって短剣1点9、南側では根石に接して横転した埴形土器1点11が見られる。前述した中央部では鍬形石と頭骨の周辺から勾玉・管玉各1点、ガラス玉15点以上が出土している。西の人骨には南側の根石①下から数点の鉄器が出土したのみであった。棺の存在や具体性は明らかにできなかったが直刀、鍬形石、玉類とわずかな鉄器が粘土床中央の幅約60cmの非常に浅い凹み内から出土している。他には両人骨の足下に鉄滓かと思われる1cm以下の粒が比較的まとまって出土していた。また大形巻き貝の芯にあたると思われた小破片も見られた。

他の9・11・12・17～29・31は粘土床の上端周縁と粘土床と根石間凹部からの出土であるが、南壁の根石②から北側20cmほど全体に亘って迫り出した根石①の下からは8・22・23・25・26・28・29・31の鉄製品が確認でき、根石②の裾まで落ち込んでいる状況を呈している。本来は根石②の平面形の上に四壁が立ち上がり、石室が構築されていたことが想定でき、その状況は東西の両小口壁の根石①・②と板状安山岩の石積みの関係の中に看取できる。



第I主体部粘土床と壁体下位の礫群



鍬形石

一方、石室外の遺物は墓壙内の北西部、粘土に覆われた石室後込め解体中の角礫間からまとめて出土した4個体の土師器である。-141~-148cm間の出土で真砂土が他の角礫間より多い場所から石に囲まれた状態で発見された。小皿3は壺2の蓋のように載せられており、杯5、壺6と置いていったようであり、4点すべて完形品である。発見当初は赤色顔料を石室内に塗布し作業後に埋納された土器だろうと思えるほど、壺内は真っ赤であり、皿・杯もほぼ同様であった。また、墳丘盛土の掘り下げでは埴輪小片・土器小片、石室裏込めの角礫間から土器小片の出土が若干見られた。他に掘り方の外縁を巡る可能性のある幅約50cmの細い溝が小トレンチで見られた。(高畠)

## 第Ⅱ主体部

後円部に併設された埋葬施設のうちの1基で、第Ⅰ主体部の北側に位置する竪穴式石室である。墳丘のほぼ中央を第Ⅰ主体部が占め、その後に第Ⅰ主体部より遅れて築造されたもので、被葬者や埋葬場所はあらかじめ決まっており、埋葬は計画的に実行されたと考えられる。

第Ⅰ主体部と比較をすると使用材料や石室規模、副葬品の質量など内容においても小規模である。中軸の長さにおいてのみ第Ⅰ主体部を上回っている。調査途中に保存が決まつことにより発掘は石室内の調査にとどまり、石室の構造や掘り方を確認する解体は実施していない。

表土下28~44cmで天井石に載せた粘土が現れ、その範囲は長軸690cm、短軸は東側が幅180cm、中央が幅200cm、西側が幅135cm、粘土の厚さは10~35cmで天井石及びその周縁を被覆していた。平面形は歪な小判形で断面形状は蒲鉾形を呈する。被覆粘土の裾部には角礫が見られ、特に北側に多く認められた。

天井石は13枚が直接石室の上端に架かり、中央部及び西側の一部には天井石が二重になっている場所があり20石以上を数える。東側に大きい石材(123×82×16cm)が用いられ、西側は長さ、幅、厚さともに少し小さくなっている。天井石の架設は東の2石目を最初に置き東西に向かって順次並べられている。

石室の内法は長軸が590cm、短軸東端で80cm、中央で62~66cm、西端で61cmを測り、東から西に向かって狭くなっている。主軸方位はN 86°Wである。

底面の灰白色土は西側が-157cm、東側が-161~-164cmで、わずかではあるが西から東に向かって傾斜をしている。四壁は主に厚手の板状の安山岩や角礫、一部に花崗岩が使用され、基本的には4段から5段の積み石で構成されており、高さは80~95cmを測り東側が少し高い。第Ⅰ主体部などに見られた薄手の板状安山岩の使用は認められなかった。

底面上は粘土が敷かれており、その中央に長さ505cm、幅16~28cmの浅い凹みの粘土床が認められる。



第Ⅱ主体部



第Ⅱ主体部粘土床と側壁

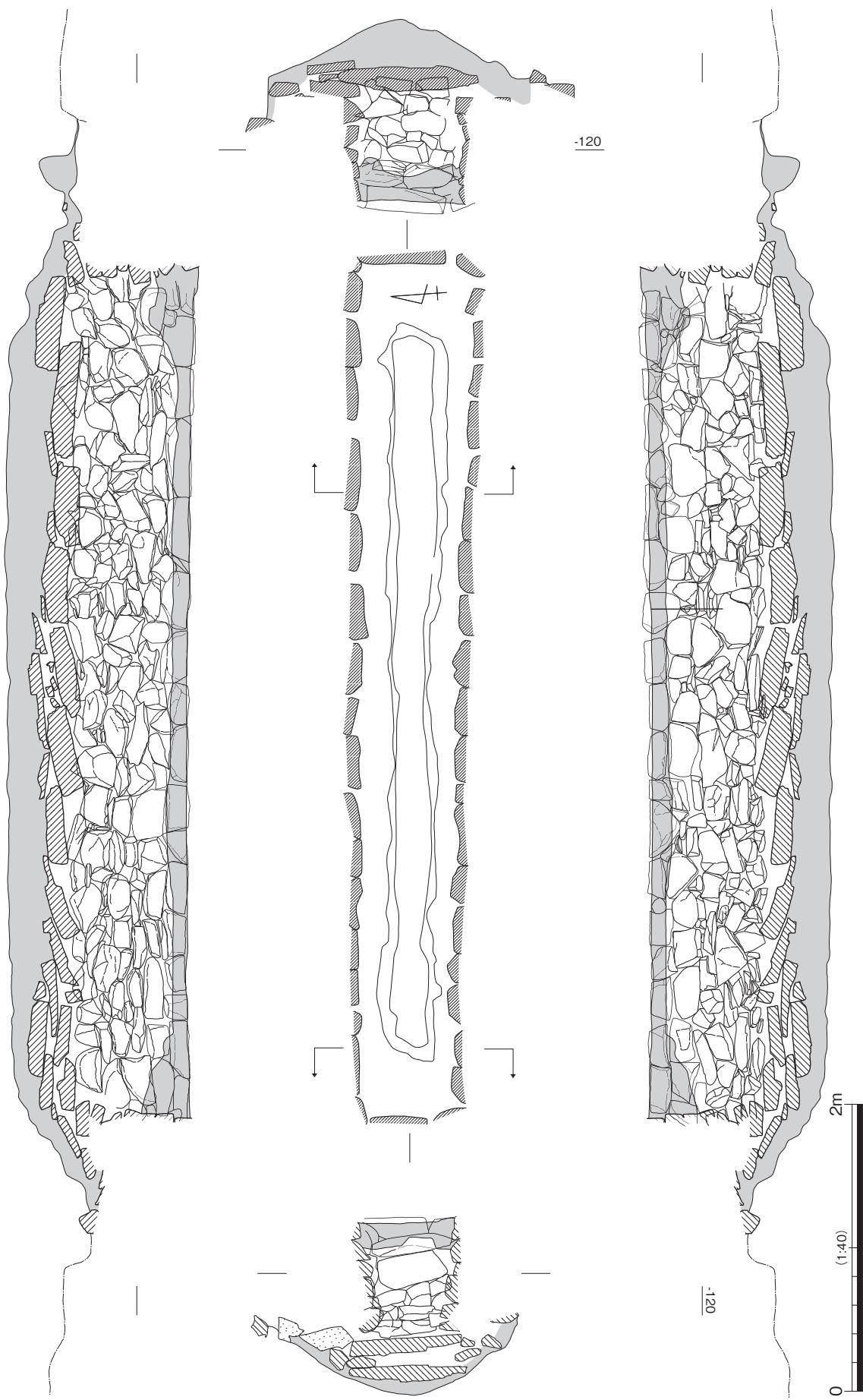


図 31 第II主体部平・断面

小さい木片の出土などから木棺を想定することも可能である。小口粘土は厚さ35cmあり、床面にあたる部分では10cm前後を測る。

遺物の出土は東側に集中して認められたようである。現在、遺物分布図の原図が見当たらないため明確ではないが、日誌などの記録を参考に説明を加える。石室の東半部から鉄製品を中心に副葬品が見られ、剣1点・鎌4(5)点・斧1点・ヤリガンナ2点・不明鉄製品3点とガラス小玉4点がある。棺内遺物は剣先を西に向かって、東壁から約175cm西の凹み内の南側に位置する短剣1点がある。また、東壁から北壁に沿って45~135cm間には鉄斧と鉄鎌、ガラス小玉、大形の鉄鎌が根石と粘土床の間隙から壁に接して出土している。鉄斧は刃部を、大形鉄鎌も尖部を西に向けて出土している。天井石の配置や規模、石室・粘土床の幅、遺物の出土状況などから本主体部の頭位は東側であったことが想定できる。(高畠)



北側壁際の大型鉄鎌様鉄器

### 第Ⅲ主体部

前方部の墳頂東半部に位置し、墳丘主軸に直交して東西方向(N 50° W)に設けられた組合せ箱式石棺である。ZC1Tで確認されたもので盗掘は受けおらず、未掘のままでの出土である。

表土下7~18cmで天井石が現れ、第Ⅰ・Ⅱ主体部の天井上部で見られたような被覆粘土は検出されていない。天井石は10~12枚ほどの薄い板状の安山岩が一部重なり使用されており、西側から東側に向かって天井石を被せている。石棺も同様の石材9枚の広口面を利用し、その内の7枚が西側から「ハ」の字状に立てられ、それらに挟まれる格好で両小口に厚めの石材を立てた組合せの棺身を作っている。



第Ⅲ主体部

石棺内からは頭部を西に向いた人骨一体と土器小破片6点が発見された。人骨は上向きに身体を伸ばして埋葬されており、頭部が天井石に接するほどであった。

その出土状況は少し北東側に傾いたほぼ完全な頭蓋骨、それ以外は保存状況が良くない右上腕骨、左鎖骨・肩胛骨、左大腿骨、左脛骨など的一部がほぼ原位置を保って認められた。

石棺の規模は内法長軸178cm、短軸西側45.5cm・東側34.5cmで頭部が広く脚部が狭く作られている。深さは17~26cmであり、床面は頭部である西側が脚部である東側よりわずかに低い状況を呈している。人骨の残り具合や石棺の規模から約160cmを測る被葬者の身長を推測できる。人骨の出土した床面は-141.5cmを測る。この石棺は下部の解体までの記録保存は実施できていない状況で埋め戻されている。(高畠)

### 第Ⅳ主体部

前端部に数基ある埋葬施設の一つで、ZR1Tの延長線上に確認された土壙墓であり、墳端から北東方向約

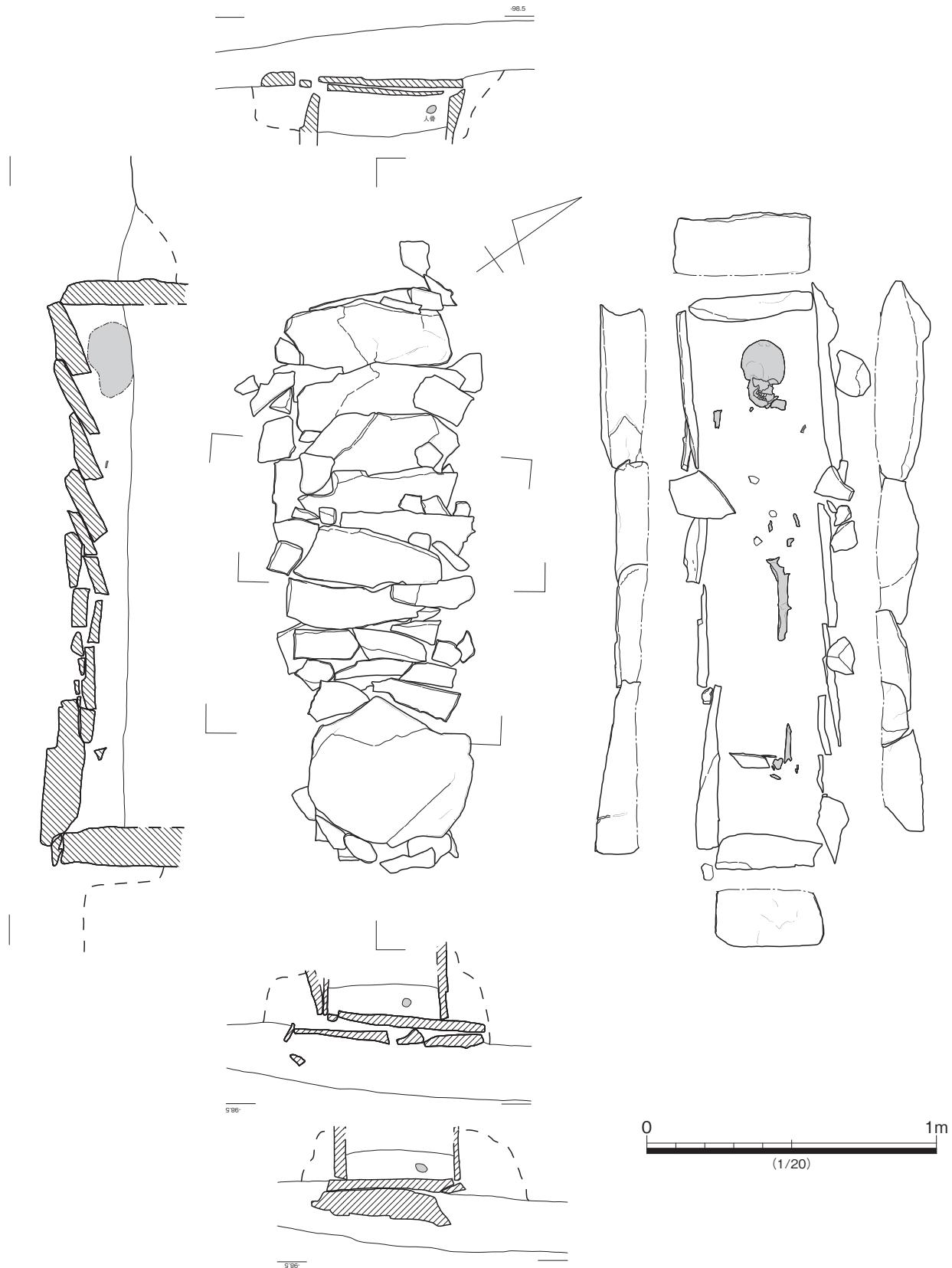


図32 第Ⅲ主体部平・断面

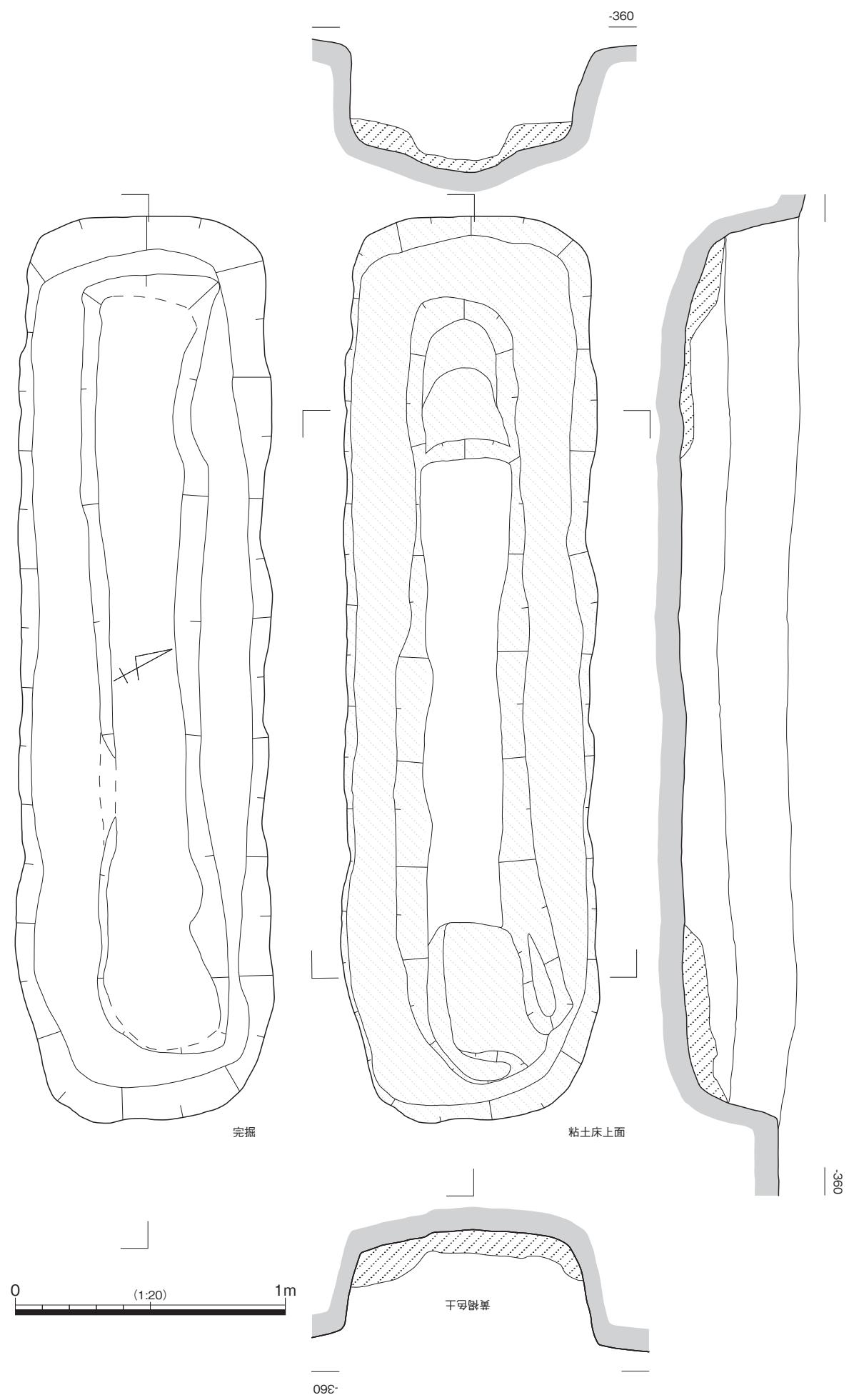


図 33 第IV主体部平・断面

450cmに位置する。前方部頂に所在する第III主体部同様、墳丘主軸から東側に所在する。

尾根筋を切断して整形した前方部墳端線（N51°W）と主軸はほぼ並行しており、第V・VI・VIIIの主体部とも同一の主軸方位を持ち、センター－300～－338cm間、表土下41～62cmにおいて発見された比較的大型の土壙墓である。掘り方は西から東、南から北に緩やかに下降する地山加工面に掘り込まれており、掘り方上端での長軸335cm、短軸は89～94cm、深さ33～45cmを測り、主軸方位N55.5°Wで隅丸長方形を呈する。

土壙底は長軸288cm、短軸約40cmで上端に沿う形での一段浅い凹みが見られ、凹み中央の長軸171cm、短軸24～24cmの長方形範囲以外の床面全体には粘土が敷かれており、その長方形範囲の小口両端の粘土は安定を図るため配置された感じを受けた。粘土の敷かれていらない場所に遺体を配置した可能性も考え得ることができる。床面は－415cmを測り、東側がわずかに高くなっている。

床底に敷かれた粘土の厚さは3～14cm、色調にも灰色・白色・黄褐色のバラツキがあり、塊状の粘土に花崗岩の砂粒が多く粘着性も弱く良質の粘土ではないようである。中央長方形範囲外は西側の粘土がやや良質であり、粘性は東側が強い感じを受けた。掘り方上面では土器片が数点見られたが、土壙内からの出土遺物は皆無であった。（高畠）

### 第V主体部

前端部から北東に約750cm、丘陵部が北から南側に緩やかに削り取られた斜面裾部に位置する。第III主体部の組合せ箱式石棺や第IV・VI・VIII主体部と同様に墳丘の主軸線から東側に作られており、主軸方位はN46°Wである。

センター－304～310cm間、表土下40cmにおいて天井石が現れるが、粘土の被覆は認められなかった。

掘り下げ中に約20cm角の安山岩が、北西の天井石より約8cm上位の黄色微砂層から出土している。

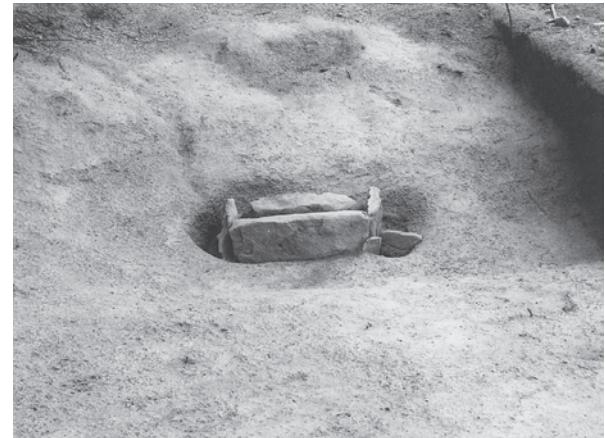
石棺は天井石2枚、側石2枚、小口2枚で計6枚の板状安山岩で構成されており、天井石の隙間は小石を詰め塞いでいる。天井石、側石は厚さ約10cm、小口は厚さ約5cmを測る薄めの板石が使用されている。石棺内は厚さ約10cmの黒褐色砂質土を敷き床面としており、－383cmを測る。なお、床面西側に枕石とも考えられる17×9×3cmの安山岩られ、少量の朱・木片らしきもの以外の遺物は出土していない。

石棺内法は長軸50cm、短軸東側幅28cm、西側幅17.5cm、高さ20cmを測り、小児用の埋葬施設と考えられる。床面の幅や天井・床面の高低差からは頭位は東向きと推測できる。

石棺掘り方は長軸100cm、幅56cm、深さ18～35cmで小判形を呈する。その小判形の掘り方の北辺を共有する格好で東西推定225cm、南北120cm、深さ約10cmの皿状の浅い掘り方が見られる。（高畠）



第IV主体部



第V主体部

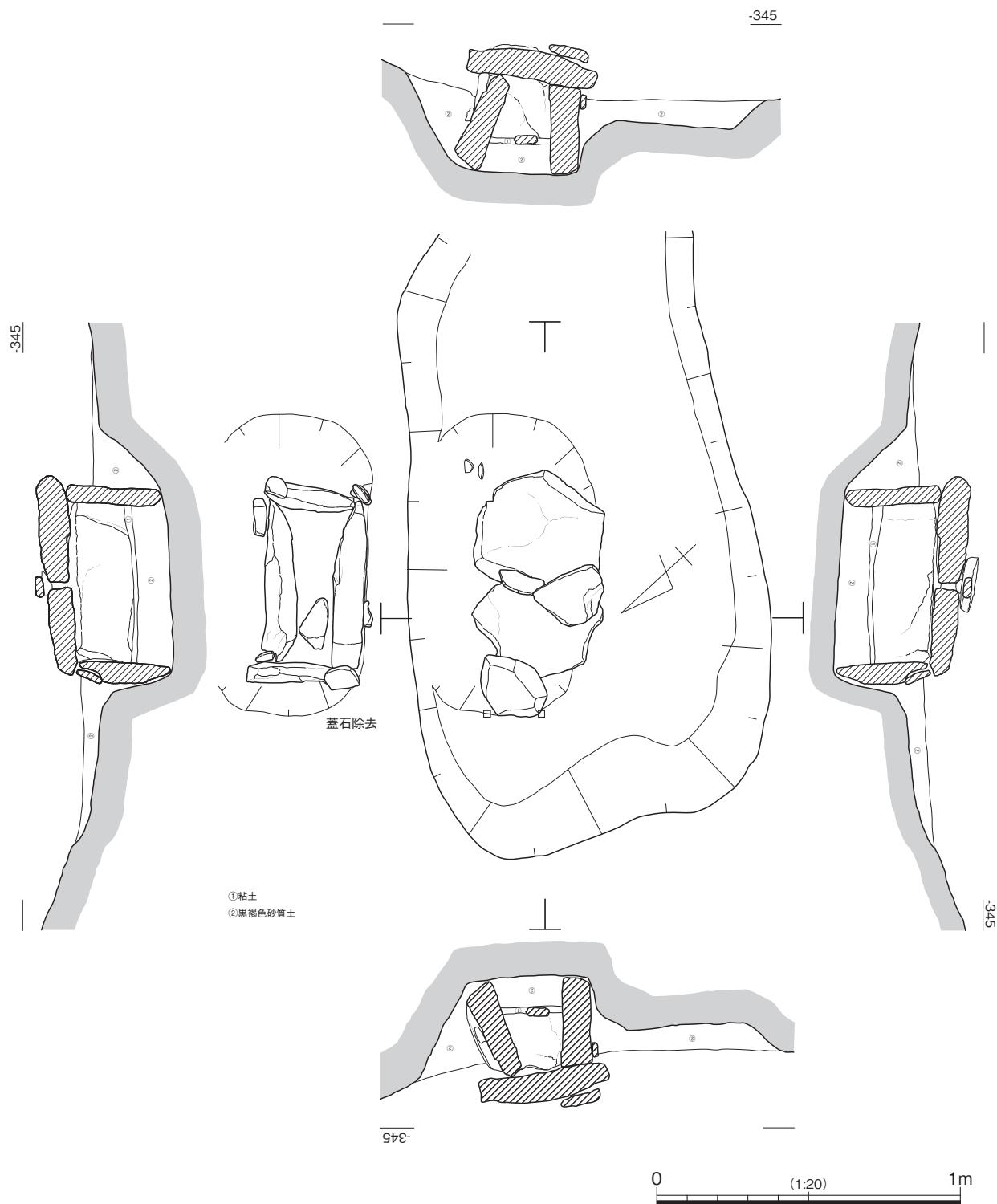


図34 第V主体部平・断面

### 第VI主体部

ZR1Tで検出された遺構である。前方部の墳端、地山整形段の下端から北東側約110cm、茶臼山古墳に最も近くに位置する組合せ箱式石棺である。第IV・V・VII主体部とほぼ同様に主軸は前方部墳端線に並行しており、N50°Wの方位である。

センター - 280 ~ - 300cm 間、表土下 70 ~ 80cm で石材の一部が見られたが、後世の削平・攪乱により石棺の大部分が破壊を受けていた。天井石は失われ南側の側石3枚と北側の側石1枚を残すのみであった。石材は厚めの板状安山岩で広口面を立て、掘り方傾斜に沿い外開き気味に配置されていた。床面の石材掘り方から北側5枚、南側5枚、小口2枚の計12枚の使用が推定できるが天井石の枚数は不明である。

また、石材抜き取り痕から石棺内法は長軸176cm、短軸25~35cm、深さ約30cmが推測できる。短軸幅は東側が広く、西側に向かい狭くなり、床面は - 401 ~ - 409cm で東から西に向かってわずかではあるが低く、石材を安定させる掘り方は北側と東西小口が深く掘られている。これらの状況や遺物出土の位置などから頭位は東向きと考えられる。

石棺を設置するための土壙掘り方は長軸235cm、短軸約64cm、深さ27~50cmを測る。この掘り方と石棺の西側小口の後に30×20cmのスペースがあり、そこには口縁を上に向けたほぼ完形を呈する鈍重な土師器の甕が1個体据えられていた。この甕以外には埋葬に伴う遺物は見られなかったが、石棺内部および上面には墳丘・前端に散在する安山岩や埴輪の破片の混入が少なからず認められた。(高畠)



第VI主体部

### 第VII主体部

ZC2T、トレンチ幅200cmの中に確認された埋葬施設である。第III主体部の南西約870cmの前方部上に位置し、墳丘主軸に直交して設けられた粘土櫛である。主軸は第III主体部とほぼ同一方向を示しているようである。トレンチ調査中に古墳の保存が決まり、周辺を拡張することなく粘土上面までの調査で作業を中止し、埋め戻しを行ったため全貌の把握は不可能であった。

調査途中までのトレンチで判明したことを記すと、センター - 216 ~ - 232cm 間、表土下 44c ~ 56cm で南東壁と北西壁に粘土櫛の断面が現れる。すなわち、粘土の範囲は長辺ではトレンチ幅200cm以上で、短辺では幅74~96cmの差が認められ、平面プランはほぼ長方形を呈する。



第VII主体部

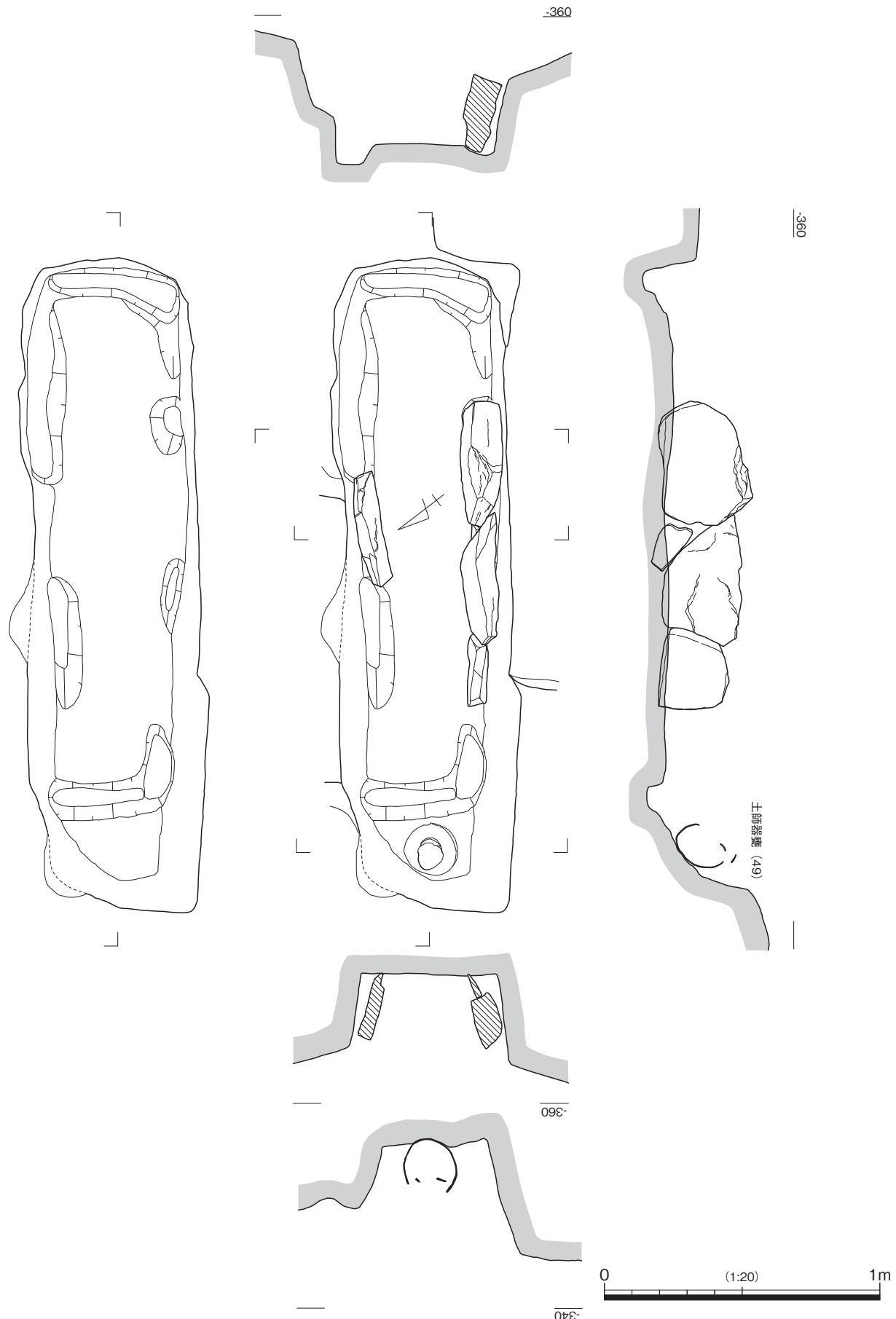


図35 第VI主体部平・断面



図36 第VIII主体部及び配石土坑平面

両端の壁に見られる粘土断面は中央が10cmほど凹み、あたかも棺材が朽ちて陥没した状況を呈しており、北西壁の凹み上端幅約38cm、南東壁の凹み上端幅約54cmを測る。南東部が広く北西側に徐々に狭まっていくことから頭位は東側であった可能性が強い。

また、粘土櫛の掘り方の有無については明確には捉えることができなかつたが、粘土櫛上の左側断面に段状の面、右側断面に積み重ねられた土嚢状の塊が見られ、脚部側の断面にも同じ土嚢状の土層が認められる。墳丘の築造時に埋葬施設が作られた可能性も考えられるが、今回は保留とし今後の類例を待ちたい。(高畠)

#### 第VIII主体部・配石土坑

前端部の南東側、第IV主体部から150cm東に位置する土壙である。前端部に所在する第IV～第VI主体部と同様に前方部の墳端線にほぼ並行して作られており、主軸方位はN51°Wである。



第VIII主体部と配石土坑

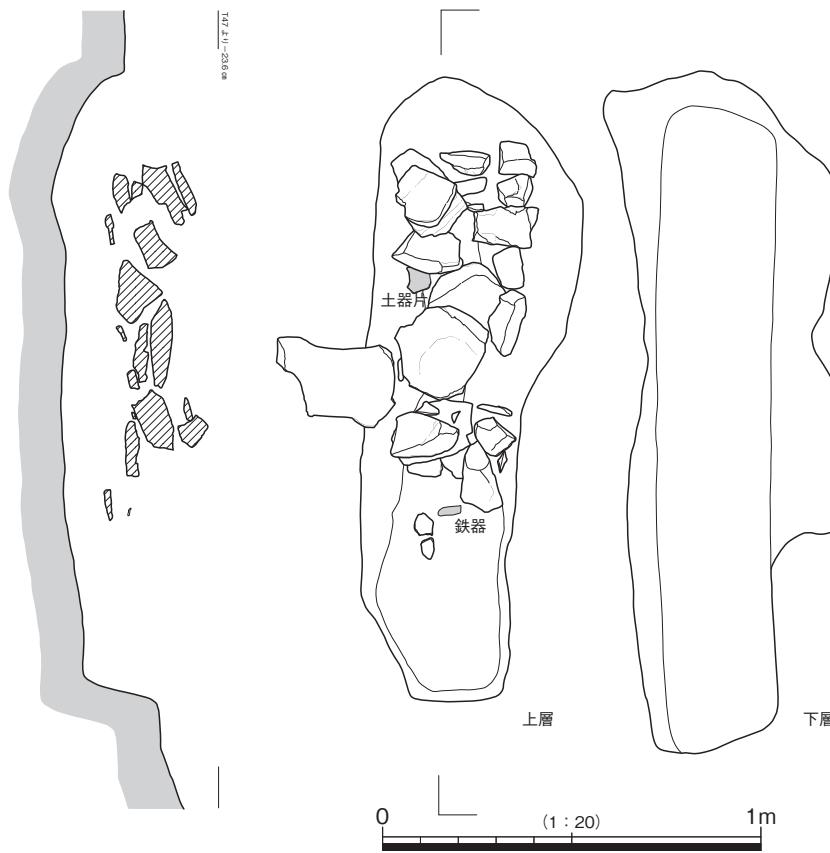


図37 第VIII主体部平・断面

コンター - 325cm、表土下 53 ~ 69cmにおいて土壙掘り方上端が見られ、平面プランは長方形を呈する。長軸 170cm、短軸 30cm、深さ約 20cm を測り、土壙上端及び床面は西から東に向かい緩やかに傾斜をしている。

土壙内には安山岩の角礫が  $110 \times 40\text{cm}$  の範囲に 30 個ほど見られるが、床面から 10 ~ 15cm 浮いた状態で出土している。これらの石材間に約  $7 \times 5\text{cm}$  の埴輪片が 1 点、 - 391.4cm にさび付いた鉄器（刀子？）、土壙の両小口周辺の地山面にも埴輪小片の分布が認められた。埴輪出土レベルは - 375cm 前後であり、床面からの出土遺物は皆無である（高畠）

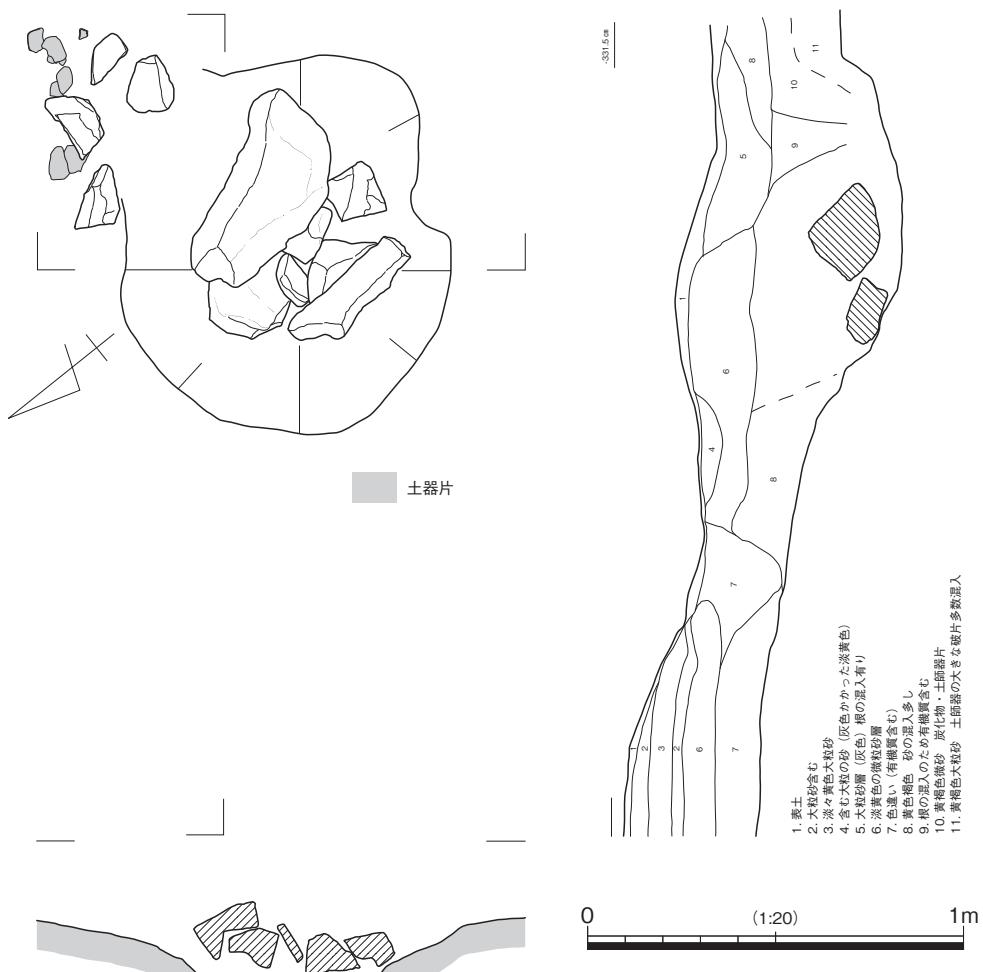


図38 配石土坑平・断面

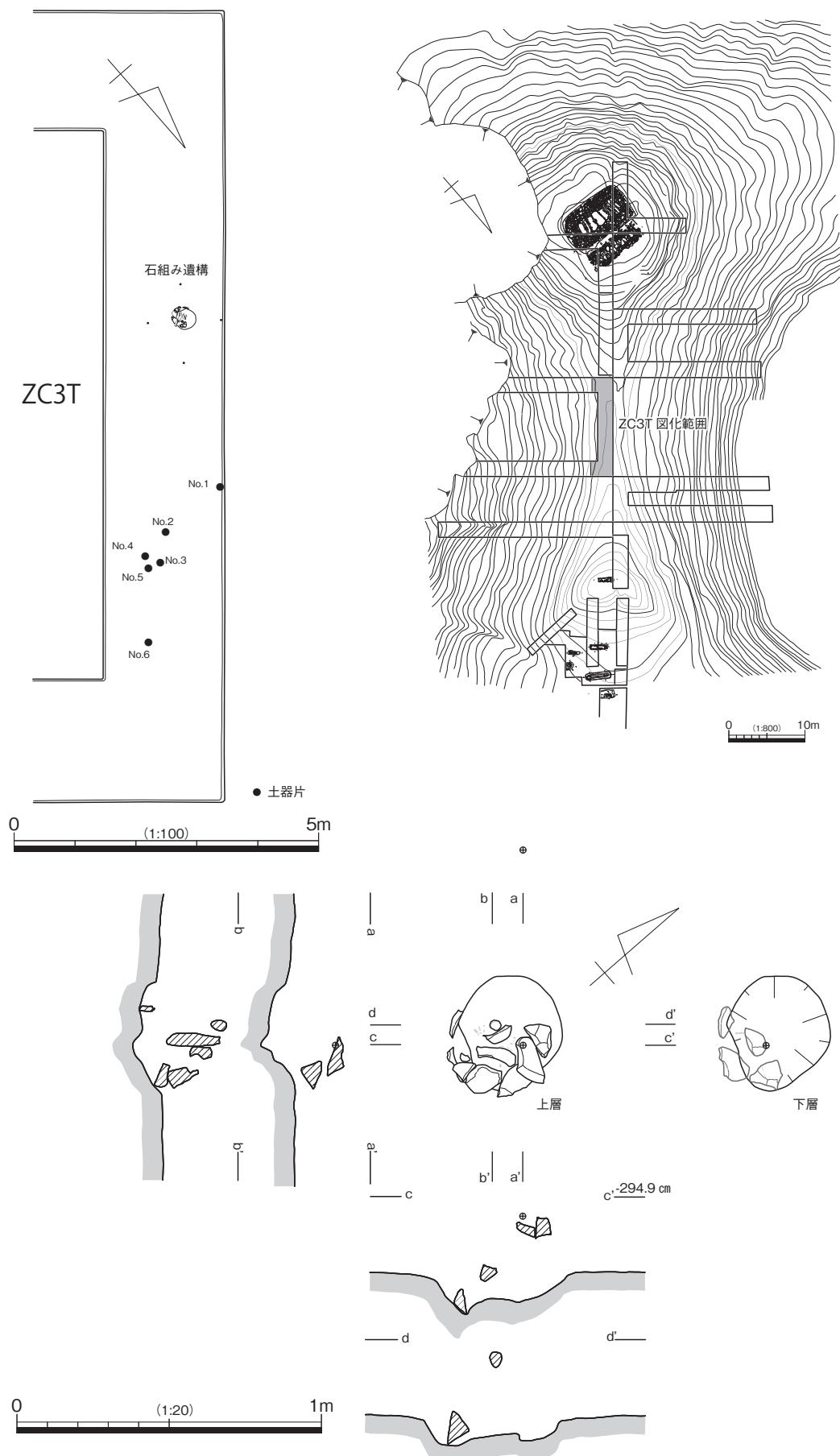


図 39 ZC3T 石組遺構平・断面

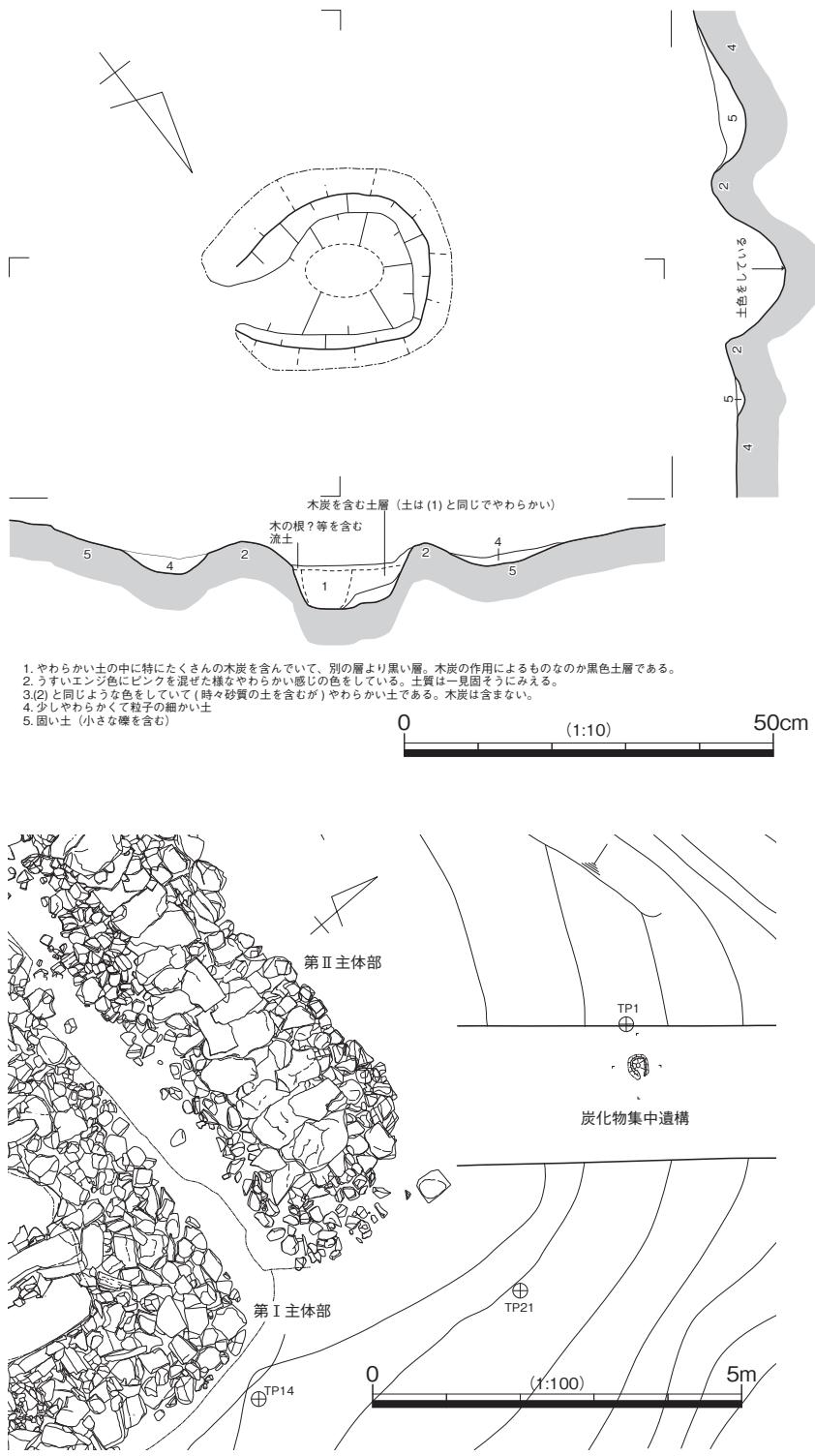


図40 KC1T 炭化物集中遺構平・断面

なり、淡く焼土化しており火をたいた痕跡をとどめている。土壙内は多くの炭小片を含んでおり黒色を呈する。土壙の周縁は浅い凹みが認められる。本土壙が古墳に伴う遺構か否かは明確にできなかったが、石組み遺構と同様に墳丘の尾根筋上に所在している。(高畠)

#### 4. その他の遺構の調査

第VII主体部の北東側の土壙

前端部の北東、前方部の墳端から330cm、第VII主体部の東側約100cmに位置する土壙である。東南に下降する緩斜面にあり平面プランはほぼ円形で86～100cm、深さ約20cmを測り、長軸方位はN51°Wである。

センター-350cm、表土下30cm付近から石材が現れ、土壙内は平面規模14～53cmの安山岩角礫7石がそれぞれ重なり合って出土している。一石を除き他の石材は底面から数cm浮いた状態であり、石材周辺の埋土は花崗岩の砂粒を主にした黄褐色土である。

第8層中から埴輪小片1点、第11層では土器破片が比較的多く出土している。(高畠)

#### 炭化物集中遺構

後円部の北東約300cm、KC1T内に位置する小土壙である。センター75～100cm間、表土下数cmで検出した。平面形は北東に開口する馬蹄形を呈し、直径約20cmの不正円形で深さ18cmを測り、断面形は椀形である。土手に当たる断面2の部分が土壙上端と

### 石組み遺構

ZC3T 内にあり、後円部頂と前方部頂の中間、前述の火処とともに墳丘の主軸線上に位置する石組み遺構である。センター - 275cm、表土下 20cm 付近で小石材や土器片が散布し、それらは - 317.6 ~ - 333.4cm 間に多く認められた。石組み遺構は  $37 \times 32\text{cm}$  の不正円形で深さは一定でなく 4 ~ 12cm を測り、火を受けた痕跡は見られない。土壙内には上位に 10 点、下層に 4 点の安山岩が見られ、上位の安山岩に混じり  $2 \times 3\text{cm}$  の木炭や卵大の川原石一点を含む。石材の中には垂直に立つ石もあり、土壙の深さは 30cm 位が想定できる。

ZC 3 T 内からは埴輪片 1 点、灰白色土層からは土器片約 20 点が出土している。(高畠)

## 第2節 遺物

### 1. 第I主体部出土遺物

銅鏡 1は画文帶同向式神獸鏡である。棺外となる石槨北壁側の中央部壁体際ににおいて完形で副葬されていたものが、構築後の側壁石材が緩み内側に迫り出すことによって破損したものである。破損に伴う歪みが生じており直径 17.1cm 重量 626.43g。白銅質で鋳上がりは良好である。朱の付着がみられ、外区を中心に鑄の進行が確認されるが、鏡縁の厚さは 0.5cm を測り、菱雲文と画文帶が認められる。半円方格帯には、細線で 4 分割される小区画内に「天王日月」銘のある 12 個の方格、渦文をもつ半円帯が 12 個認められ、その間を小さな珠文を充填している。方格帯、半円帯ともにやや精緻さに欠ける。内区主文様は同向式であり、上下に伯牙と黃帝、



1

図 41 画文帶神獸鏡三次元計測画像 (1:1)



図 42 画文帶神獸鏡三次元計測画像及び断面 (1:1)

左右に東王父と西王母とみられる神仙像を配置する。伯牙と黃帝には侍仙人、東王父と西王母には禽が伴う。伯牙の両側には逆向き獸形、黃帝の両側には向かい合う獸形が確認できる。神仙像、獸形ともに精緻さに欠けている。主文部の厚さは0.3cm。鉢は直径2.6cm、断面が半円形を呈し、鉢孔は方形で上下2か所に認められる。鉢の周囲には有節弧が廻る。

**石製品** 2. 3は碧玉製の鍬形石である。両者は、第Ⅰ主体部の棺内のはば中央で石槨主軸に直交する方向で並列して置かれた状態で検出された。また、この鍬形石2点の東西両側で別遺体の頭蓋骨がそれぞれ出土しており、鍬形石は東西2体の被葬者頭部の上方に副葬されていたことになろう。両者とも朱とみられる赤色顔料が付着している。

2は右上がりの笠状部から断面台形の環体が取り付き、突起を経て板状部へ至る。内孔は橢円形を呈するが、環体と同様左側がやや直線的となる。笠状部には反りによって表出される2条の帶が確認できるが、帶に沿って細線が加えられる。この帶と細線は、裏面の笠状部及び左右の突起の両面においても確認できる。肩は上縁がやや湾曲するがほぼ直角を呈する。板状部は左側が直線的、同右側は明確な弧状を呈する。また、板状部左側の側面には若干の反りが認められ、縦断面は内孔のやや下部から下縁まで表面側に反り返る。

3は若干左側に傾く右上がりの笠状部をもち、笠状部の2条の帶には細線は伴わない。また、上面より内孔に向かって水管溝が穿たれる。環帶及び内孔の平面形はやや弧状を呈する。突起右側が明瞭に観察されるのに對して、左側は細線のみで表現される点も特徴的である。右側突起の帶表現と細線、左側環体の細線は、裏面には認められない。肩から板状部左側面への移行は、直角よりやや開き台形様となる。板状部右側面は弧状を呈するが、2と比較して下端が突起と板状部境の上端より外側で収束するため、弧状を呈しながらも左側面と同様に台形に近くなる。板状部の縦断面は、内孔の下から板状部下面にかけて表面側への反りが認められるが、2と比較して弱いものとなっている。

**鉄器 大刀** 4は大刀であり、出土状況図や写真より、第Ⅰ主体部の東側の棺内に副葬されていたと考えられ、南側の近接した位置で人骨(東群)が検出されている。人骨の残存部位は明らかではないが、棺中央の頭蓋骨との位置関係から、遺体左側の胸部から膝上程の位置に鋒を頭部へ向けて副葬されていた可能性が高い。第Ⅰ主体部・第Ⅱ主体部ともに唯一の大刀である。現状では保存処理過程における修復に伴い完存しているように見えるが、鋒と茎尻が欠損し、身の中央の刃部と背部側が大きく欠損することにより、不安定な接点をもつ箇所がある。身の接点がほぼ正しく、茎尻が大きく欠損していないとすれば、長さ約90cmの直刀となる。身は関付近で厚さ1.3cm、鋒付近では0.9cmを測る重厚なものである。身の一部に木質の付着が確認されるが、全体には広がらない。刀関は明瞭なナデ関であり、茎は尻に向かってやや幅を減じながらほぼ直線的に伸びる。茎尻付近に目釘孔が2個穿たれており、両者とも目釘が残存している。茎部に木質は遺存していないが、目釘孔・釘から推定して、装具を備えた状態で副葬されていたと考えられる。

**ヤリ** ヤリ(5)は、出土状況図の記載状況や茎尻付近の把木木質の上面の緑鏽とみられる付着物から、石槨北側中央壁体際の画文帶神獸鏡に接する棺外に鋒を西へ向けて副葬されていたと考えられる。全長が31.6cmを測る完存品であり、木質が関を越えて身へ延びることからヤリと考えられよう。身は関から鋒に至るまではほぼ均一な厚みがあり、鏽は確認できない。茎は壁体石材の迫り出しによる二次的な変形を受けているが、短茎で中央からやや茎尻寄りに目釘孔が1孔認められる。直角関を越えて身へ及ぶ柄縁は直線的に途切れている。柄縁付近と柄尻付近の木質に、茎側縁に合致する縦方向のラインや木質が途切れる箇所が観察されるため、背・腹両側から別装具が用いられた可能性があるが、明確にできない。

ヤリ(6)は、取り上げ図に記録された破片数等の出土状況から、第Ⅰ主体部南側壁際中央の棺外に他の短剣

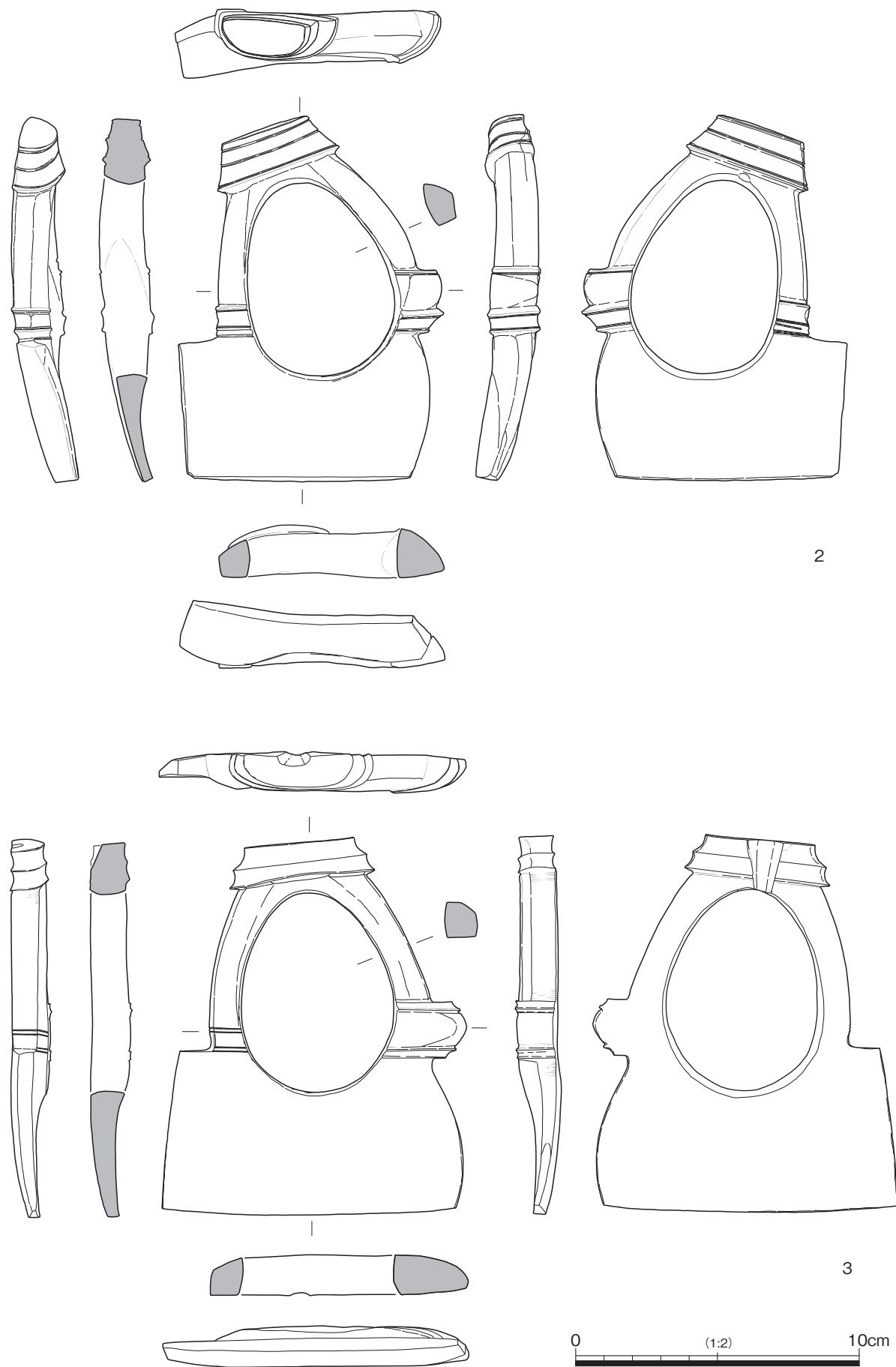


図43 鋸形石

とともに副葬されていた可能性が極めて高い資料である。鋒が欠落しているが、5と同様に全長が30cmをやや超える資料となるとみられる。身の厚さはほぼ均一であり、鎬は確認できない。また、身の一部に布目と見られる痕跡が確認できる。直角関を経て茎へ移行するが、厚みは身に比べてやや薄くなる。茎尻は一文字であり、茎尻から関を越えて身へ及ぶ柄木と考えられる木質が確認できる。柄縁は直線的に仕上げられており、5と同様に柄縁から関にかけて茎側縁に合致する形で縦方向に木質が変化する箇所がみられる。これを合わせ目とすれば、複数部材からなる柄の構造を想定することができる。

**剣** 7の鉄剣は、取り上げ番号は不明ものの、出土状況図に記録された法量や写真、破片数から石槨中央や東よりの棺外となる北側壁体際に、鋒を東へ向けて副葬されていたと考えられる。茎尻付近を欠損するが、現状で刃部長31.8m、茎長10.6cmを測る。茎部の関寄りにある目釘穴以外に茎尻付近にもう一つの目釘孔を想定したとしても、全長は50cmを超えないと考えられる。現存する刃部長が長剣と短剣の区別する目安である37cm(池淵2003)未満であるが、後述する短剣とのセット関係を考慮すると、長剣としての性格を帯びると考えられる。身は断面菱形を基本とするが、鋒に移行するに従い鎬が不明瞭となる。茎は細く直線的に延びるが、関付近でやや幅が広くなる。関を境にして茎の両面には把木の木質が遺存している。

8の2片は、それぞれ剣の鋒と身の小片である。接合点はみられないが、鎬の進行に伴う内部の空隙の状況、重量感などの素材の状態、調査時の取り上げ番号が連続して付されていることなどから、同一個体としたものである。小片であることから詳細な出土位置を推定することは困難であるが、棺外となる南側壁際に集中して副葬された一群である可能性が高い。また、鋒は比較的新しい破断面によって欠損しているが、断面はレンズ形を呈し、残存範囲において鎬は確認できない。身の小片は、断面は菱形で明瞭な鎬をもつ。残存量に対してかなりの重量感がある。他の全長20cm以内の短剣とは異なり、7のような一定程度の長さのある鉄剣となると考えられる。

**短剣** 9は鉄剣の身の破片とみられる。断面の厚さやレンズ状の形態からみて、10~15のような全長20cm以内の短剣となる可能性が高い。

10の短剣は、棺外となる南側壁際に副葬されていた可能性が高い資料である。取り上げ図と写真からみて、石槨西部の南側壁際に単独で置かれていた可能性が高いが確定には至らない。資料は2片に分かれるが、身中央で僅かな接点をもつとみられることや、調査時の取り上げ番号が近接することから、同一資料として提示する。全長17.5cm程の短剣として復元できる。身は断面レンズ形で0.4cm程の均一な厚みをもち、鋒は左右対称とならず片刃様を呈する。関は直角関であり、茎は尻から関へ向かってやや開く。茎尻はやや曲線的となっており、茎中央に比べて厚さがやや薄くなるとともに、目釘孔が穿たれている。茎のほぼ全体に木質が遺存しているにも係わらず、X線写真において目釘が確認されないことから、木製目釘が使用された可能性も考えられる。把縁は関の部分で直線的に仕上げられており、一部には把木の表面が遺存している。

11の短剣は、棺外となる南側壁際より出土していると考えられるが、その詳細な位置は不明とせざるをえない。鋒と身の刃部の一部を欠損するが、全長が20cm以内の短剣とみられる。身から茎尻まで厚みは3mm程と均一であり、直角関にやや幅が広い短茎をもつ。茎尻は一文字であり、目釘孔は認められない。木質が一部に残存するが、把木の構造を想定できるようなものではない。

12の短剣は、茎尻が欠損し残存長で15.3cmを測る。鋒付近がやや薄くなるが、断面は杏仁形を呈し、身から茎まで均質な厚さをもつ。鋒は、片刃様を呈し、左右対称に作り出されていない。関は弛緩した角関で、茎には把木と考えられる木質が遺存している。

13の短剣は、棺外となる南側壁際から出土したと考えられる資料であるが、正確な位置が絞り込めない。

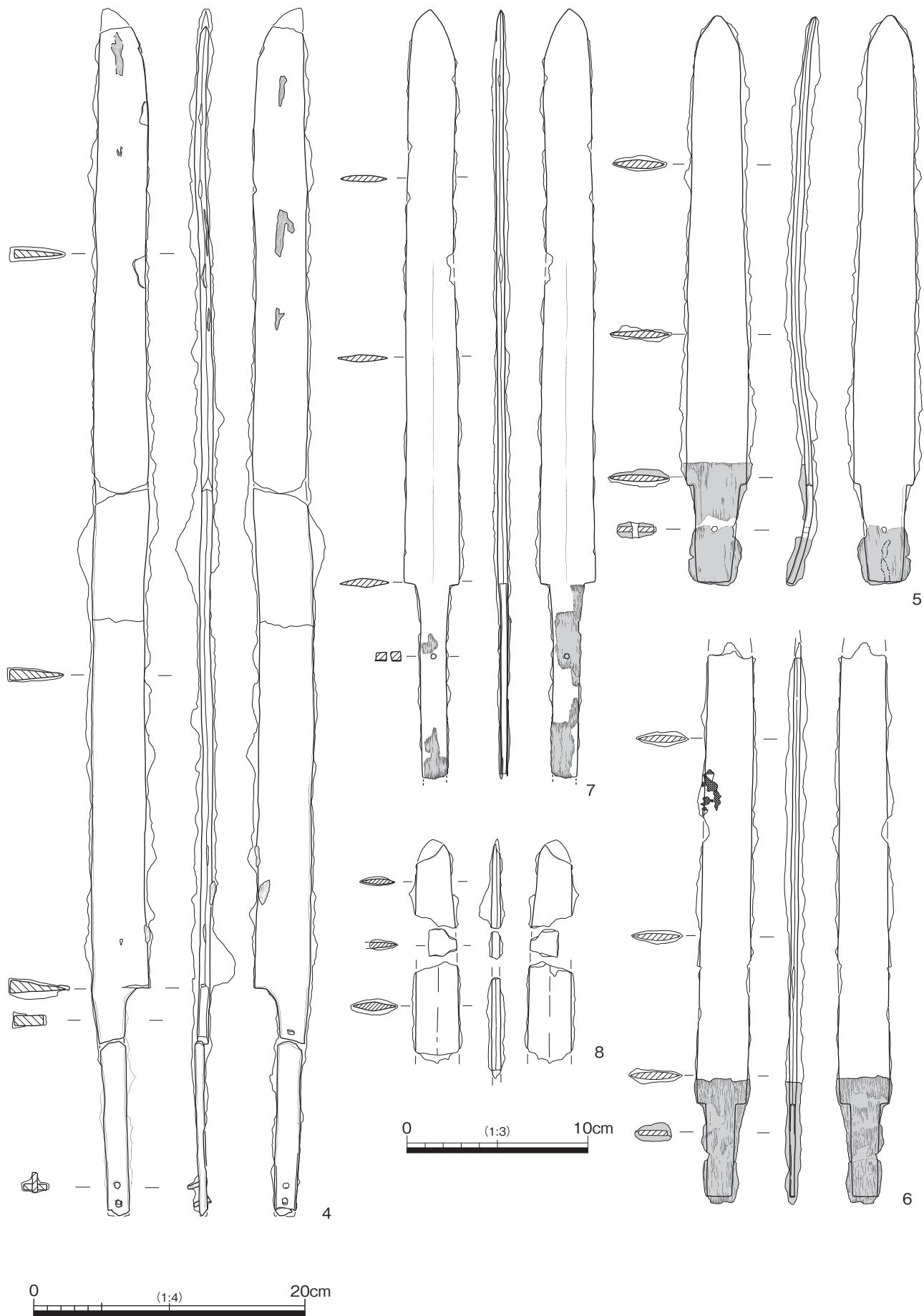


図 44 鉄製品その1

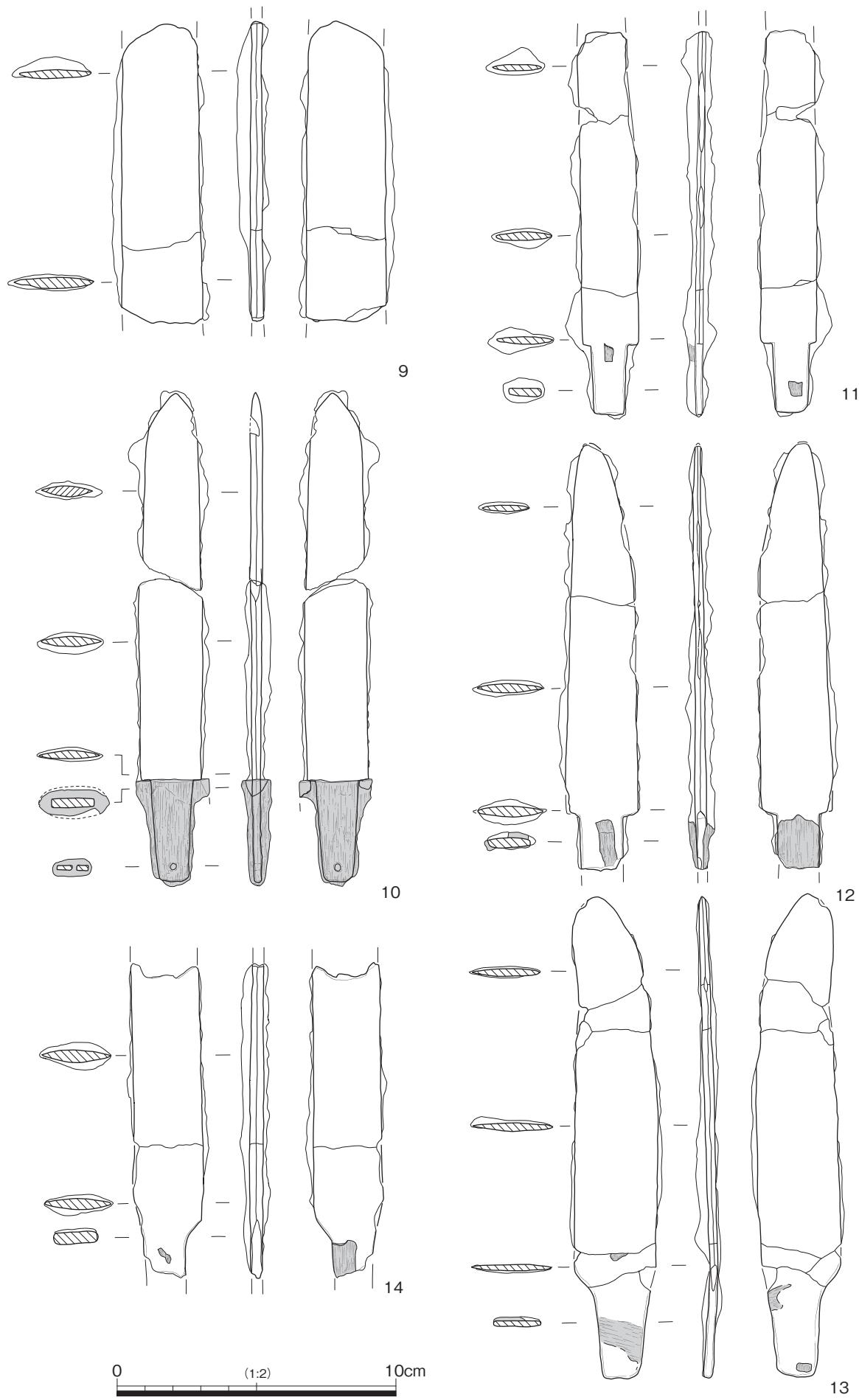


図45 鉄製品その2

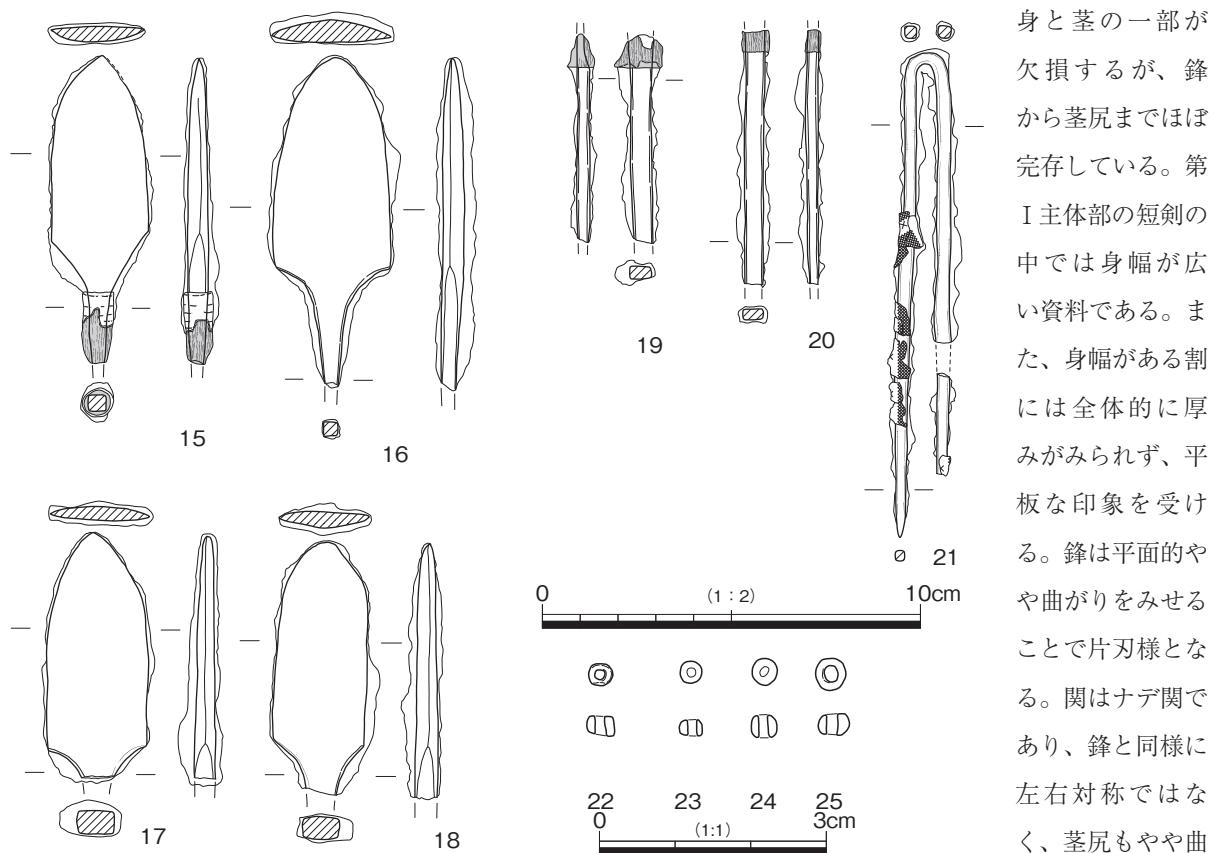


図46 鉄製品その3及び玉

身と茎の一部が欠損するが、鋒から茎尻までほぼ完存している。第I主体部の短剣の中では身幅が広い資料である。また、身幅がある割には全体的に厚みがみられず、平板な印象を受ける。鋒は平面的やや曲がりをみせることで片刃様となる。関はナデ関であり、鋒と同様に左右対称ではなく、茎尻もやや曲線状となり、茎に木質が遺存する。

14の短剣は、棺外となる南側壁際に副葬されていたと考えられる資料であるが、壁体際での正確な出土位置の特定ができない。鋒から身、茎の大半を欠損しているが、身は厚みのある杏仁形の断面形をもつ。関は13と同様に左右非対称のナデ関であるが、身幅や厚みが異なっており、やや重厚な印象を受ける。茎には把木とみられる木質が辛うじて残存しているが、構造を復元できるようなものではない。

**鉄鎌・鑿状鉄器** 15～18は柳葉式の有茎鎌である。いずれも棺外の南側壁際に鉄剣等とともに副葬されていたと考えられる。鎌身にナデ関をもつことで共通するが、関の位置・形状に若干の違いがみられる。15は、茎に柄の木質、その上面に樹皮巻きの痕跡を留める。鎌による膨張のせいか、鎌身の片側に膨らみをみせる資料が多い。

19.20は鑿状鉄器と呼称するが、刃部を欠損するため、具体的な機能はわからない。19.20とも柄木とみられる木質が確認できる。

**錐状鉄器** 21は錐状鉄器として報告する。断面隅丸方形の断面をもつ長さ36cmほどの棒状素材を中央で大きく折り曲げる。片側は欠損するが一方に尖部をもち、また、明瞭に布目を確認することができる。具体的な機能は明らかではない。

**玉** 調査概報等の既報告資料では、石櫛中央の鍬形石の南側において勾玉1点、管玉1点(図版21-55)、ガラス小玉が数点集中して出土したとされるが、現存するのは今回報告するガラス小玉4点のみである。また、出土状況写真を見る限り、管玉は粘土床と石櫛基底の礫群との境より出土したと考えられる。22～25はガラス小玉である。22は石櫛中央の鍬形石傍から出土。23.24は、報告書作成段階で東西いずれかの人骨に付着していた棺床粘土から確認した資料である。25は、第1主体調査中に生じた排土から出土している。

小玉(22)はにぶい青緑色を呈する小玉であり、孔内に赤色顔料が付着している。表面に気泡が目立つ。

小玉(23)はうすい青緑色を呈し、内部に僅かな気泡と線状痕が確認できる。小玉(24)はあざやかな青色を呈し、内部には明瞭な気泡がみられる。

小玉(25)はあざやかな青色で、内部に気泡が確認できる。法量はやや大きいが、小玉(24)と色調や気泡の状態が類似している。

**土師器** 26は石槨中央からやや東寄りの棺外となる南側壁際に副葬された土師器無頸壺である。口縁端部を僅かに欠損しているがほぼ完形品である。茶褐色系統の色調を示し、内外面における明瞭な朱の付着にと、胴部下半に穿孔が確認できる。穿孔は焼成後の打ち欠きによるものであるが、器壁が薄いことから、内・外面のいずれから行われたかどうかは判断できない。外面の主な調整は、底部付近を中心としたケズリの後に横ハケと上半部に縦ハケ、下半部を分割ミガキで仕上げている。外面ケズリが行われる下半部は、上半部と比べて明瞭に厚みがことなり、胴部中位にはバリ状の段差を留めている。内面は、口縁部の横ハケ以外は、ナデが主体となる。

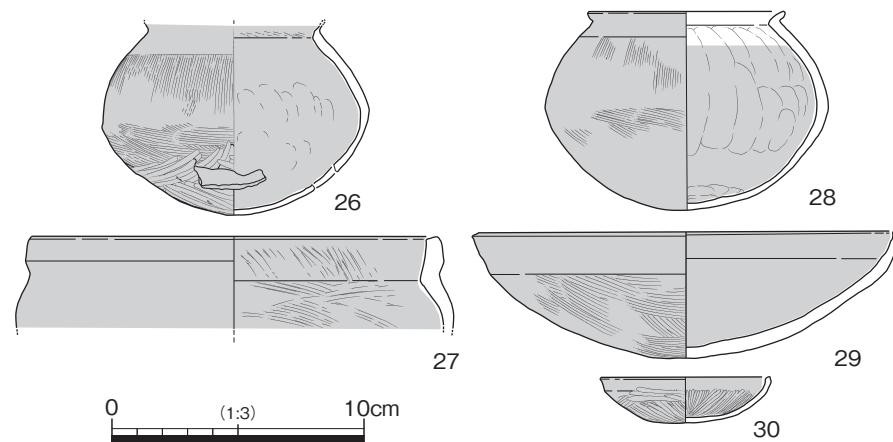


図47 土師器

27は、石槨東小口壁の前面の棺外に副葬された鉢である。調査担当者の所見や調査時に作成されたニュースレターには手焙形土器との記載がみられるが、現存する資料でこれを裏付ける接合状態や、天井部と考えられる破片は存在していない。灰色系統の色調を示し、部分的ではあるが内・外面及び破断面に朱が付着している。出土後に散逸した破片もあると考えられるが、復元率や破断面における朱の付着を考慮すれば、副葬段階で破碎された可能性が高い。

28～30は、墓壙内北西隅の被覆粘土下位の石槨裏込の塊石中でまとまって出土した資料群である。無頸壺(28)は、茶褐色系統の色調をもち、内外面に朱の付着が確認される。小破片となりながらも完形に復元でき、無頸壺(26)と同型式であるが、胴部下半に穿孔は行われていない。器表面に付着する土砂によって胴部下半における調整の観察が困難であるが、26と同様の調整手法を探るとみてよい。

鉢(29)は、茶褐色系統の色調を示し、内外面の数か所に朱が遺存している。本来的には前面に施朱されていたものと考えてよいだろう。外面はハケによってシボリ痕を完全に消去し、口縁端部はやや強いヨコナデによって面取りを行う。本地域の弥生時代後期から継続する伝統的な形式であり、本墳の築造時期を推定する重要な資料となる。小型鉢(30)は、茶褐色系統の色調をもち、内外面に朱が明瞭に遺存している。内外面をミガキ締めるが、外面のミガキ下には丸底成形に伴うケズリが確認できる。本資料も弥生時代からの伝統的な形式であるが、鉢(29)と同様に、集落出土のそれに比べて、精緻な印象をうける。

#### 第I主体部の副葬品の配置状況の復元

ここでは、現存する図面・写真記録、遺物の状態から、第I主体部石槨内における遺骸を含めた副葬品配置

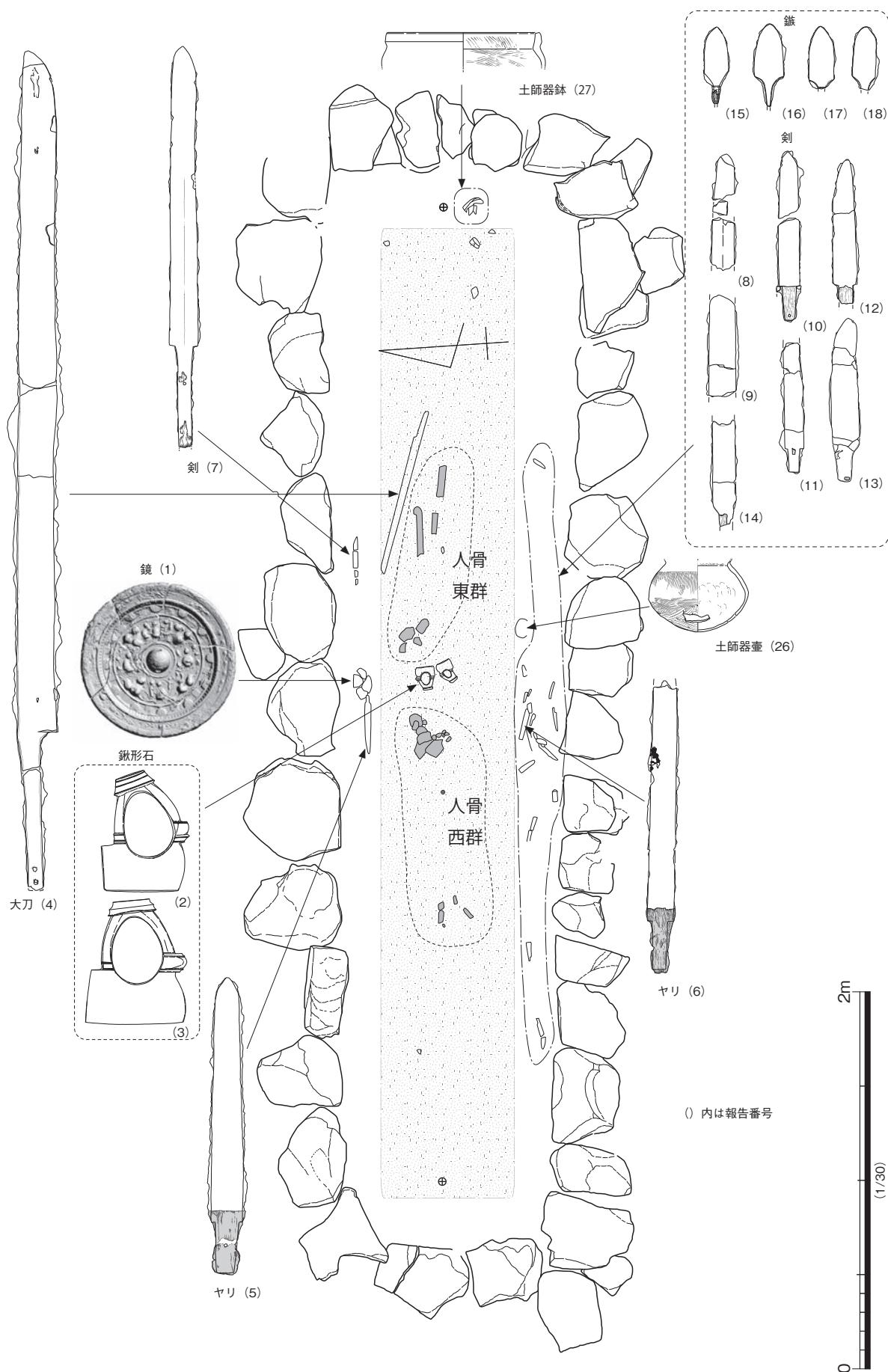


図 48 第I主体部副葬品配置復元

を復元しておきたい。

断面図に記載された棺底を反映すると考えられる粘土床の上面の状況から推定して、据付位置は東西両小口側では石槨壁体基底石より約40～50cm内側、側壁では西半部で約30cm、東半部で約30～40cm内側に想定できる。棺底のラインは明確ではないものの若干の窪みをみせることから、舟形木棺を推定することが妥当と考えられ、その規模については、全長約5m、幅約0.7mの法量をもつものと推定できる。

木棺内には、中央2点の鍬形石を境にして東西で2体の人骨が出土している。人骨の取り上げ番号は不明ながら図化された出土状況から推測して、頭を棺中央の鍬形石に、足先を両小口に向けた方向で安置したと考えられる。2点の鍬形石の南側には、調査概報や日誌等の記録から、15点程度のガラス小玉(22～25)、所在不明となっている勾玉・管玉が置かれた可能性が高い。東側の遺体の下半身左側には、鋒を頭部側(西側)に向けた大刀(4)が副葬されている。他にも小片として出土状態が記録された資料がみられるが、以上が確実に棺内副葬と考えられる遺物である。

次に棺外副葬遺物では、北側壁際と南側壁際、東小口壁際の大きく三つに分かれる。北側壁際では、中央に画文帶神獸鏡(1)とそれに接してヤリ(5)が鋒を西へ向けて置かれていることは確実である。そして、図化された法量や柄の破片化した状態から判断して、中央の画文帶神獸鏡から東へやや離れた位置には鉄剣(7)が鋒を東へ向けた状態で副葬されていた可能性が高い。南側壁際では、中央に鉄器の集中する箇所があり、その東西両側に土師器、鉄器が散在するように記録されている。調査概報及び日誌等の記録からみて、出土位置が確定的な資料は、土師器無頸壺(26)のみである。土師器無頸壺内部には朱とみられる赤色顔料が遺存しており、施朱等の儀礼に使用した器を棺外に副葬したと考えられる。他の遺物は鉄器と考えられるが、確実に出土位置を推定することは困難であるが、図化された形態等からみて、多くは短剣(9～13)、鉄鎌(15～18)であったと考えられる。しかし、これら鉄器の中でも、図化された法量から判断してヤリ(6)は中央に集中して出土した鉄器群に含まれると判断できる。また、鑿状(19.20)・錐状(21)なども棺外の南側壁際から出土している可能性が高いが明確にはできない。

東小口壁付近には鉢(27)が破片化した状態で出土されている。一部の破片が木棺小口部推定ライン上の出土となるが、大部分の破片が小口壁寄りで出土していることから棺外出土遺物とみてよいだろう。破断面に赤色顔料が付着していることから破碎副葬の可能性がある。

## 2. 第Ⅱ主体部出土遺物

### 鉄製品

**剣** 剣(33)は石槨中央より東側の棺内より、鋒を西へ向けた状態出土している。残存長は30.8cmを測り、茎尻を欠損する。身は全体が鞘木とみられる木質に覆われる。関付近には鞘木表面が遺存する箇所があり、これから判断すると、杏仁形の断面形を想定できる。身側縁には合わせ目とみられる痕跡があり、鞘は2枚の部材から構成されていた可能性が高い。身断面は直接観察することができないため正確さを欠くが、鞘と同様に杏仁形を呈する断面をもち、鋒に移行するに従ってやや薄くなると考えられる。関は直角関であり、逆ハの字形を採りながら茎尻へ移行する。茎は比較的に幅のある平面形をもっており、短茎式となる可能性が高い。茎の全体には把木を構成する木質が遺存するが、背・腹両面とも合わせ目とみられる痕跡は確認できない。把縁と鞘口が関のラインで明瞭に区分されることから、合口式と考えられよう。

**大型鉄鎌様鉄器** 31・32は大型鉄鎌様鉄器である。石槨東側の棺外となる北壁体石材に接する位置に、身を横倒しにし、鋒を西へ向け、立て並べた状態で出土している。ふくらの張った三角形の身をもち、茎から連続する脊が身中央部までのびる。この脊はX線写真においても明瞭に観察することができるため、身に対して茎と

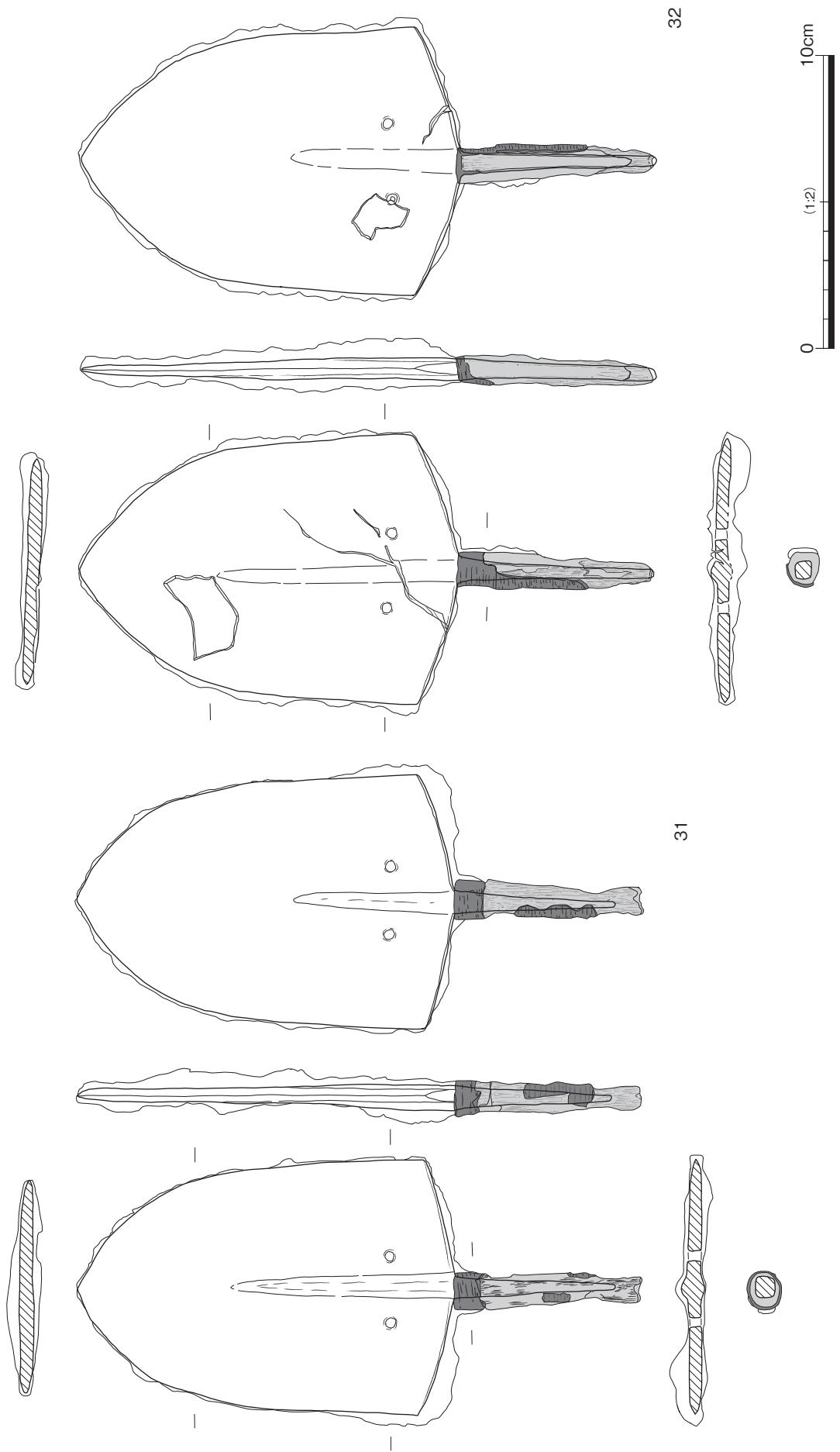


図 49 大型鐵鎌樣鐵製品

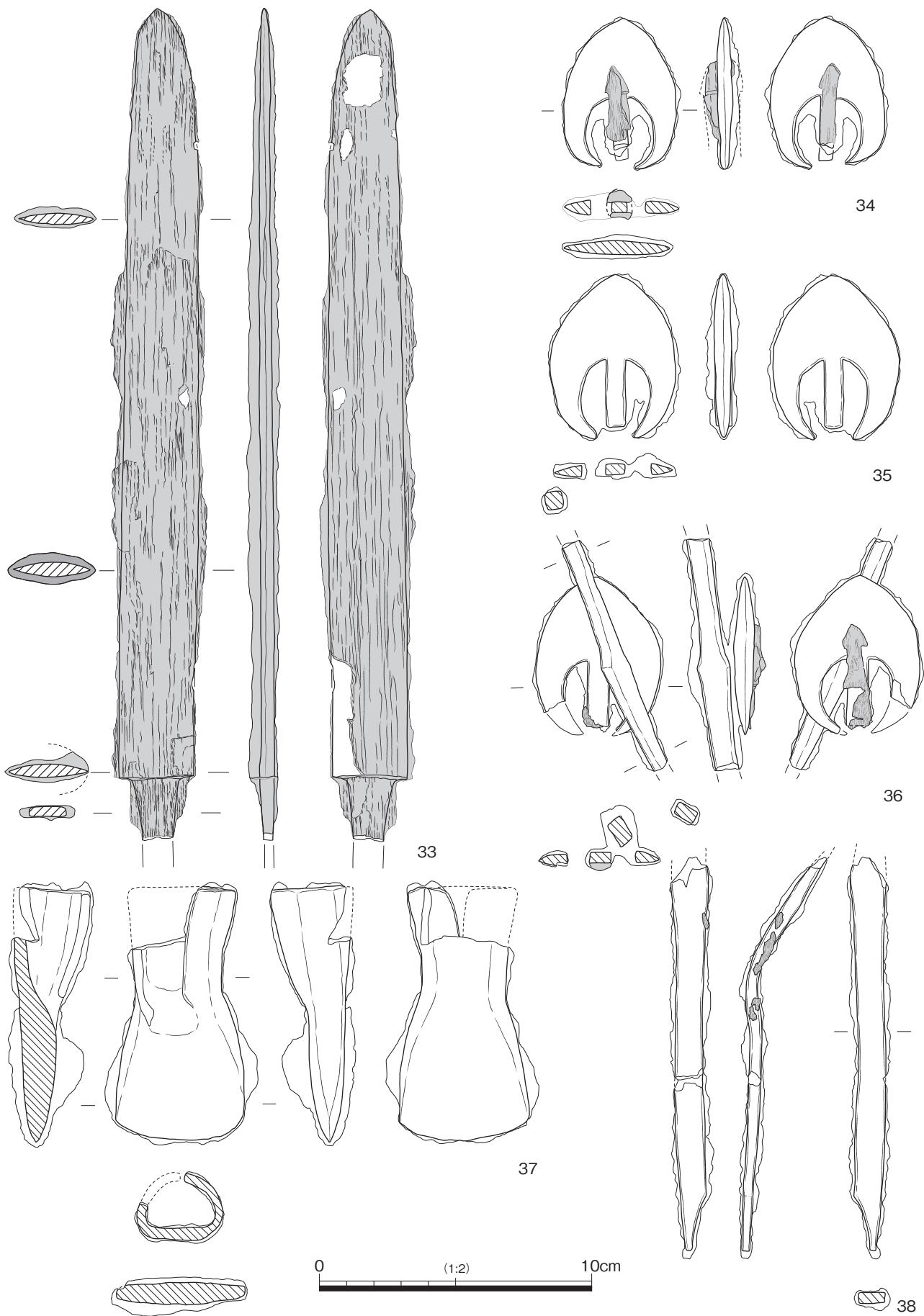


図50 鉄剣・鉄鎌・鉄斧・ヤリガンナ

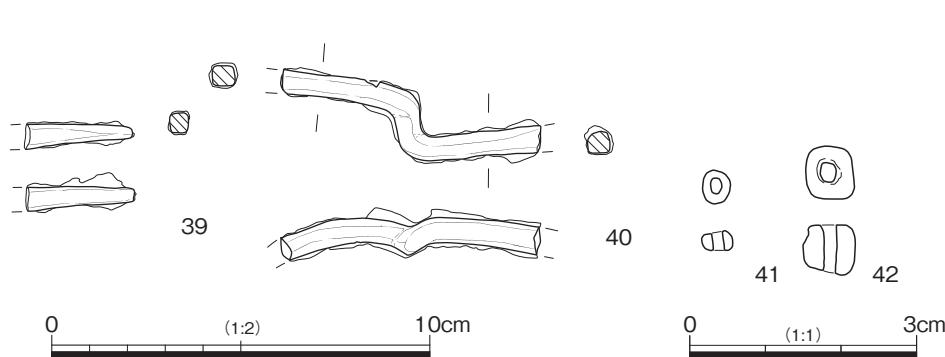


図 51 不明鉄製品・玉

なる棒状の別素材を鍛接して製作された可能性が極めて高い。鋒から関に至るまで刃部状のエッジが作出されているが、明瞭なものではない。また、X線写真で脊の両側に2孔1対の穿

孔が認められるが、鋸の進行が著しく、明瞭なものではない。この点は、今後の保存処理作業に委ねられる点が大きいだろう。茎は断面方形を呈し大型の身に対して細身である印象を受ける。鍛接による成形方法が強度を補うのであろう。茎には柄木とみられる木質と、その上面に樹皮巻きの痕跡が確認できる。法量や穿孔などから鎌としての実用の機能を疑わせるものであり、大型鉄鎌様鉄器と呼称しておきたい。

**鉄鎌** 34～36は短頸鎌である。石槨東側の棺外となる北側壁際から出土しているが、詳細な位置を把握することはできない。いずれも鋒から逆刺までの鎌身刃部が円弧を描き、関に至るまでの逆刺についても弧状となる。茎は逆刺を越えず、直線的に短くのびる。34.35には根挟みとみられる木質が遺存し、矢柄の先端が矢印形となる。それぞれ法量はやや異なるが同工品と考えてよいだろう。また、36の片面の身には、別資料が付着している。ヤリガンナ、あるいは鑿の可能性があるが、断定できない。

**鉄斧** 37は袋状鉄斧である。出土状況写真（図版 28-70）からみて、石槨内東半部の棺外となる北側壁際で、ヤリガンナ（38）、不明鉄器（40）とともに副葬されていたと考えられる。

袋部の片側を欠損するが概ね全形は把握できる。平面形態は、袋部から逆ハの字状に肩部へ向かって絞り込み、身は台形様に開く。袋部に比べて刃部は重厚なつくりとなっているが、その移行はスムーズに行われていることから、袋部と身部は一連の鍛打・折り曲げによって作出されていると考えられる。

**ヤリガンナ** 38は出土状況写真から、石槨内東半部の棺外となる北側壁際で、袋状鉄斧（37）と不明鉄器（40）とともに副葬されていたと考えられる。

身の途中で大きく折れ曲がり、柄の基部片側は大きく抉れる。木質が折れ曲がりをみせる身部まで及ぶことから、直ちにこの木質を柄木とすることはできない。残存する範囲内において刃部や裏すきが確認できないことから、頭部及び鋒は更に離れた位置にあると想定できる。

**不明鉄器** 39は棒状を呈する。鉄鎌茎の残欠の可能性があるが、尖りをみせて薄くなる端部に違和感があるため、不明鉄器として報告する。40は出土状況写真から、石槨内東半部の棺外となる北側壁際で、袋状鉄斧（37）とヤリガンナ（38）とともに副葬されていたと考えられる。方形の断面をもち、やや捩れをみせながら屈曲する。何らかの製品の残欠と考えられるが、現状から特定はできない。

**玉** ガラス小玉（41）（42）は、調査時の所見から石槨内東半部の棺外となる北側壁際で出土したとされる。小玉（41）は縁みのある灰青色を呈し、やや丸みをもつ。細かな気泡が観察される。小玉（42）はさえた青紫色を呈し、平面・側面ともに隅丸方形に近い形態をもつ。表面及び内部には明瞭な気泡が観察される。法量・形態・色調の全てが第I主体部を含めた本墳出土の小玉の中で差異が際立っている玉である。

## 第II主体部部の副葬品の配置状況の復元

ここでは、調査時の所見及び調査概報等記載、写真記録を用いて、第II主体部内の副葬品配置をまとめておきたい。第II主体部では棺底を反映すると考えられる粘土床の窪みが明確に検出されており、木棺の規模や据付位置は明確にすることができる。なお、人骨が出土していないため、遺骸埋葬箇所は不明である。

確実な棺内副葬品は短剣(33)のみである。短剣(33)は、棺内東半部の南側よりに鋒を西へ向け鞘入の状態で副葬されている。一方、棺外における副葬品は、石槨東半部の北側壁際に集中して出土している。大型鉄鎌様鉄器(31.32)は、写真(図版28-68)から判断して壁体際に鋒を西へ向け横倒した状態で副葬されている。そこからやや東側小口へ移動した位置に、袋状鉄斧(37)・ヤリガンナ(38)・不明鉄器(40)がまとめて副葬されている状況は写真記録から判断できる。

また、調査時の所見から、袋状鉄斧等(37)(38)(40)の周辺で、短頸鎌(34～36)、ガラス小玉(41.42)が出土しているが、正確な位置は復元できない。

## 3. その他の埋葬施設の出土遺物

## 第IV主体部部出土遺物

43は弥生土器広口壺である。口縁内面に波状文、外面に凹線文帯をもつ。形態や文様からみて、弥生中期末葉の所産と考えられる。44は弥生土器甕の頸部から胴部片で、胎土中に雲母・角閃石を多く含む。頸部や肩部の形態から、弥生後期中葉に比定される。これらは弥生中期末葉～後期中葉の資料であり、本埋葬施設が粘土床を形成する木棺墓であることを考えると、これらの資料は、構築に伴う混入品と考えられる。

## 第V主体部出土遺物

45～48は第V主体部の周辺で出土した弥生土器である。45は短頸広口壺口縁、46は長頸壺の頸部片、47は壺底部片である。48は胴部外面、口縁上端部に凹線文帯をもつ。いずれも小片であり、本埋葬施設に伴う資料

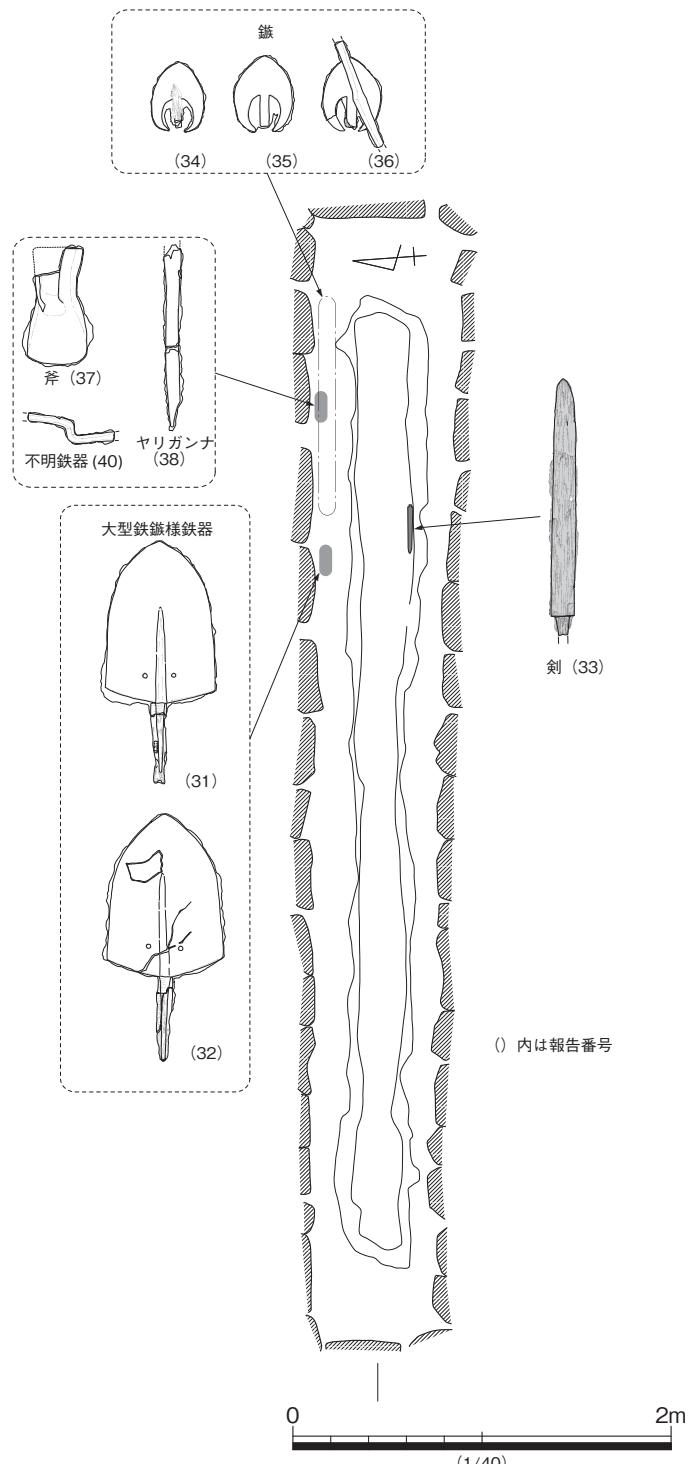


図52 第II主体部副葬品配置復元

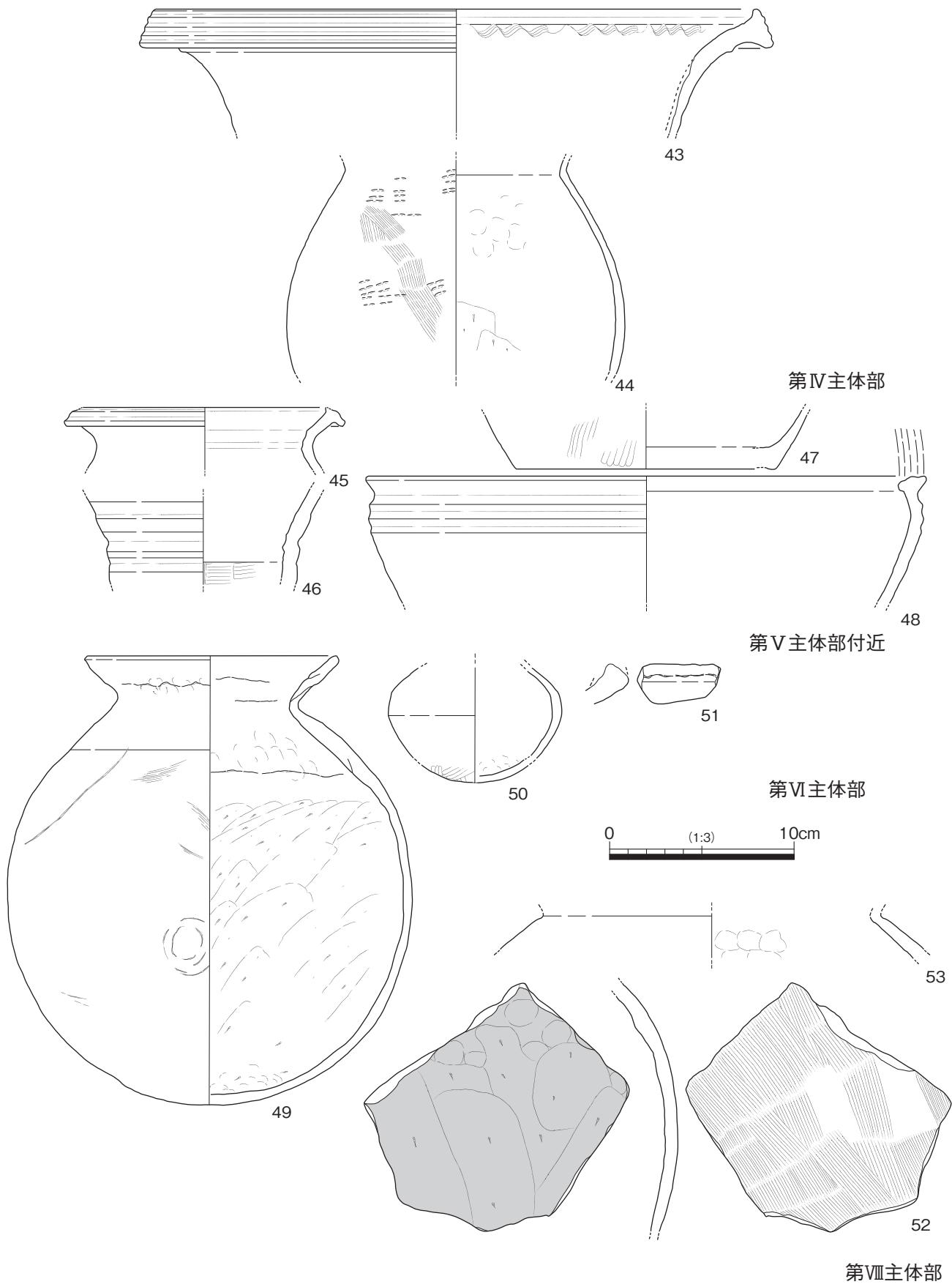


図 53 第IV・V・VI・VIII主体部出土埴輪・土師器・弥生土器

と考えることは困難である。

#### 第VI主体部出土遺物

49は箱形石棺である第VI主体部の墓壙内西側に正位で据え付けられていた資料である。口縁の一部を欠損するものの、完形品と考えてよく、出土状況から本埋葬施設に伴う資料とすることができる。厚手ながら形態からみて、布留系甕と考えられる。口縁部のヨコナデは緩く接合痕が残され、内面の胴部下半を中心にケズリが施されるが、上半部まで及んでいない。胴部外面はハケ調整をナデ消しており、最終段階で渦文や意匠不明のヘラ描き文様が施されている。布留式甕の搬入品、もしくは忠実な模倣品ではないため、時期比定が困難であるが、弛緩した口縁や下膨れの胴部形態からみて、布留3式新相以降に下る資料と考えられる。土師器壺(50)の詳細な出土位置・層位は不明である。内外の摩滅が著しく、調整は判然としない。51は円筒埴輪口縁片である。二重口縁を形成する口縁部途中の擬口縁の箇所で剥離している。本埋葬施設構築後の石材抜き取りに伴って遺構内に流入した資料である可能性が高い。

#### 第VIII主体部出土遺物

52は弥生土器大型壺、あるいは大型鉢の胴部片で、墓壙上位の石材群に絡み合った状態で出土している。内面には指頭圧痕を切るケズリ調整、その上面に朱とみられる赤色顔料が認められる。53は弥生土器大型甕の頸部・肩部片である。出土状況や資料の遺存状況を考慮すると、本埋葬施設の構築時期を示す資料と考えるのは困難であり混入資料と考えたい。

### 4. 各トレンチの出土遺物

#### K L 3 T出土遺物

K L 3 Tは後円部の墳頂部西側に設定されたトレンチである。後円部の墳頂上では、本トレンチの他に3本のトレンチが設定されている。埴輪片は約70点程の出土をみているが、前方部と比較して少量であり、図化可能な資料は少ない。

**埴輪** 54は円筒埴輪の頸部から口縁部途中の小片である。外面はベンガラとみられる赤色顔料が塗布されており、口縁部途中の器形反転部分に擬口縁が観察される。55は円筒埴輪胴部片。外面に縦ハケと意匠不明のヘラ描きによる線刻、内面に横ケズリが観察される。小片であることから資料の上下については確定的ではない。56は円筒埴輪胴部片で、外面に横方向のヘラ描きの沈線が認められる。他の資料に認められる突帯貼り付けに伴う割付の沈線とは様子が異なっており、意匠は不明ながらヘラ描き文様となると考えられる。

#### Z C 3 T出土遺物

本トレンチは墳丘主軸に沿った前方部上面に設定されたトレンチである。

**埴輪** 57は円筒埴輪胴部片であり、先細りの突帯を下向きに施す。外面にはベンガラとみられる赤色顔料が確認される。

**弥生土器** 58は弥生土器台付鉢の脚部片。築造に伴い盛土内に混入した資料と考えられ、図化資料以外にも数十点の弥生土器片が出土している。

#### Z L 3 T出土遺物

本トレンチは前方部頂から北側面に対して設定されており、墳端想定位置の外側で埴輪片がまとまって出土している。

**埴輪** 59は円筒埴輪の頸部から口縁部片である。口縁端部が残存する希少な資料であり、反転部の擬口縁が明瞭に観察される。61～64は円筒埴輪胴部片。61は破片上端の形状に丸みがあることから、胴部でも最上段の

4 各トレンチの出土遺物

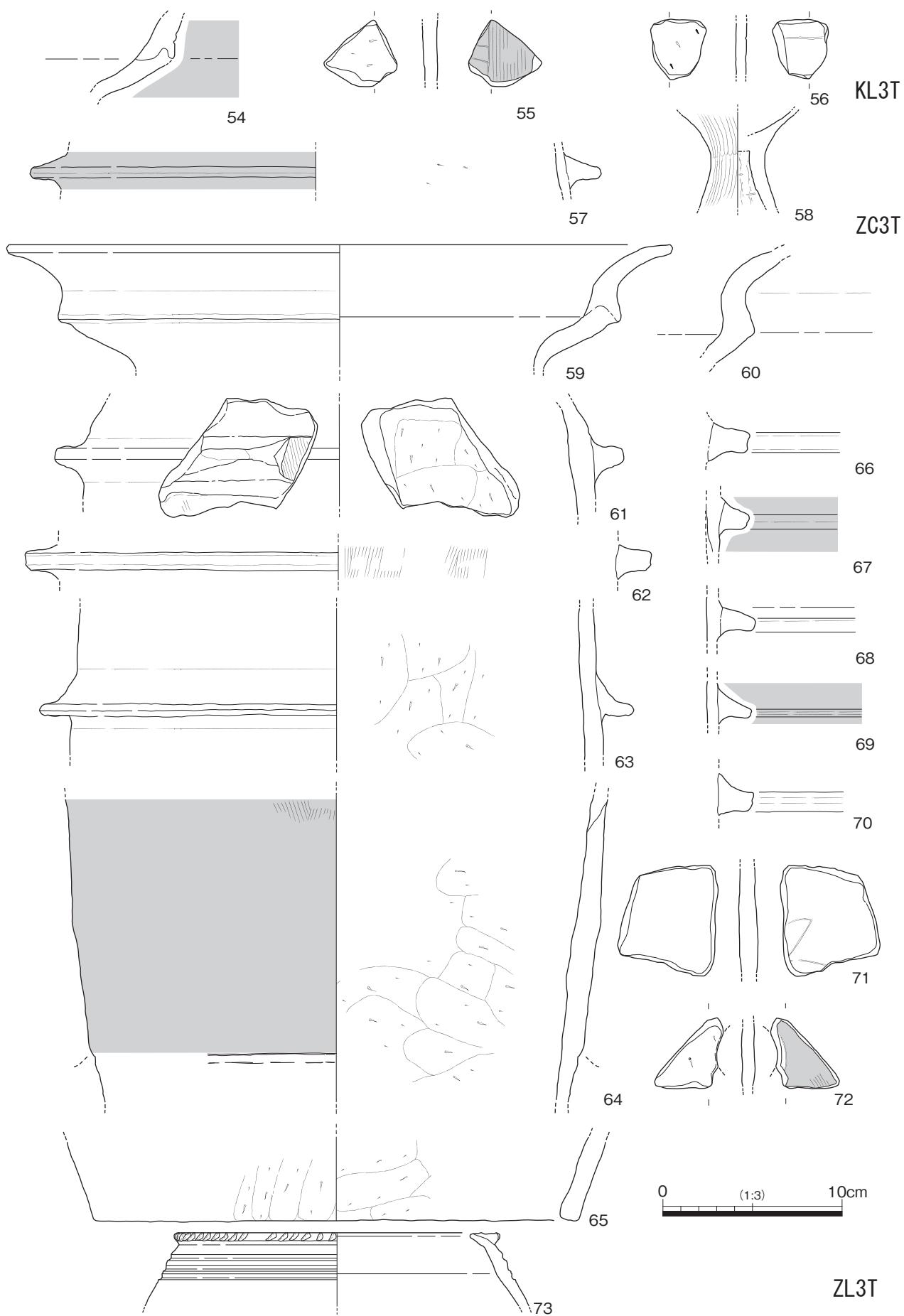


図 54 KL3T・ZC3T・ZL3T 出土埴輪・弥生土器



図 55 ZC1T・ZL1T 出土埴輪

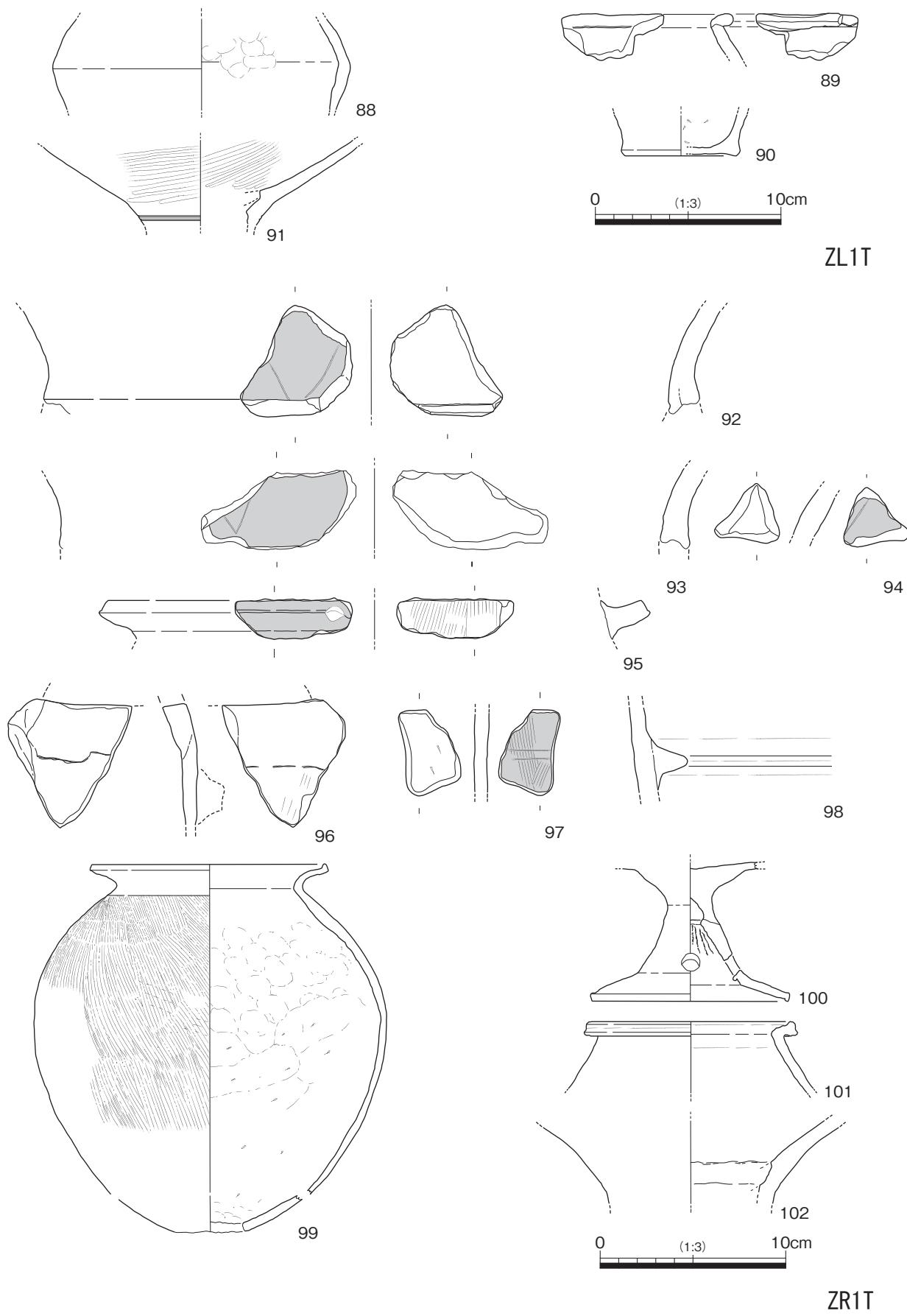


図 56 ZL1T・ZR1T 出土地輪・土師器・弥生土器

突帯から頸部に向かって一端窄まる肩部を含む資料と考えられる。円筒埴輪胴部(64)は突帯貼り付け位置に割付の沈線が施されている。貼り付け面にはベンガラとみられる赤色顔料は確認できない。65は埴輪底部片であり、外面は縦ケズリ、内面は横ケズリがみられる。66～70は円筒埴輪胴部突帯であり、断面が方形と先細りとなるものがみられる。71は円筒埴輪胴部片。資料の上下方向の捉え方は検討の余地があるが、外面に山形のヘラ描きによる線刻が認められる。円筒埴輪胴部片(72)は円形、あるいは巴形の透孔が認められ、外面に透孔に沿った1条のヘラ描き沈線が確認できる。

**弥生土器** 73は無頸壺の口縁部片。外面に凹線文帯、口縁端部に刻目突帯を貼り付ける。弥生中期後半期の所産であり、築造に伴う混入品と考えられる。

#### Z C 1 T 出土遺物

本トレンチは前方部頂に設定されており、埴輪片と土器片が少量出土しているが、円筒埴輪口縁部片(74)のみ図化している。

**埴輪** 円筒埴輪口縁部片(74)は口縁部中程の反転部分の擬口縁部分で剥離しており、外面にはベンガラとみられる赤色顔料が付着している。

#### Z L 1 T 出土遺物

本トレンチは前方部前端面に設定されている。本トレンチ東側のZ R 1 T及びその間の拡張区は、各トレンチの中でも最も埴輪の出土量が多く、760点程の破片が確認できる。75～91は本トレンチ出土遺物である。

**埴輪** 75～81は円筒埴輪の口縁部から頸部片である。75.77は口縁端部が残存する資料であるが、75は口縁端部が強いヨコナデによって面取りされており、他の出土資料の中でも異質な存在である。76.77.79.80にみられるように、口縁部中程の反転部で剥離することにより擬口縁が観察される資料が多くみられる。81は頸部が残存している資料で、内傾気味に立ち上がる形態をもつ。82.83は円筒埴輪胴部片。82は細身で先細りの突帯、83は方形に近い突帯を上向きに施す。84～86の円筒埴輪胴部片は、外面に撥形、山形意匠のヘラ描きによる線刻が認められる。円筒埴輪胴部片(87)は、内面の上方向のケズリから上下を推定した資料で、小型の巴形、あるいは円形の透孔が残存している。

**弥生土器** 88は弥生土器壺胴部片。弥生土器甕(89)は断面円形の粘土帯を貼り付けることで口縁部を作出しており、ヨコナデ調整が確認できない異形品である。90は弥生土器甕底部片。91は弥生土器台付鉢の鉢部から脚部の小片であり、内面には円盤充填技法が確認できる。調査段階の速報や概報時の記載を参考にすると、これらの資料は墳丘盛土下位の古土壤に含まれていた資料であるか、築造に伴い盛土内に混入した資料と考えられる。

#### Z R 1 T 出土遺物

本トレンチは前方部前端面に対してZ L 1 Tに並行する形で設定されたトレンチである。

**埴輪** 92～94は円筒埴輪口縁部片で、反転する口縁部外面にヘラ描きによる山形文がみられる。本墳出土の円筒埴輪の口縁部において、山形文が確認できる資料は、本トレンチとZ L 1 Tとの間の拡張部分に限られるため、接合点は確認できなかったものの、これらは同一個体である可能性が高い。円筒埴輪胴部突帯片(95)は、復元される傾きからみて、最上段の突帯となると考えられ、擬口縁となる内面には胴部外面からの転写による縦ハケが確認できる。円筒埴輪胴部片(96)は、内傾接合を根拠として上下を推定した資料であり、外面の下部には突帯貼り付けに伴う割付の沈線、資料上端には三角形とみられる透孔が確認される。円筒埴輪胴部片(97)は、外面に2条の並行するヘラ描きによる線刻がみられる。98は先細りで細身の突帯を施す円筒埴輪胴部片である。

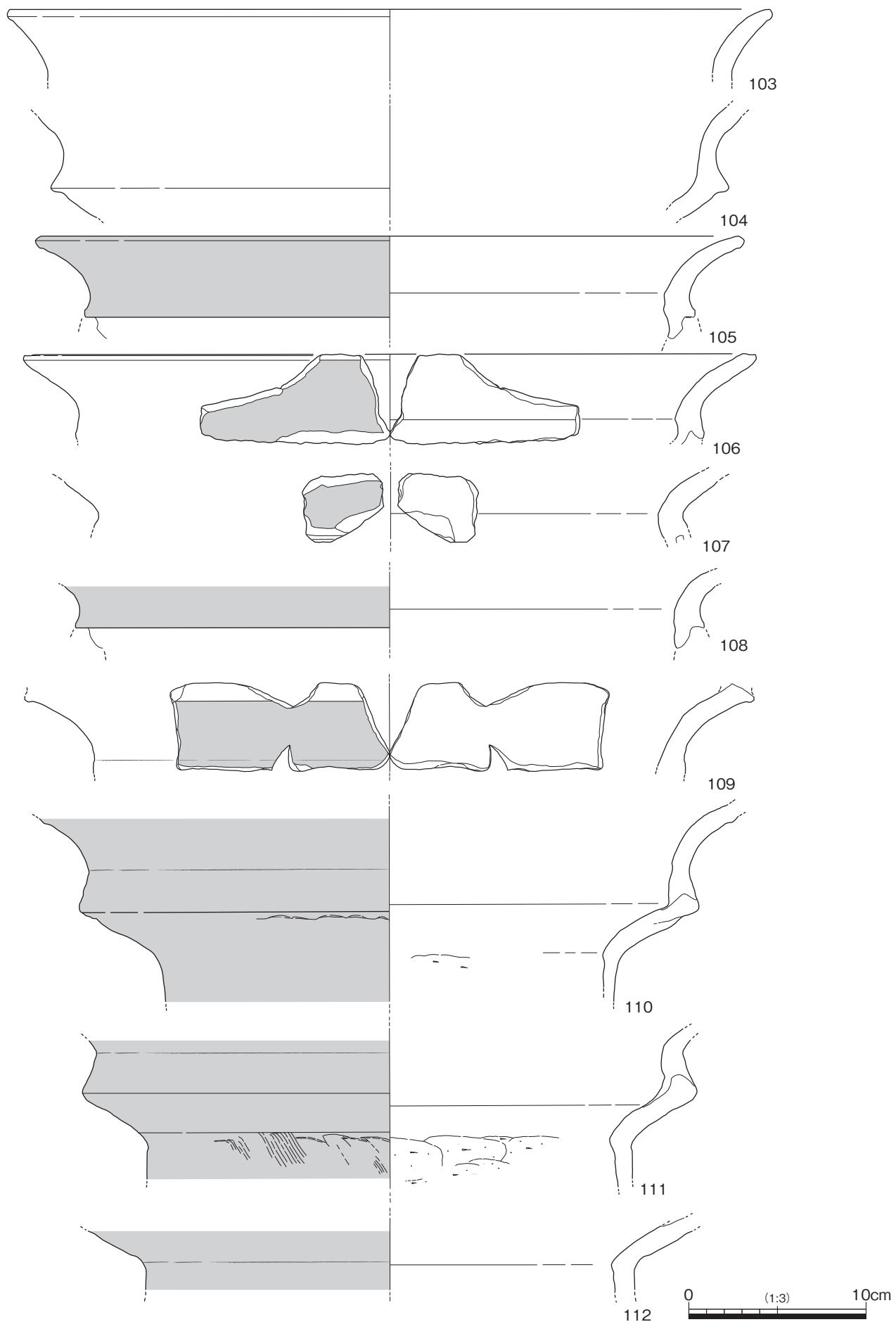


図 57 ZL1T・ZR1T 間拡張区出土埴輪 (その 1)

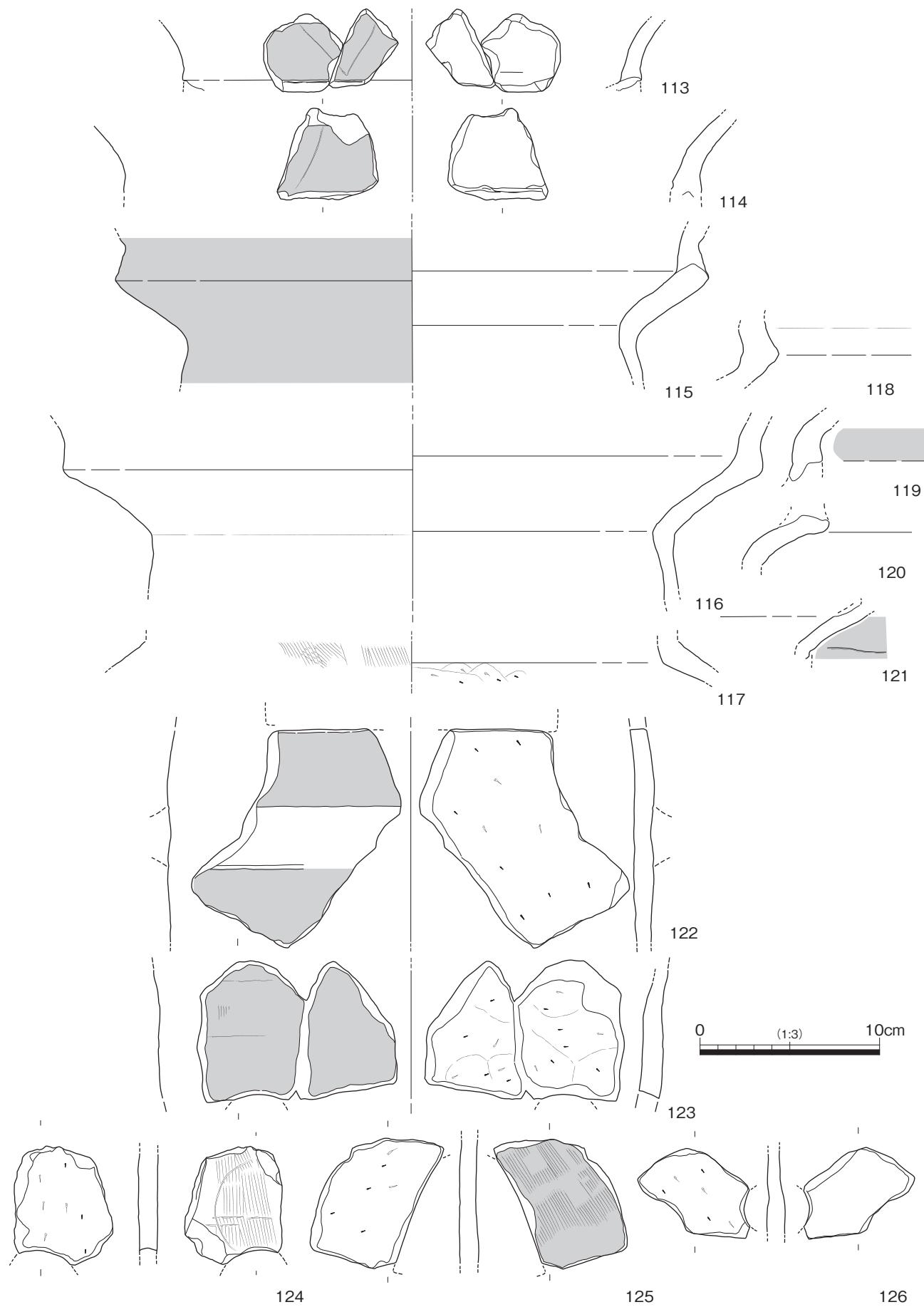


図 58 ZL1T・ZR1T 間拡張区出土埴輪(その2)

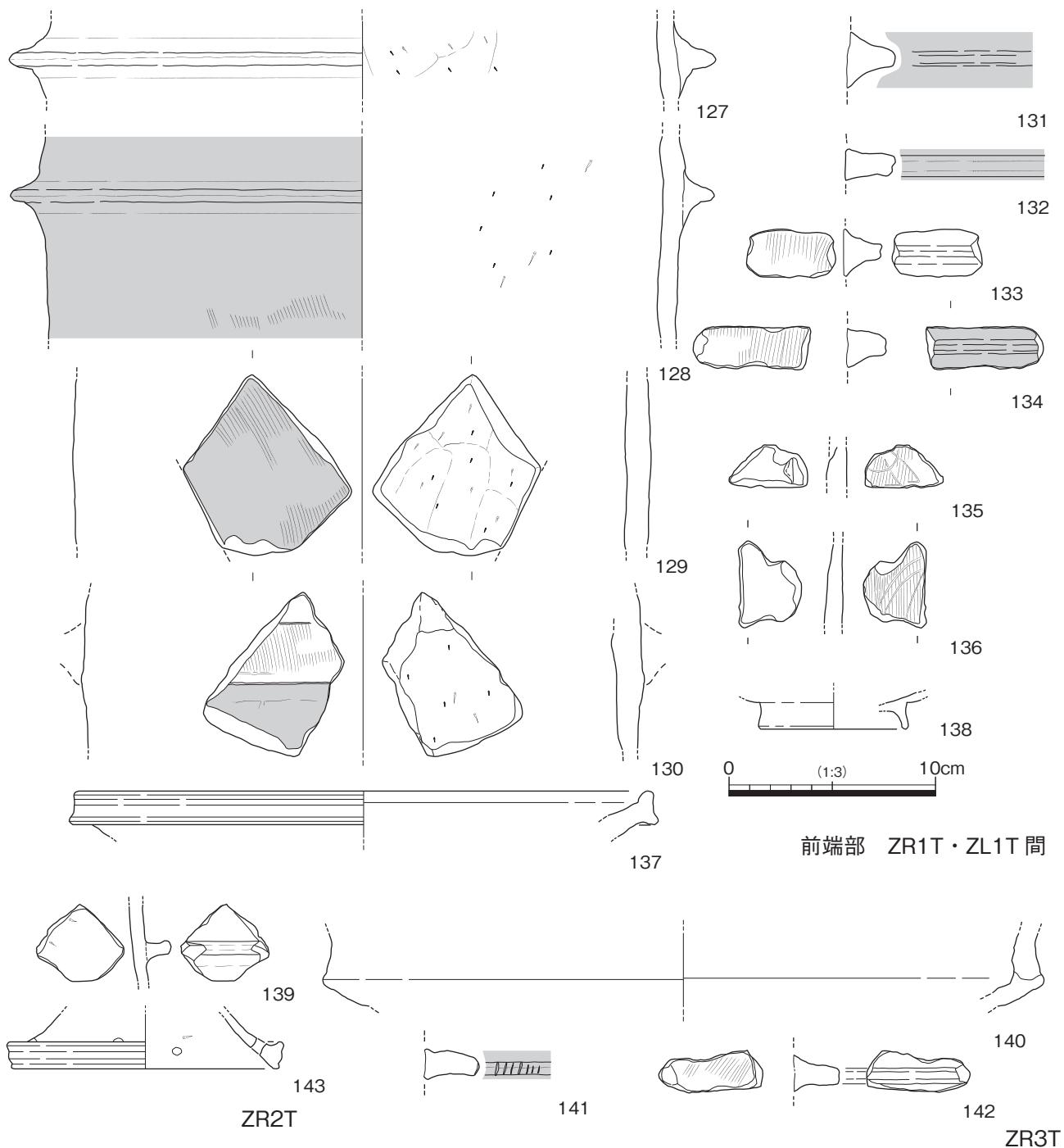


図 59 ZL1T・ZR1T 間拡張区・ZR2T・ZR3T 出土埴輪・土師器他

**土師器** 土師器甕(99)はトレンチ東部の石材が集中する箇所において出土している(図15)。土圧により細片化しているものの、接合状況や破片数からみて、完形品であったと考えてよい。樹立等の原位置を保ったものではないが、完形で出土している点は周辺で出土している他の土器片とは大きく異なるため、近接した位置にある前方部の墳丘上面や墳裾部から移動を受けた資料と考えたい。また、口縁部から胴部下半部の途中までは接合による復元可能であったが、一定程度の法量をもち同一個体と考えられる破片がある。この破片は、外面のハケを丁寧にナデ消し、内面のケズリの下位に指オサエが集中する特徴をもつ。加えて、破断面が円形に廻ることから、これを焼成後に打ち欠き穿孔が行われた底部と解釈し、図上で復元を行い提示した。口縁部は強いヨコナデにより跳ね上げられ、胴部は上半部に最大径があることから肩の張ったものである。外面の縦ハケの

下位には、平行タタキが看取される。内面には上半部を中心に指オサエが集中し、下半部はこれを切る縦ケズリによって仕上げられている。形態・調整からみて、本地域における弥生後期以降継続する伝統的な甕形式と考えができる。土師器高杯(100)は、土師器甕(99)の西側で出土したもので、脚部を中心とした残存をみる。

**弥生土器** 101は弥生土器甕、102は弥生土器台付鉢の鉢部から脚部の小片である。弥生中期末葉から後期前葉の所産と捉えられ、古墳築造以前の資料と考えられる。

#### Z R 1 T・Z L 1 T間出土遺物

本トレンチは、前端部の墳丘主軸に並行して設定されたZ R 1 T・Z L 1 Tを繋ぐ形で調査範囲を拡張したものである。埴輪片だけでも490点の出土をみており、調査範囲内では最も遺物が集中する。

**埴輪** 103～121は、円筒埴輪口縁・頸部片である。いずれも頸部からやや内湾気味に外側に開き擬口縁を形成した後、そこから更に外側へ大きく反転する形態をもつ。口縁端部が残存している資料は限られるが、103.105.106をみるとその形態は一様ではない。頸部から口縁部片とみられる110.111は、外面に縦ハケ、内面に横ケズリが看取され、胴部から連続するケズリ調整と形態の変化点の一致をみることができる。113.114は同一個体の可能性が高く、口縁部外面にヘラ描きによる山形文を施している。本トレンチに隣接するZ R 1 T出土分を含めて、口縁部外面に山形文が施される資料は、前端部に限られる。

円筒埴輪胴部片(122)は、破片上部に方形透孔と中央に突帯が剥落した帶状部がみられる。剥落部には突帯貼り付けに先行する割付の沈線が観察される。円筒埴輪胴部片(123)は、破片下端に巴形、あるいは円形の透孔が認められる。124は破片下端に巴形、あるいは円形の透孔があり、透孔の上部となる外面には円弧状のヘラ描文が認められる。125は調整や破片の形状から、三角形の透孔をもつ胴部片として図示したが、方形透孔となる余地がある。円筒埴輪胴部片(126)は巴形、あるいは円形の小さな透孔をもつ。

円筒埴輪胴部片(127.128)は先細りの突帯をもつ。129は調整・破片形状からみて、三角形の透孔をもつ資料と判断した。円筒埴輪胴部片(130)は突帯剥落部分に縦ハケと貼り付けに伴う割付の沈線が確認できる。131～134は突帯片。135.136の外面にはヘラ描きによる線刻が認められる。

**広口壺形埴輪** 137は広口壺形埴輪の口縁部片と考えられ、胎土中に雲母・角閃石を多く含む。本地域における弥生後期から継続する形式であり、古墳前期初頭には底部穿孔が行われ、墳頂・墳裾に圓郭配列されることで壺形埴輪と同様に使用されるものである。口縁部のみの出土となるが、本墳の築造時期を推定する重要な資料であり、第4章第2節で検討を加える。

**緑釉陶器** 138は緑釉陶器碗である。前端部からはこれ以外にも古代と考えられる須恵器片が出土しているが、明確な遺構形成は確認できていない。

#### Z R 2 T出土遺物

本トレンチは前方部南側面に設定されたもので、出土した遺物量は少なく、埴輪は8点の出土に止まっている。

**埴輪** 139は円筒埴輪の胴部片である。本墳の他の埴輪と比較して、器壁及び突帯の厚み、形状などに特異な印象を受ける。胎土には目立った特徴はみられない。

**弥生土器** 143は弥生後期前葉の高杯の脚部片である。墳丘築造に伴い、混入した資料と考えられる。図化は行っていないが、本トレンチより数十片の弥生土器が出土している。

**鉄器** 176～178はU字形鋤・鍬先である。177のみ錆膨れにより厚みをもつが、これら3点は同一個体の可能性が高い。179は曲刃鎌である。これら資料の出土層位及び状態は不明であるが、古墳中期以降に位置付けられるものであり、古墳築造後の墳丘の二次的な改変や、第Ⅲ主体部等の小規模な埋葬施設の年代が下ること

を示唆するものである。

#### ZR3T出土遺物

括れ部寄りの前方部南側面に設定されたトレンチからの出土遺物である。

**埴輪** 140は円筒埴輪口縁部片である。口縁部途中での反転部に残された擬口縁の様態は、他の資料と異なるものである。141は円筒埴輪突帯片であり、突帯上面に細い刻目がみられる。本書での報告資料の中に、本資料以外に刻目をもつものはみられないが、金刀比羅宮に保管されている寺田貞次氏資料に確認できる(大久保1996)。口縁部形態とともに、船岡山古墳との類似性を示す資料となる。142は突帯片であり、やや細身ながらも明瞭に突出する形態を留める。

#### 前端部敷石状遺構出土遺物

前方部端を示すカット面や基底列石から東へ約2.5m離れた位置で北西から南東方向に検出された石材群に伴う資料である。埴輪片は、大きく二か所に分かれて集中して出土しているが、出土レベルは地山面からやや浮いた位置にあり、石材の下位で検出された破片も見受けられることから、樹立されたものではなくまた、高杯(149.150)は、調査概報の記載や遺物注記から、これらの石材・埴輪に伴って出土していると考えられるが、現状で正確な位置を推定することは困難である。

**埴輪** 144.145は円筒埴輪口縁部片。擬口縁下の形態に違いがみられることから別に図示したが、同一個体の可能性もある。146.147は円筒埴輪胴部でも下部の破片である。接点は確認できなかったが胎土・ハケ原体からみて同一個体と考えられる。146は突帯が剥落しているとともに、貼り付けに伴う割付の沈線がみられる。147は底部片であり、外面を縦ハケ後、縦ケズリで仕上げる。内面は、器表面が荒れているために調整の観察が困難である。また、底部(147)の上端の器壁がやや薄くなる状況が看取されることから、ほぼ近い位置に第1段目の突帯を想定することができる。この場合の底部端から突帯第1段までの間隔は25~30cmと想定できよう。148は円筒埴輪胴部片。外面にヘラ描きによる線刻が認められる。

**土師器** 149.150は椀形高杯であり、砂粒を殆ど含まない精良な胎土が使用されている。本地域の古墳前期における椀形高杯は知られていないが、埴輪片と組み合って出土しているのならば、本墳に伴う資料として考えておきたい。

#### 詳細な出土位置が不明な資料

151~172は、香川県埋蔵文化財センターに保管されていた28ℓ入コンテナ2箱分の資料であり、高松市茶臼山古墳のラベル記載があるものの、トレンチ等の細かな出土位置を特定できない一群である。香川県立ミュージアム旧保管資料と接合する資料はみられなかったが、胎土や形態に差異はみられないことから、本墳出土資料として取扱う。

**埴輪** 151~153は円筒埴輪口縁部片である。151は傾きや端面の状況から、口縁端部が残存する数少ない資料となる。154.155は頸部片、156~158は頸部から肩部片とみられる。156は内面のケズリは確認できないものの、屈曲点をもつことから、頸部から肩部の破片と考えた。156は157と同様の形態をもつ小片で、肩部に三角形の透孔が認められる。158の残存範囲において、突帯剥落部は観察されない。円筒埴輪胴部片(159)は、明瞭に突出する断面方形の突帯の上端部を摘み上げる。円筒埴輪胴部片(160)の下端には、巴形、あるいは円形とみられる透孔がある。但し、円弧から復元される透孔の直径は、他の資料と比べて大きい。円筒埴輪胴部片(161)は突帯の剥落部に下地の縦ハケと、貼り付けに伴う割付の沈線がみられる。

円筒埴輪胴部片(163)の上端に残る透孔は、輪郭からやや丸みをもった三角形の透孔をもとと推定しておく。円筒埴輪胴部片(164)は、方形の透孔をもつ。165は、胴部外面に突帯貼り付けに伴う目安の沈線を境にして、

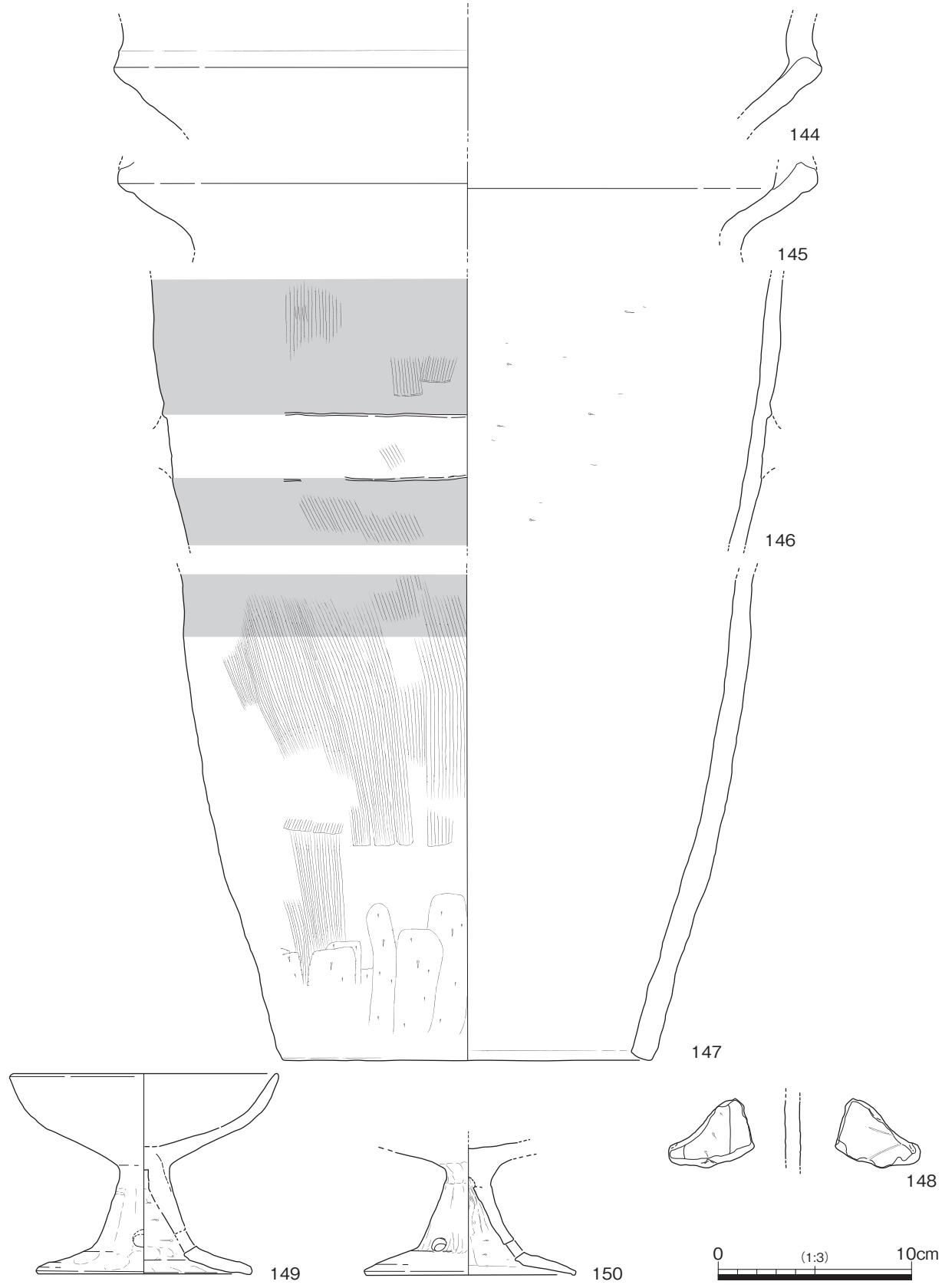


図 60 前端部敷石状遺構出土埴輪・土師器

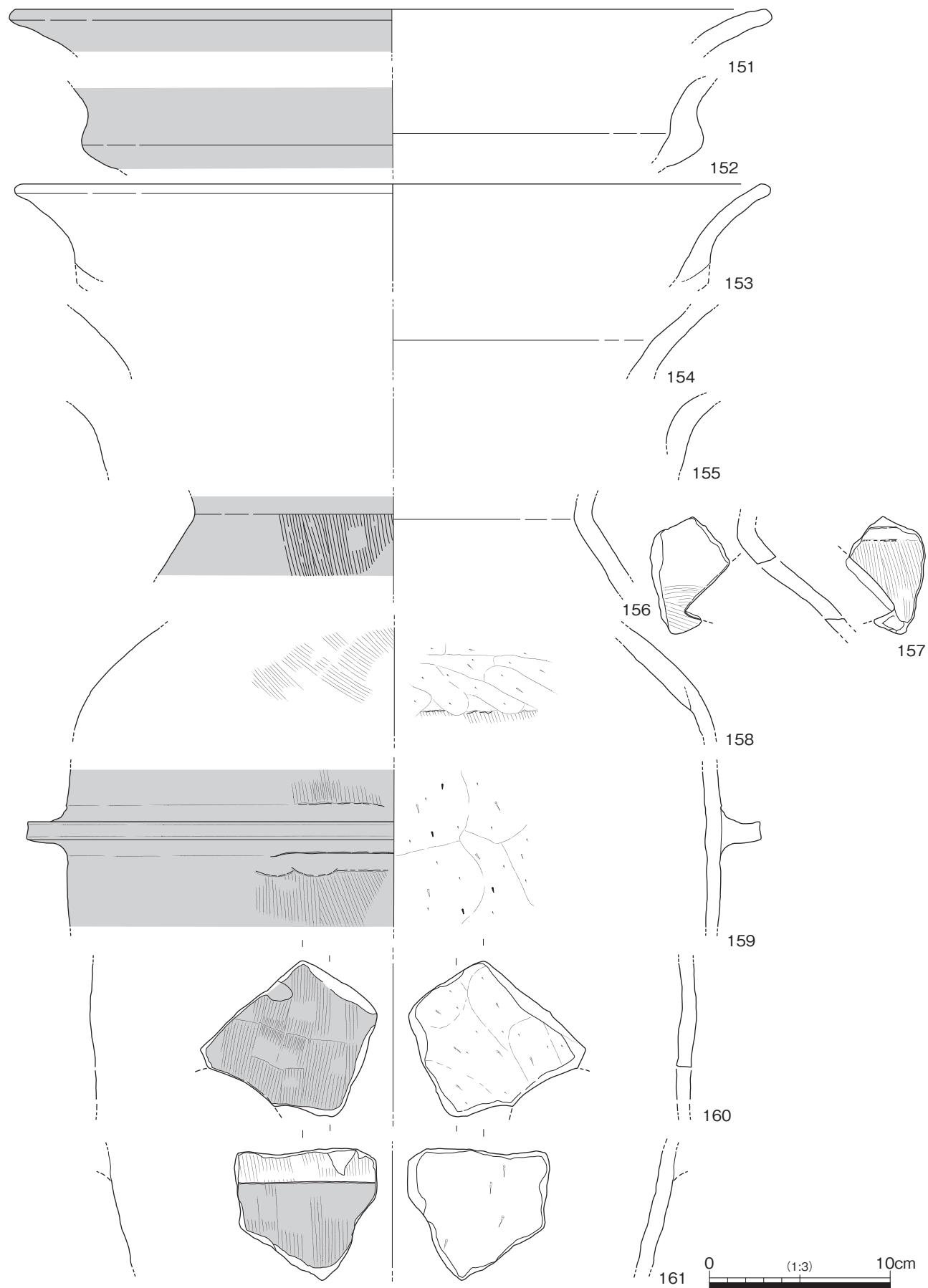


図 61 出土位置不明の埴輪(その 1)

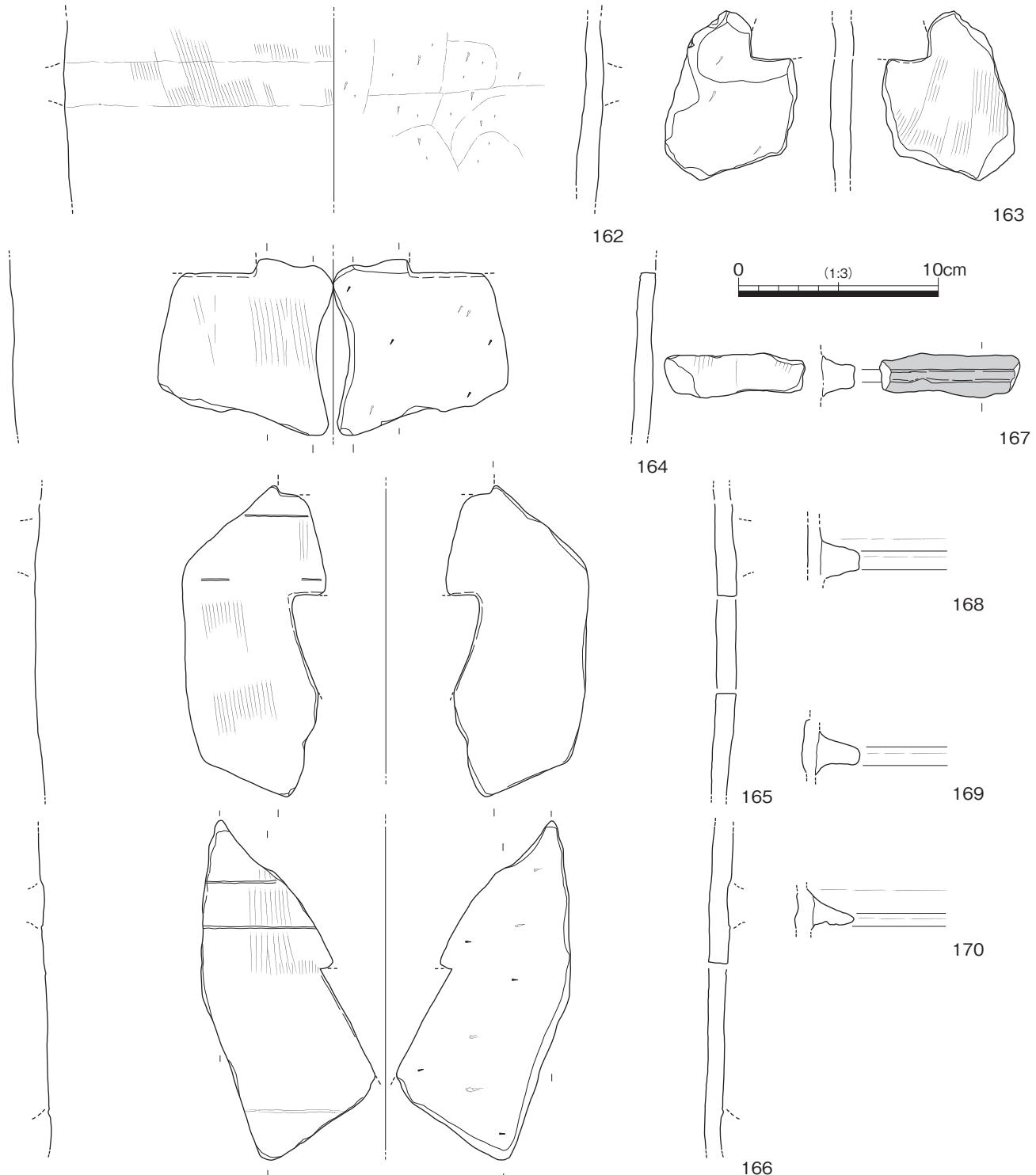


図62 出土位置不明の埴輪(その2)

透孔がある。突帯貼り付け位置から透孔までの間隔は同様ではない。下段は三角形の透孔とみて差し支えないが、上段の透孔の形態は確定できない。円筒埴輪胴部片(166)は突帯貼り付けに伴う割付の沈線が上下に存在することから、突帯間隔を推定できる唯一の資料となる。突帯の間隔は、約10cmと推定できるが、これを超えた数値を想定しなければならない資料も存在することから、胴部突帯の間隔が各段や個体毎においてバラツキがあったと考えられる。171.172は円筒埴輪底部付近の資料である。外面は縦ハケ後、縦ケズリ、内面は縦ハケ後、ケズリで仕上げる。両者とも、底部に向かって窄まりをみせ、残存範囲で第1段目の突帯及びその剥落痕は確

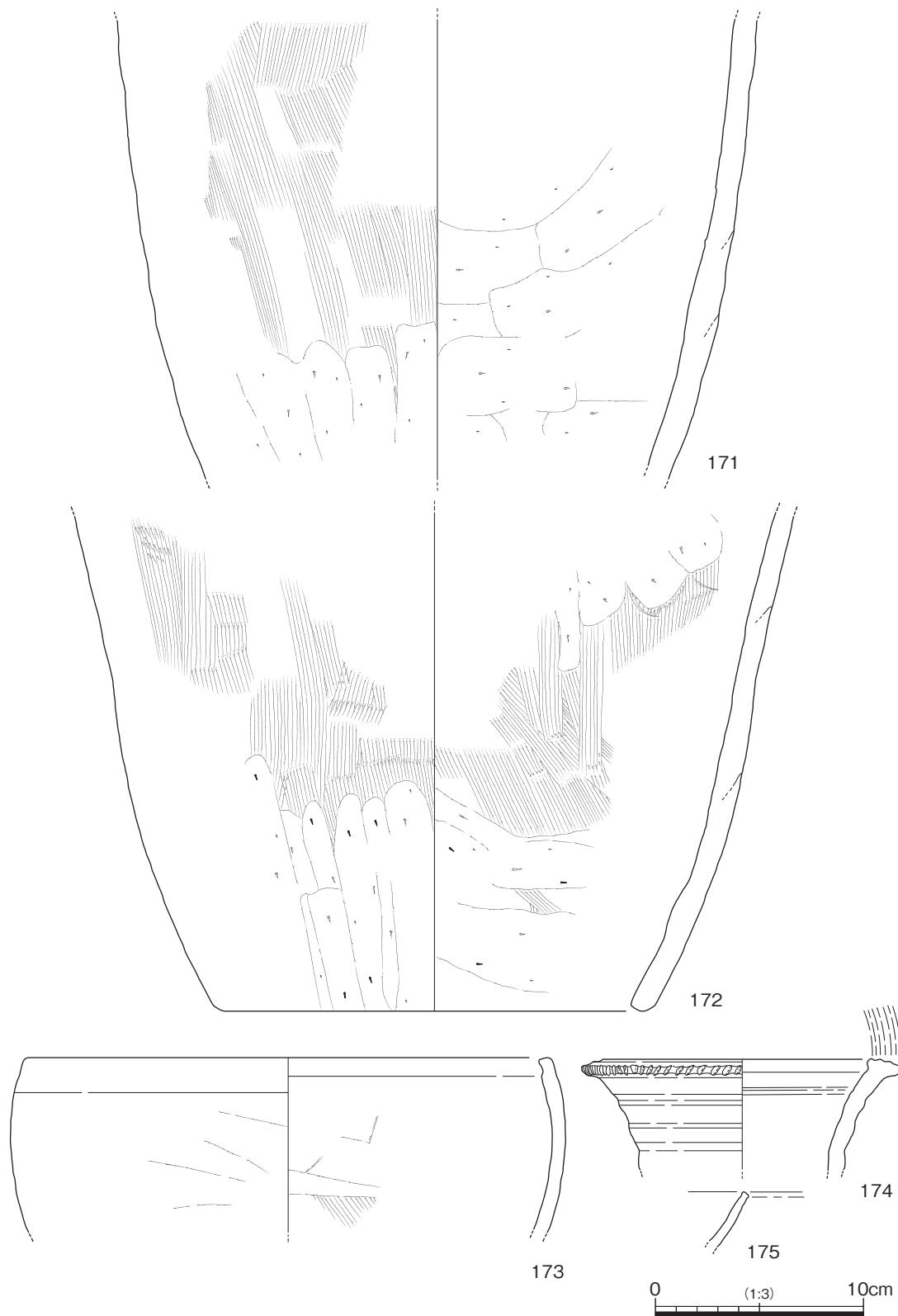


図 63 出土位置不明の埴輪(その3)及び後円部上出土遺物他

認できない。

**弥生土器・土師器** 173は弥生土器鉢である。大型鉢となるが形態からみて、甕の上半部を切断した直口形態とみられる。出土位置や層位は特定できない。弥生土器長頸壺(174)は後円部の墳頂上から出土している。墳

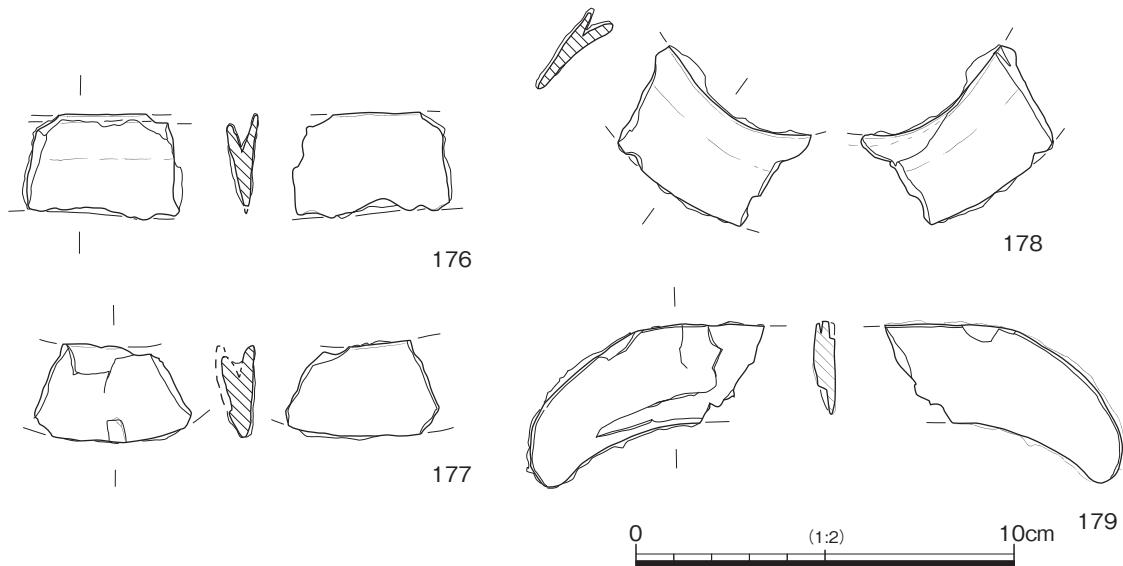


図 64 ZR2T 出土鉄製品

丘築造に伴う混入品と考えられる。175は口縁端部の形態や強いヨコナデが見られないことからみて、土師器鉢と考えられる。同じ口縁端部形態をもつ鉢は、第I主体部裏込からの出土資料(29)にもみられることから、本墳に伴う資料である可能性が高い。

大久保徹也 1996「第5章まとめ第2節円筒埴輪」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二十五冊 中間西井坪遺跡 I』香川県教育委員会他  
池淵俊一 2003「刀剣・矛・戈・ヤリ・素環頭刀」『考古資料大観7 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』小学館